

# 法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡

2016年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡

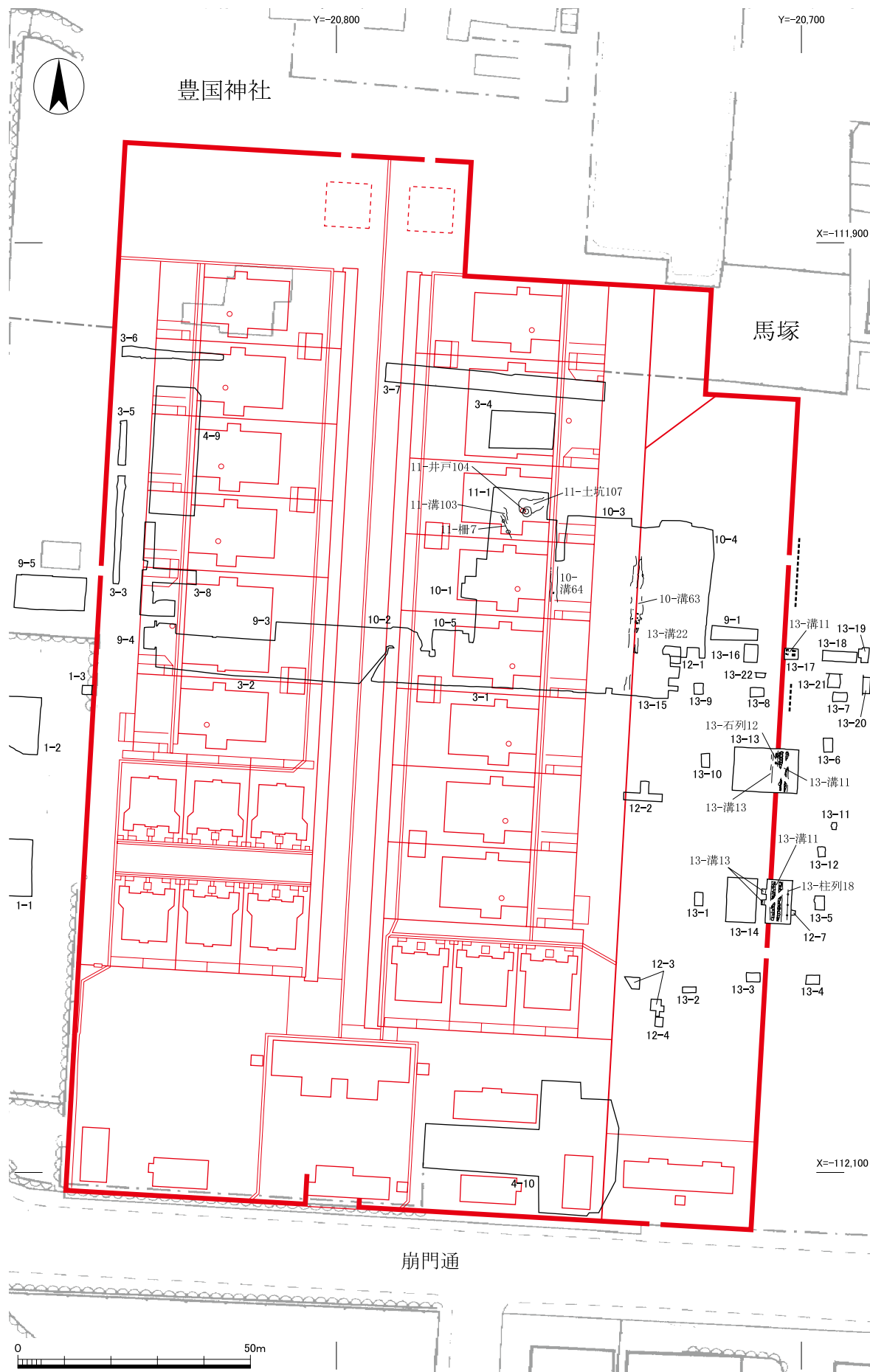
2016年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

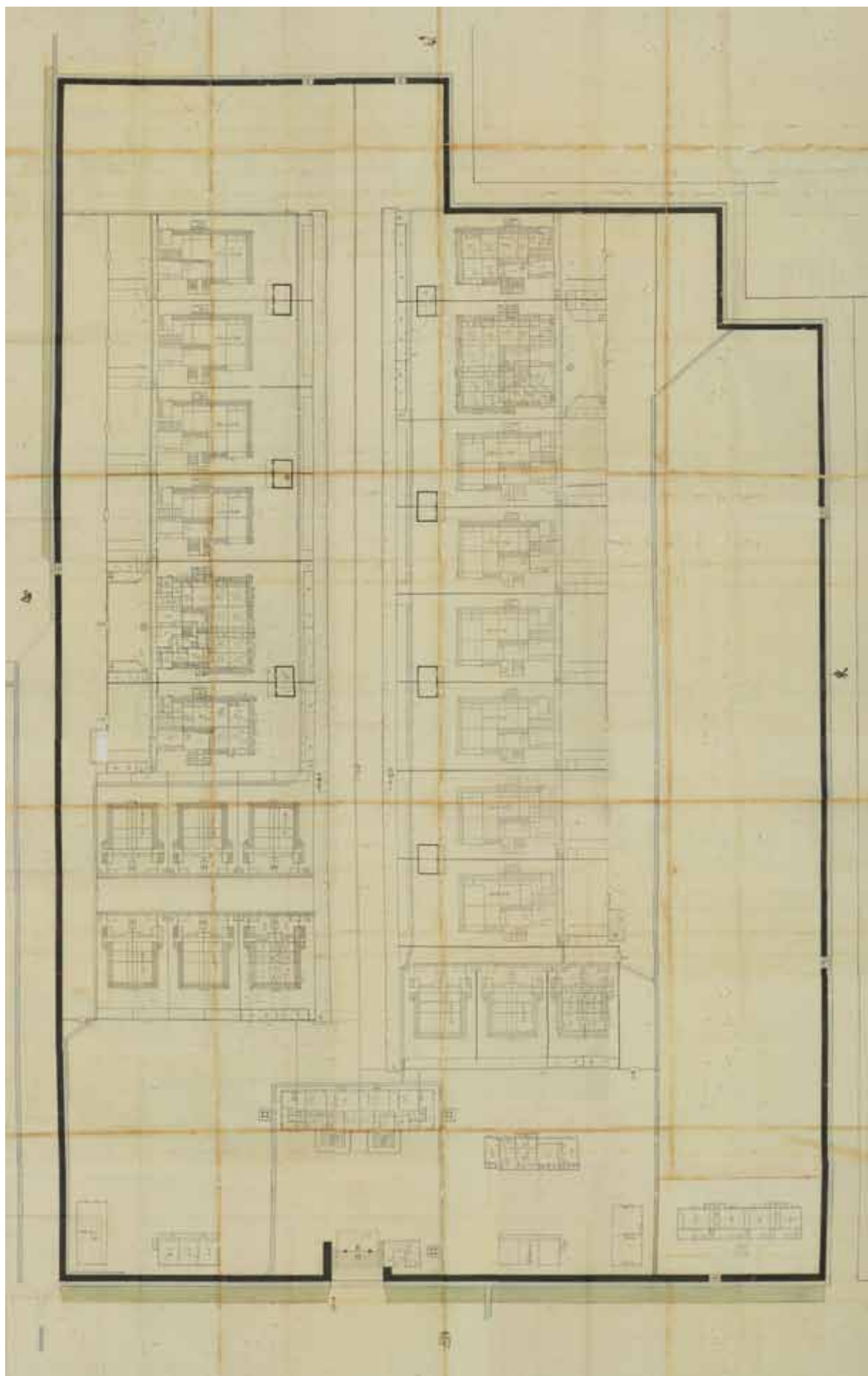




15区第2面全景（北東から）



恭明宮指図と明治時代遺構概要図 (1 : 1,200)



「恭明宮造営出来形絵図」『中御門家文書恭明宮関係書類』（早稲田大学図書館蔵）

# 序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、京都国立博物館本館の免震改修工事に伴う法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

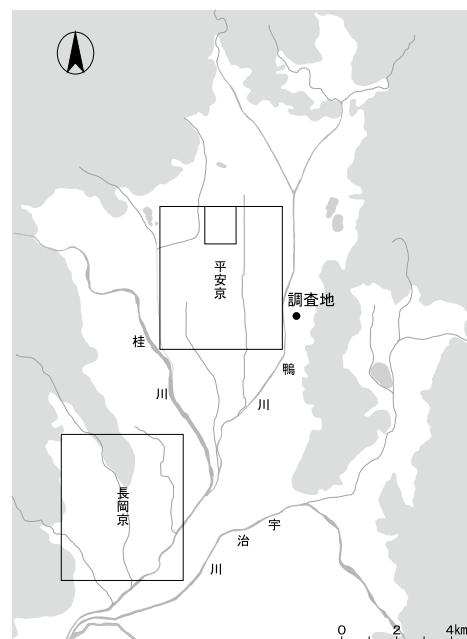
平成28年3月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
所 長 井 上 満 郎



# 例 言

- 1 遺 跡 名 法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡（文化財保護課番号 10 S 038）
- 2 調査所在地 京都市東山区茶屋町527番地
- 3 委 託 者 独立行政法人 国立文化財機構 京都国立博物館  
分任契約担当役 副館長 伊藤嘉章
- 4 調査期間 2015年7月13日～2016年3月29日
- 5 調査面積 643㎡
- 6 調査担当者 上村和直・辻 裕司・山下大輝
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「五条大橋」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。「5. まとめ」では、遺構番号の前に調査次数を付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 上村和直・山下大輝
- 14 執筆分担 上村和直：1、2 - (2)、3 - (1)～(4)、5 - (1)・(3)  
山下大輝：1、2 - (1)～(3)、3 - (5)、4、5 - (2)
- 15 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。



(調査地点図)

# 目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	1
2. 位置と環境	4
(1) 地理的環境	4
(2) 歴史的環境	4
(3) 周辺の調査	10
3. 遺 構	13
(1) 基本層序	13
(2) 遺構の概要	14
(3) 本館床下調査の遺構（1～12・21・22区）	15
(4) 本館中庭調査の遺構（13・14区）	20
(5) 本館北側調査の遺構（15～20区）	24
4. 遺 物	35
(1) 遺物の概要	35
(2) 土器類・ガラス製品	35
(3) 瓦 類	38
(4) 煉 瓦	43
(5) 石製品	43
5. ま と め	44
(1) 中世以前	44
(2) 安土桃山時代から江戸時代前期	46
(3) 明治時代以降	48

# 図 版 目 次

- 巻頭図版 1 15区第2面全景（北東から）
- 巻頭図版 2 恭明宮指図と明治時代遺構概要図（1：1,200）
- 巻頭図版 3 「恭明宮造営出来形絵図」『中御門家文書恭明宮関係書類』（早稲田大学図書館蔵）
- 
- 図版 1 遺構 13区平面図（1：100）
- 図版 2 遺構 13区断面図（1：80）
- 図版 3 遺構 14区平面図（1：100）
- 図版 4 遺構 14区断面図（1：80）
- 図版 5 遺構 15区第1面平面図（1：150）
- 図版 6 遺構 15区第2面平面図（1：150）
- 図版 7 遺構 15区断面図1（1：80）
- 図版 8 遺構 15区断面図2（1：80）
- 図版 9 遺構 1 1区全景（東から）  
2 2区全景（東から）  
3 3区全景（東から）  
4 4区全景（西から）  
5 5区全景（南から）  
6 6区全景（北から）
- 図版 10 遺構 1 7区全景（東から）  
2 8区全景（東から）  
3 9区全景（東から）  
4 10区全景（北から）  
5 11区全景（南から）  
6 12区全景（南から）
- 図版 11 遺構 1 13区西半全景（北から）  
2 13区東半全景（北から）
- 図版 12 遺構 1 13区東半北壁 溝11断面（南から）  
2 14区西半全景（南から）
- 図版 13 遺構 1 14区東半全景（南から）  
2 14区東半南壁 溝11断面（北から）
- 図版 14 遺構 1 15区第1面全景（北東から）  
2 15区溝22（北から）

図版15	遺構	1	15区第2面全景（北東から）
		2	15区柱穴23・24（北西から）
		3	15区溝29（西から）
図版16	遺構	1	15区溝30（西から）
		2	15区溝30断面（西から）
図版17	遺構	1	15区柱穴27-1（北東から）
		2	15区柱穴27-2（東から）
		3	15区柱穴27-3（東から）
		4	15区柱穴27-4（東から）
図版18	遺構	1	15区柱穴28-2（東から）
		2	15区柱穴28-3（南東から）
		3	15区柱穴28-4（東から）
		4	15区柱穴28-5（北東から）
図版19	遺構	1	15区北西部東西断面（北西から）
		2	16区全景（北西から）
図版20	遺構	1	17区全景（北西から）
		2	18区全景（東から）
図版21	遺構	1	19区全景（南東から）
		2	20区全景（北東から）
図版22	遺構	1	21区全景（東から）
		2	22区全景（東から）
図版23	遺物		土器類・ガラス製品
図版24	遺物		瓦類・煉瓦

## 挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：5,000）	1
図2	調査区配置図（1：800）	2
図3	15区調査前全景（東から）	3
図4	本館床下調査状況（東から）	3
図5	15区調査状況（北東から）	3
図6	15区現地説明会状況（東から）	3
図7	京都国立博物館構内調査区配置図（1：2,500）	10

図8	基本土層模式図（1：50）	13
図9	1～4区実測図（1：80）	16
図10	5～8区実測図（1：80）	17
図11	9～12区実測図（1：80）	18
図12	21・22区実測図（1：80）	19
図13	13区溝11実測図（1：50）	21
図14	14区溝11実測図（1：50）	23
図15	15区南北断面図（1：60）	26
図16	15区回廊26及び10次調査区南回廊実測図（1：100）	27
図17	15区溝30実測図（1：80）	28
図18	15区柱穴23・24・35～38実測図（1：50）	29
図19	15区土坑33実測図（1：50）	30
図20	16・17区実測図（1：80）	32
図21	18～20区実測図（1：80）	34
図22	土器類・ガラス製品実測図（1：4）	36
図23	軒瓦拓影及び実測図（1：4）	39
図24	軒瓦・煉瓦拓影及び実測図（1：4）	41
図25	瓦・煉瓦・石製品の刻印拓影（1：2、63のみ1：4）	42
図26	平安時代の遺構概要図（1：1,500）	44
図27	鎌倉時代から室町時代の遺構概要図（1：1,500）	45
図28	安土桃山時代から江戸時代の遺構概要図（1：1,500）	47
図29	江戸時代から明治時代の遺構概要図（1：1,500）	49

## 表 目 次

表1	法住寺殿・方広寺・恭明宮関連略年表	6
表2	京都国立博物館構内調査一覧表	11
表3	遺構概要表	14
表4	遺物概要表	35

# 法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡

## 1. 調査経過

### (1) 調査に至る経緯

京都市東山区茶屋町527番地に所在する京都国立博物館は、本館の免震改修工事を計画した。これを受け、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）は、当地が法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡などにあたることから、発掘調査の実施を指導した。

発掘調査は、京都国立博物館から公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託され、文化財保護課の指導により実施した。

発掘調査の目的は、既往の調査成果から考え、法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡及び恭明宮に関係した遺構の確認と当地の変遷を明らかにすることである。また、下層では、弥生時代・古墳時代の遺構の存在も想定できたため、それについても合わせて確認することとした。

### (2) 調査の経過

#### 1) 1～12区（本館床下調査）

調査区は、本館の床下に設定し、合計12箇所である。各調査区の規模は、幅2m、長さ3～4m

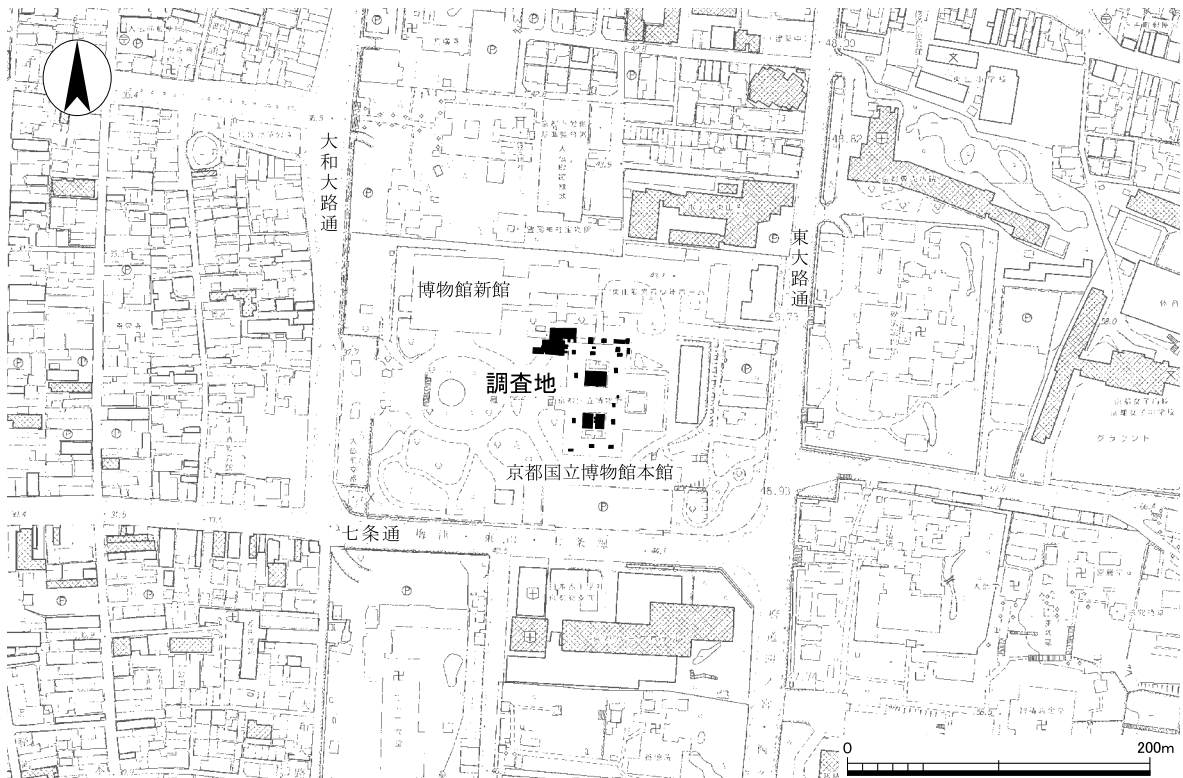


図1 調査位置図（1：5,000）

である。

各調査区の発掘調査は、人力掘削により実施した。調査では、遺構面または地山面を検出し、遺構の調査を行った後、写真撮影及び平面実測を実施し、記録を行った。最後に壁面沿いに断ち割り調査を行い、堆積状況を確認し、断面の写真撮影・実測などを実施した。

発掘調査は、2015年7月13日から開始し、9月9日に作業を終了した。

## 2) 13・14区 (本館中庭調査)

調査区は、本館にある2箇所の中庭に各1箇所ずつ設定した。各調査区の規模は、いずれも南北9.5m、東西14mの長方形である。

両調査区は、排土置き場の関係から西半を先行して調査し、終了後東半の調査を実施した。発掘

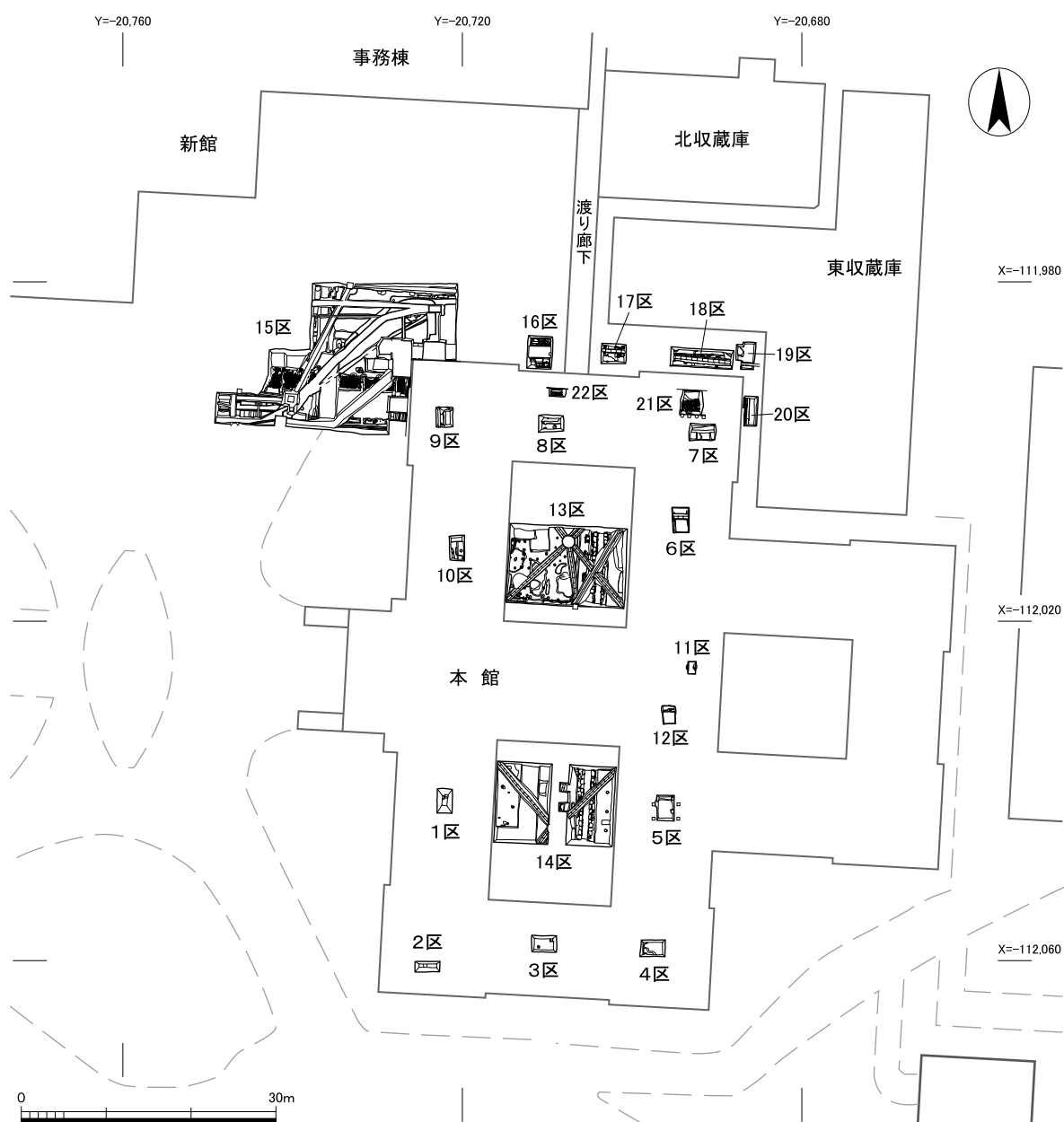


図2 調査区配置図 (1 : 800)

調査は人力掘削により実施した。調査では、遺構面及び地山面を検出し、遺構の調査を行った後、写真撮影及び平面実測を実施し記録を行った。最後に壁面沿いに断ち割り調査を行い、堆積状況を確認し、断面の写真撮影・断面実測などを実施した。

発掘調査は、2015年8月3日から開始し、2015年10月8日に作業を終了した。

### 3) 15～22区（本館北側及び床下調査）

15区は、本館の北西部に設定した。調査区の規模は、南北約18m、東西約30mである。発掘調査は現代盛土を重機で除去した後、人力により遺構の検出、掘り下げを行った。調査では、遺構面を2面確認し、各遺構面で遺構の検出、写真撮影及び平面実測を実施した。最後に壁面沿いに断ち割り調査を行い、堆積状況を確認し、断面の写真撮影・断面実測などを実施した。

また、15区で検出した方広寺関連遺構の東延長部を確認するため、追加調査を行った。本館北側に16・17・18・19・20区、本館床下に21・22区を設定し、調査を行った。いずれも人力掘削により実施し、遺構を確認し、記録を作成した。

発掘調査は2015年12月1日から開始し、2016年3月29日に作業を終了した。

江戸時代以前の遺構は保存のため、部分的な掘り下げにとどめた。なお、調査中に文化財保護課の現地指導を適時受けた。また、2016年1月23日に現地説明会を行った。



図3 15区調査前全景（東から）



図4 本館床下調査状況（東から）



図5 15区調査状況（北東から）



図6 15区現地説明会状況（東から）



## 2. 位置と環境

### (1) 地理的環境

**立地** 調査地は、京都盆地東側に位置する東山丘陵の西側裾部斜面上に立地する。調査地より西側約400mには鴨川が流れる。東側には標高196mの阿弥陀ヶ峰が位置する。

調査地の京都国立博物館は、東側を東大路通、南側を七条通、西側を大和大路通に囲まれ、北側は豊国神社に接する。京都国立博物館本館西の標高は約42.2mで、大和大路沿いの博物館西正門前で約37.7m、大和大路七条の交差点で約35.8mとなり、およそ北東から南西に向かってゆるやかに傾斜する。本館付近と北側の豊国神社付近の標高は、いずれも約42.8mで平坦である。また、博物館東門付近の標高は約49.73mで、本館西の標高と比較すると約7.53m高く、東大路通と本館の間には急傾斜が認められる。このような様相から、調査地一帯の旧地形は、時期は断定できないものの大規模な改変を受けていることがうかがえる。

**位置** 調査地西側の大和大路通・本町通（伏見街道）は、京都と奈良を結ぶ主要街路である。調査地南側の七条通は、平安京七条大路の東延長（七条大路末）にあたり、さら東へは渋谷越（汁谷越・久々目路）・醍醐路（滑石越）によって山科を経て東海道・東山道へと繋がる。このように調査地は、平安時代以降交通の要所であったと捉えられる。

### (2) 歴史的環境

#### 1) 中世以前

**平安時代以前** 調査地の周辺では、弥生時代・古墳時代の遺構が確認されている。博物館南側で実施された2012年調査では住居跡などを検出しており〔小檜山ほか2013〕、当地域が京都盆地の中でも早い時期から開発されたことがわかる。

**平安時代前期から中期** 永延2年（988）に、当地に藤原為光によって法住寺が造営されるが、正確な位置は不明である〔『日本紀略』永延2年正月7日条〕。発掘調査では平安時代前期から後期前半の顕著な遺構は検出されていないが、遺物は出土しており、生活が営まれたと推定できる。

**平安時代後期（法住寺殿期）** 平安時代後期には、後白河上皇によって法住寺殿が造営され、これ以降大きく開発が進む。

法住寺殿の範囲やその様子は、発掘調査及び試掘・立会調査や文献史料などから、ある程度推測できる。北は左女牛小路末（現渋谷道付近）、南は法住寺池（大谷中高等学校敷地・東山泉小学校グラウンド）・最勝光院（東山泉小学校校舎）の南側に位置する針小路末（現泉涌寺道）付近。西は法性寺路（現本町通）、東は現在の東大路通で、これより東側は傾斜地となる〔杉山1968、上村2004〕。『山槐記』永暦2年（1161）4月13日条には、「今日院有御移徒干法住寺殿、件殿四郭被籠十余町、其内堂舎大小八十余宇被壊棄」とあり、堂舎が多数存在したことが知られる。

殿域内の配置は、北側に法住寺北殿、中央部に法住寺南殿、南殿に付属して蓮華王院、南側に法

住寺池に接して最勝光院が想定できる〔杉山1962、川本1988、上村2004〕。

法住寺北殿（七条御所・七条殿）は、南辺が七条大路末で、これに面して七条殿南楼門が位置する〔『山槐記』治承3年（1179）3月7日条〕。北辺は北小路末である〔『吉記』寿永2年（1183）2月21日条〕。西辺は河原に近接したとされ〔『兵範記』嘉応元年（1169）11月25日条〕、「法性寺路」に面して七条殿西楼門が位置する〔『山槐記』治承三年（1179）正月4日条〕。殿内は「被入東西郭」とあり、東西に分かれ、西側が下御所（七条河原殿・後に棧敷殿）、東側が上御所（東御所）と呼ばれる〔『玉葉』仁安2年（1167）4月4日条〕。その後、養和元年（1181）12月13日には法住寺殿に新造御所が造られる〔『明月記』同日条〕。新御所は北小路末の南側、七条殿の東側に位置する〔『吉記』寿永2年（1183）2月21日条〕。つまり、北殿は南北一町・東西二町で、その東側に新御所が想定できる。

以上のことから、現博物館敷地は北殿の東部及び新御所付近に相当すると考えられる。

**鎌倉時代（再建法住寺殿期）** 鎌倉時代の遺構や遺物は、当地域全体としては少なくなるが、博物館敷地付近の調査では当該期の遺構・遺物を検出した。特に博物館南側の1978年の調査では多量の瓦が出土した〔古代学協会編1984〕。

建久2年（1191）には、源頼朝によって法住寺殿が再建される〔『吾妻鏡』建久2年（1191）10月1日条〕。再建された法住寺殿の範囲は、文献では不明である。

当該期の遺構・遺物については、これまで六波羅探題に関連したものと考えられていた。しかし、『吾妻鏡』承久3年（1221）6月16日の条に「相州・武州、両刺史移住六波羅館」とある。相州（北条時房）・武州（北条泰時）が入った六波羅館とは、文治元年（1185）に北条時政が入洛の際に使用した六波羅に所在した北条氏宿所の事であり、これが南北探題として使用される。北方探題の範囲は、大和大路以東の松原・五条の間、南方の探題は大和大路以東の五条・正面の間と推定される〔高橋1991、京都市編1987〕。

その後、建長元年（1249）3月23日に、蓮華王院の御堂（三十三間堂）・塔・不動堂などが焼亡し〔『百練抄』同日条〕、三十三間堂は文永3年（1266）4月27日に再建、供養された〔『一代要記』同日条〕。その後、当地域の史料は少なくなり、鎌倉時代後期から室町時代の状況は不明な点が多いが、当地の東側には妙法院が造られ、中世以降盛行し蓮華王院などもこの境内に含まれる。

## 2) 安土桃山時代から江戸時代前半（方広寺期）

**創建期方広寺** 豊臣秀吉は、天正13年（1585）頃、天正寺の造営を計画し、天正14年（1586）4月1日には大仏及び大仏殿の建立場所を当初東福寺近傍とするが、さらに同年5月12日には造営予定地を現在位置に改める〔平岡1986〕。天正16年（1588）5月15日に大仏殿居礎の儀が行われ、方広寺大仏殿造営工事が開始された〔『御湯殿上日記』〕。この様子は、「京ニハ大仏建立トテ、石壇ヲツミ土ヲ上テ、其上ニテ洛中上下ノ衆ニ餅酒シテオトラセル、事々敷フシン也云々。西国ヨリ柱モ少々出云々、富社大鳥居ノ木大坂迄來ル處、杉ニテ用ニ不立、又檜木可上ト下知也云々」とあり、当時の地業の様子を伝える〔『多聞院日記』〕。

表1 法住寺殿・方広寺・恭明宮関連略年表

時代	法住寺殿域関連事項	方広寺関連事項	恭明宮・博物館関連事項	関連事項
平安時代後期	永延2年(988)3.26藤原為光法住寺供養〔扶桑略記〕。後に焼亡。			1085法勝寺造営。 1087白河院政開始。
	天永元年(1110)頃、平正盛六波羅に私堂を造立、後拡張〔江都督納言願文集〕。			1129白河上皇死去。 鳥羽上皇院政開始。
	永暦2年(1161)4.13法住寺殿造営〔重方記〕。長寛2年(1164)12.17平清盛三十三間堂造営〔百練抄〕。			1159平治の乱。 1167平清盛太政大臣となる。
	寿永2年(1183)7.25平家六波羅邸焼亡〔玉葉〕。同年11.19木曾義仲、院御所(南殿)を襲撃〔吉記〕。			1185平氏滅亡。頼朝諸国に守護地頭設置。
鎌倉時代	建久2年(1191)2.21源頼朝、諸国に造営を課して法住寺殿再建〔吾妻鏡〕。			1192後白河死去。 源頼朝鎌倉幕府開く。
	承久3年(1221)6.16六波羅館に時房・泰時が入る(六波羅探題府設置)〔吾妻鏡〕。			1221承久の変。
	建長元年(1249)3.23蓮華王院三十三間堂など焼亡〔百練抄〕。文永3年(1266)4.27御堂供養〔一代要記〕。			1236東福寺造営。
	元徳2年(1330)頃、山科から佛光寺移転〔存覚一期記〕。元弘3年(1333)5足利高氏(尊氏)、六波羅政庁攻撃により焼亡〔太平記〕。			1333鎌倉幕府滅ぶ。 1338室町幕府開く。
室町時代	文明13年(1481)3.13法住寺殿大門・唐門など、応仁の乱で焼亡〔山科家礼記〕。			応仁年間応仁の乱。
安土桃山時代		天正13年(1585)頃秀吉が天正寺造営を計画、同年5.12予定地を現在地に選定〔兼見卿記〕。天正16年(1588)5.15大仏殿居礎の儀、大仏殿造営開始〔御湯殿上日記〕。		1585豊臣秀吉、関白となる。 1587聚楽第造営。
		天正19年(1591)8秀吉、祥雲寺造営〔雍州府志〕。	天正19年(1591)5.20大仏殿の立柱・上棟〔晴豊記〕。	1591御土居造営。
		文禄5年(1596)⑦.13大仏殿ほぼ完成するが、地震により大仏・築地大破〔義演准后日記〕。		
	慶長3年(1598)4豊国神社・豊国廟造営〔義演准后日記〕。	慶長4年(1599)5.7豊臣秀頼大仏殿再建始める〔薩藩旧記〕。慶長6年(1601)大仏三十三間堂西之門再興〔棟札写し〕。翌年12.4鑄造中大仏から出火、大仏殿焼亡〔義演准后日記〕。		1598秀吉死去。 1600関ヶ原の戦い。 1603江戸幕府開く。
江戸時代	慶長20年(1615)6.18家康、豊国神社破却を命ず〔駿府記〕。	慶長14年(1609)春、秀頼が大仏殿再建着手〔当代記〕。慶長17年(1612)4・5頃大仏殿完成。慶長19年(1614)7.21「方広寺鐘銘事件」起きる〔駿府記〕。		1615大坂夏の陣、豊臣家滅亡。
	元禄5年(1692)8.4妙法院、現在地に帰還〔妙法院資料〕。	寛文2年(1662)4.8地震のために大仏破損、鑄潰され銅銭に。木造仏に造り替えられる〔続史愚抄〕。寛文7年(1667)修復完了〔京都御役所向大概覚書〕。		
		寛政10年(1798)7.1落雷のため本堂(大仏殿)・楼門・回廊焼亡〔甲子夜話〕。天保年間(1830～1843)半身像と仮堂を再建。		

時代	法住寺殿域関連事項	方広寺関連事項	恭明宮・博物館関連事項	関連事項
明治時代	明治3年(1870)明治政府が妙法院宝生院・日厳院など公収〔坊目誌〕。	明治3年(1870)寺地の大部分は明治政府が公収、翌年4.2鐘楼解体〔坊目誌〕。	明治2年(1869)1.20恭明宮建設を計画。明治3年(1870)建設開始、翌年5恭明宮完成〔中御門経緯日記〕。	1868明治維新、同年明治天皇東幸。
		明治8年(1875)12.25方広寺大仏殿跡に豊国神社造営命じ。翌年、場所決定〔豊国神社誌〕。	明治6年(1873)3.14恭明宮廃止〔明治天皇記〕。	
		明治12年(1879)4旧恭明宮第一局を神社に払下げる。明治17年(1884)現位置に鐘楼再建〔豊国神社誌〕。	明治11年(1878)までに入札の後、売却〔府庁文書〕。	
			明治22年(1889)5.16帝国京都博物館設置の官制公布。敷地は旧恭明宮跡地に決まる〔京博97〕。	
		明治28年(1895)3.4崩門(三十三間堂西之門)を東寺へ移築〔東寺略史〕。	明治25年(1892)4.4工事開始、3年後10.31本館完成。明治30年(1897)5.1開館。その後、京都帝室博物館と改称〔京博97〕。	1895七条通拡幅、後市電敷設。
大正			大正13年(1924)博物館を京都市に下賜し、「恩賜京都博物館」と改称〔京博97〕。	1924大正天皇結婚。
昭和		昭和48年(1973)3.28放火により方広寺焼亡。	昭和27年(1952)国に移管し、京都国立博物館と改称。昭和40年(1965)新館建設〔京博97〕。	1965法住寺殿発掘開始。1978方広寺石塁発掘調査。
平成			平成21年(2009)新館建て替えて着工。平成25年(2013)建て替え完成。翌年、平成知新館として開館。	1994博物館構内発掘調査開始。

凡例 京博97：『京都国立博物館百年史』 京都国立博物館 1997年

秀吉が建立した大仏殿は、「雨ノ大仏殿、日ノ講堂ト申スハ南都大佛殿之雨垂ハ無キ 世ニ類ヒ」、  
「京東ノ大佛殿、慶長三戌年、造リハ古奈良ノ造也」、「此造様、外側ノ柱ヲ立登セ腰蓋有リ上ノ雨  
落腰蓋ノ外へ落ル」とあることから、上重の屋根が下重の裳階屋根より大きい形式となる「雪打造」  
と呼ばれる構造であった〔『愚子見記』〕。

天正19年(1591)5月20日には、「大佛のはしら立也、一本立、事外大儀なる音也、見物共有レ  
之也」とあり、立柱・上棟が行われた〔『晴豊記』・『鹿苑日記』〕。大仏は、工期短縮のために金銅仏  
から漆喰仏に変更させた。文禄5年(1596)2月25日には、中門が立柱する。

同年閏7月13日に「慶長伏見地震」が発生した。『義演准后日記』同日条には、「大佛事、堂無為、  
奇妙々々、本尊大破、左御手崩落了、御胸崩、其外所々響在之、後光聊モ不損、中門無為、但四方  
角柱、少々サクル、其外無已大儀、三方ノ築地悉崩、或倒壊」とある。このことから、創建期方広  
寺には大仏殿・三方築地・中門が存在したことがわかるが、それ以外の施設は不明である。

創建期寺域の詳細は不明であるが、現方広寺寺域の北側・西側・南側一部に石塁が現存し、南側  
石塁は発掘調査の結果、創建期のものであることがわかっている〔京都国立博物館編1987〕。また、  
発掘調査で検出した南側石塁の東側延長部も創建期のものであることが確認されている〔網ほか  
2009〕。寺域の北辺は、再建期に拡張を行った記述がないため、創建期から変わっていないと考え

られ、北面石畳も創建期のものと推定されている〔長宗2010〕。東辺は、大和大路から東へ約220m地点に南北方向の段差があり、この付近が東辺と推定されている〔長宗2010〕。南辺は、4次調査10区で方広寺創建期と考えられる整地層が検出されていることから、現在の七条通沿い辺りと考えられる〔田中ほか2002〕。

**再建期方広寺** 地震後、豊臣秀頼によって方広寺の再建が計画される。慶長4年(1599)5月7日には、大仏殿再建の為の用材を求めている〔『薩藩旧記』〕。しかし、慶長7年(1602)12月4日に大仏殿内で鑄造中の大仏から出火、大仏は大仏殿と共に焼亡する〔『義演准后日記』〕。火災から7年後、慶長14年(1609)春には秀頼によって大仏殿復興が着手され、慶長16年(1611)4月27日立柱、翌年4・5月に完成した〔『当代記』〕。

再建期方広寺の伽藍配置は、『義演准后日記』慶長5年(1600)3月18日条に「大佛に七層塔及び講堂廻廊(ママ)以下縄張」と記される。既存の発掘調査では、大仏殿南側の回廊跡を検出し、この史料を裏付けた〔網ほか2009〕。これらのことから、再建期大仏殿は、回廊(複廊)が廻っていたことがわかり、文献史料、発掘調査成果を基に大仏殿院復元案が示されている〔長宗2010〕。

再建期寺域は、北辺と東辺は先述した創建期方広寺の段階と変わっていないと考えられる。西辺については、『義演准后日記』慶長5年(1600)5月12日条に、「今度大佛の築地を三十三間の西方に築かる、大佛と一所になる」とあり、三十三間堂の西側に築地を築いたことがわかる。この築地は、現存する太閤塀と考えられる。太閤塀の北側には東寺南大門として移築される明治28年(1895)まで西門(崩門)が存在した。この西門には、「慶長六年辛丑再興(中略)大仏三十三間堂西之御門」の棟札写しがあり〔東寺宝物館編1995〕、慶長6年(1601)に築造されたことがわかる。西門と現蓮華王院南大門と様式が類似することから、同時期の築造と推定される。これらのことから、寺域南辺は現塩小路、西辺は大和大路と推定できる。

**近世の方広寺** 豊臣家滅亡後、方広寺は江戸幕府によって妙法院の管理下に置かれたため、大仏殿等は存在していた。その威容は、各種の『洛中洛外図』に描かれる。

寛文元年(1661)8月から、方広寺諸堂舎などの修復が行われるが、寛文2年(1662)に地震を受け、大仏は倒壊し銅銭に鑄潰された〔『続史愚抄』〕。地震後の、寛文7年(1667)に修復は完了する〔『京都御役所向大概覚書』〕。この寛文年間の修復記録には、

- 一、大仏殿 本堂 桁行四拾五間貳尺梁行貳拾七間五尺  
内二荒神社 桁行六尺四寸梁行七尺六寸 鳥居井垣有
- 廻廊 四方延四百六間壹尺五寸梁行三間四尺七寸
- 二王門 桁行拾五間貳尺五寸梁行六間壹尺
- 南之門 六間六尺四間壹尺
- 鐘撞堂 四間四方
- 耳塚石塔 高貳丈三尺 塚之廻り五拾間
- 一、大仏殿 廻廊門 鐘撞堂

右寛文元丑年八月□同七未年極月迄御修復、

右御入用

(後略)

とあり、この時点で大仏殿本堂・回廊・二王門・南之門・鐘楼堂などが存在していたことがわかる。その後、寛政10年(1798)7月1日に方広寺大仏殿は落雷を受ける。これによる火災で大仏殿・楼門・回廊などが焼亡したが、その他の施設への被害は不明である〔『甲子夜話』寛政10年7月2日条〕。

### 3) 明治時代以降

**明治4年以降(恭明宮期)** 明治時代には、当地に恭明宮が造営された。恭明宮は、神仏分離令により、禁裏内の仏像や天皇・皇后位牌の安置、及び宮中女官の住居として造営された施設である〔木下2011〕。さらに、和宮親子内親王が江戸から帰洛する際に使用する施設にあてたとの説もある〔辻1926〕。

恭明宮は、明治2年(1869)正月20日に、「大佛」に「薙髮並隠居」として計画され、方広寺跡が建設予定地となっている。翌3年3月18日に地鎮祭を行い、翌4年5月に竣工した〔『中御門経緯日記』〕。方広寺鐘楼はこの工事で取り壊され、明治17年(1884)4月の鐘楼再建まで鐘は恭明宮北側に露天で放置された。

その後、恭明宮は次第に荒廃し、明治6年(1873)3月14日に機能を停止する〔『明治天皇紀』〕。その際に、霊明殿と位牌は泉涌寺、仏像・仏具は水薬師寺に移される。明治9年(1876)には、建物の管理が宮内省から京都府に移管され〔『府庁文書』「恭明宮取払之儀ニ付伺」明治9年3月23日〕、京都府は建物を入札にかけ、明治11年(1878)までに売却した。建物用材は豊国神社建設に再利用され、残余は府下小学校などに利用された。女官住居棟の一部は盲啞院(旧京都市立待賢小学校)などに移築された〔木下2011〕。

一方、明治8年(1875)12月25日には、京都府に対して方広寺大仏跡に豊国神社社殿の造営を命じる。『豊国神社誌』明治9年(1876)7月条には、「御造営卜定地内に假拝所を設け、恭明宮一局を假社務所とし、新日吉神社神楽所より移転。」とあり、この時点まで住居棟が残存していたことがわかる。明治12年(1879)4月には「旧恭明宮第一局御建物払い下げ許可。(今社務所付属屋トス)」とあり、仮社務所となっていた住居(旧第一局)が神社に払い下げられ、社務所付属屋として使用される。当該建物は、間取りなどから現存社務所がこれに相当するとの指摘もある〔木下2011〕。

恭明宮の範囲は、豊国神社所蔵「恭明宮指図」などによれば、北が豊国神社付近、西が大和大路、南が七条通である〔京都国立博物館編1997〕。このことから、敷地は現豊国神社南側及び現博物館敷地西部に相当する。内部配置は、北側に仏像・位牌が安置された霊明殿、中央部は南北長押扉によって東西に分かれ、両側に女官の住居棟が南北2列並ぶ。南側に遙拝所・警備詰所・馬舎、南辺に表門が配置される。敷地の周囲には、築地・溝が廻る。

**明治25年以降(帝国京都博物館期)** 帝国京都博物館は、明治22年(1889)5月の官制公布により設置が正式決定する。同年6月4日の『大阪朝日新聞』には、「博物館の位置は、愈大仏境内

恭明宮跡に設置することに其筋の達しありたるよし、(後略)」とある。同年7月6日には建設予定地が決定し、北が豊国神社境内、西が大和大路、東が現妙法院境内、南が七条通までである。敷地は、おおむね西半が旧恭明宮敷地（宮内省管轄地）、東半が民有地にあっていた。

明治25年(1892)3月から本館工事が始まり、4月に「地均工事」が行われる。地均工事の範囲は不明である。その後、明治28年(1895)10月に本館竣工、2年後に開館した。〔京都国立博物館編1997〕

### (3) 周辺の調査(図7、表2)

調査地周辺では、これまで多くの発掘調査や試掘・立会調査が実施され、各時代の多岐にわたる遺構を検出している。当調査区の周辺調査については、これまでの調査報告書等でまとめられている〔網ほか2009、小檜山ほか2013〕。そのため、今回は京都国立博物館敷地内で行われた発掘調査・立会調査を集成し、主要な調査成果について、別表にまとめるにとどめた。

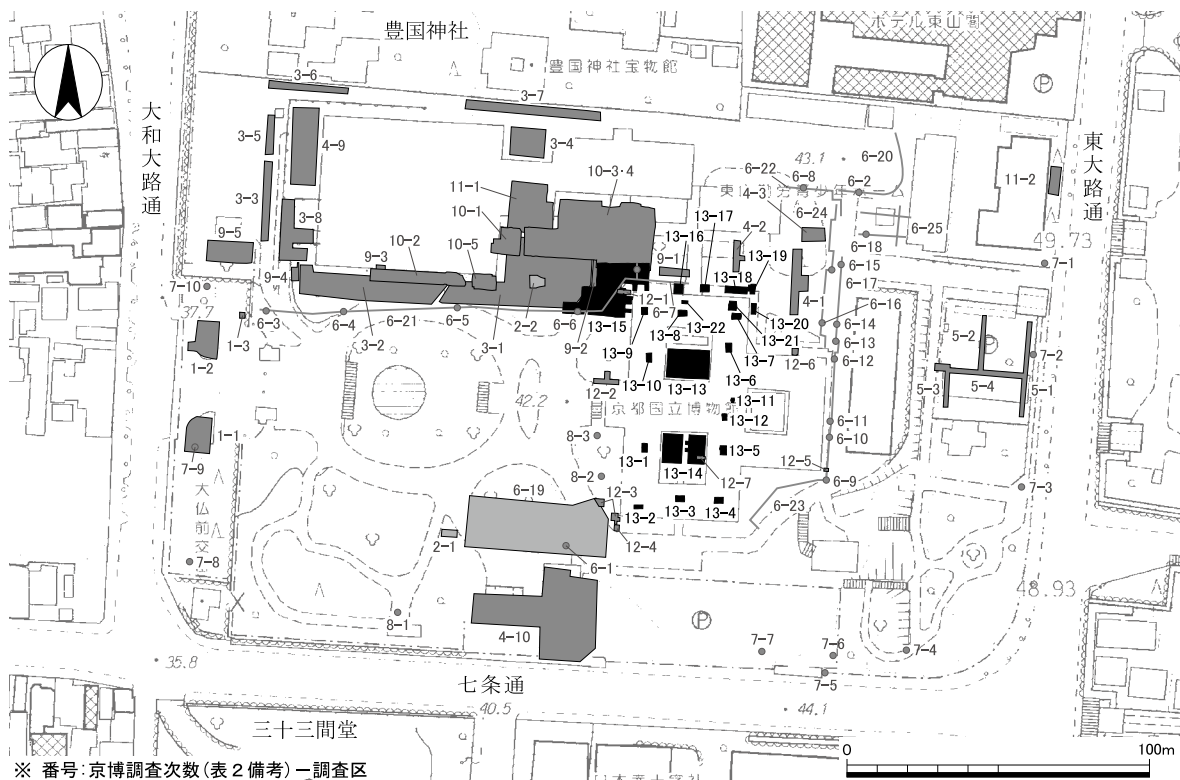


図7 京都国立博物館構内調査区配置図(1:2,500)

表2 京都国立博物館構内調査一覧表

No.	推定地	調査方法	調査期間	調査機関	検出遺構	出土遺物	文献	備考
1	方広寺	発掘	1978.03.22 ～03.31、 1982、 1983、 1984	京都国立博物館(八賀晋)	安土桃山の方広寺大仏殿西面石垣・築地跡。	安土桃山の土器類・石仏など。	京都国立博物館編1987	
2	六波羅政庁	発掘	1994.02.24 ～04.29	京都市埋蔵文化財研究所(鈴木廣司・山本雅和・布川豊治)	平安後期の井戸・柱穴・土坑など、鎌倉～室町の溝・柱穴・土坑、安土桃山～江戸の柵・柱穴・築地・土坑など。	平安後期の土器類・瓦類、鎌倉の土器類。	鈴木ほか1996	京博1次
3	六波羅政庁	立会	1997.03.24 ～03.26	京都市埋蔵文化財研究所(小森俊寛)	平安末期～鎌倉のピット・土坑など、中世～近世初頭の遺物包含層、近世～近代初頭の畑の畝。	平安末期～鎌倉の土師器、鎌倉後半期の土師器・瓦器・焼締陶器など、近世初頭の土師器・瓦。	小森1998	京博2次
4	六波羅政庁	発掘	1998.06.01 ～1999.03.31	京都市埋蔵文化財研究所(田中利律子・近藤知子・大立目一)	南側の調査区(2・1区)では、安土桃山の方広寺大仏殿南門(3×2間)とそれに取りつく回廊。門西側で回廊南側で石垣、南西部で梵鐘鑄造遺構。 北側の調査区(4・7区)では、平安後期の南北溝2条、溝149-溝26・溝299と間に石敷遺構、両溝間は街路と推定。全域で鎌倉～室町の溝・柱穴・土坑・井戸・石敷遺構など。 西側の調査区(8区)では、平安前期の埋納遺構・土坑61、鎌倉～室町の南北道路と側溝・池状遺構など。	4・7区溝などから平安後期の土器類・瓦類。溝・井戸・包含層などから鎌倉～室町の土器類・瓦類。1・2区から安土桃山の土器類・瓦類・鑄造関係遺物。	田中ほか2000	京博3次
5	六波羅政庁	発掘	1999.07.01 ～2000.03.21	京都市埋蔵文化財研究所(田中利律子・近藤知子・大立目一)	南側の調査区(10区)では、平安前期の土坑(326)、後期の東西溝276。全域で鎌倉の東西溝(281)・南北溝(273・252)・井戸(250)・土坑・柱穴など、室町の堀状遺構・溝・土坑・柱穴など。安土桃山～江戸の南北道路と両側側溝を2時期。 北側の調査区(9区)では、鎌倉の南北溝、鎌倉～室町の建物・溝・柱穴・土坑など。	溝・土坑から平安後期の土器類・瓦類が少量、大半は後世遺構に混入。10区井戸・9区溝から鎌倉の土器類遺構・整地層などから室町～江戸の土器類・瓦類。	田中ほか2002	京博4次
6	六波羅政庁	発掘	2000.07.03 ～08.23	京都市埋蔵文化財研究所(田中利律子)	全域で平安～鎌倉の柱穴・土坑などを少数、室町の遺物包含層・溝・土坑・柱穴、江戸の井戸・土坑・柱穴など。	平安～鎌倉の土器類が少量、鎌倉～江戸の土器類・瓦類が少量。	田中2003	京博5次
7	方広寺	立会	2001.03.27 ～11.01	京都市埋蔵文化財研究所(菅田薫・吉本健吾)	江戸末期の南北石垣。		菅田ほか2002	
8	六波羅政庁	立会	2001.12.17 ～2002.03.12	京都市埋蔵文化財研究所(田中利律子・平方幸雄・上田栄治)	安土桃山～江戸の瓦溜め土坑。	土師器、大型瓦。	田中2004	京博6次



No.	推定地	調査方法	調査期間	調査機関	検出遺構	出土遺物	文献	備考
9	六波羅政庁	立会	2003.09.18 ～09.24	京都市埋蔵文化財研究所 (田中利律子・西村洋子)	中世の遺物包含層、方広寺の整地層。	平安後期の土師器、鎌倉後期の須恵器、室町後半の焼締陶器、安土桃山の瓦類、明治の白磁・瓦器・ガラス瓶・瓦。	田中ほか 2005a	京博 7次
10	六波羅政庁	立会	2003.11.27 ～12.15	京都市埋蔵文化財研究所 (田中利律子・西村洋子・清藤玲子)	京都国立博物館建設に伴う整地層。	中世の土師器、近世の瓦・国産施釉陶器など。	田中 2005b	京博 8次
11	方広寺	立会	2007.08.27 ～08.28	京都市埋蔵文化財研究所 (吉本健吾)	江戸末期の南北石垣。	江戸末期の白磁・菊丸瓦・土製品人形。	吉本 2008	
12	法住寺殿・六波羅政庁・方広寺	発掘	2008.02.12 ～03.25	京都市埋蔵文化財研究所 (網伸也)	室町の井戸、安土桃山～江戸初めの方広寺大仏殿南回廊基壇・礎石根固め石跡・南雨落溝・石塁及び裏込地業・東西柱穴列・地業盛土。	室町の土師器・輸入陶器・瓦質土器・焼締陶器・瓦など、安土桃山～江戸初頭の大型巴文軒丸瓦・大仏瓦・桐文軒平瓦・羽口・石仏。	網 ほか 2009	京博 9次
13	法住寺殿・六波羅政庁・方広寺	発掘	2008.12.08 ～2009.03.31	京都市埋蔵文化財研究所 (網伸也・加納敬二・辻純一)	室町の井戸・土坑、安土桃山～江戸初めの南門礎石根石群・南門基壇北端地業・南回廊基礎根石群・南石塁裏込地業・水切溝・盛土整地層。	室町の土師器・輸入陶器・瓦質土器・焼締陶器・木製品・砥石・瓦など、安土桃山の土師器・施釉陶器・瓦質土器・瓦・鋳型・炉壁・銅銭など。	網 ほか 2010	京博 10次
14	法住寺殿・六波羅政庁・方広寺	発掘	2009.09.07 ～11.13	京都市埋蔵文化財研究所 (網伸也・加納敬二・田中利律子)	平安後期の門・路面・道路側溝、鎌倉～室町の門・柱列・路面・溝・埋納遺構・土坑・堀、安土桃山の石敷路面・整地層・土坑。	平安の土師器・須恵器・輸入陶磁器・瓦など、鎌倉～室町中期の土師器・須恵質土器・輸入陶磁器・瓦質土器・焼締陶器・木製品・砥石・瓦など、室町後期～安土桃山の土師器・輸入陶磁器・瓦質土器・焼締陶器・瓦・鉄製品など、江戸後期～明治の染付・近世陶磁器・瓦など。	網 ほか 2010	京博 11次
15	法住寺殿・六波羅政庁・方広寺	発掘	2010.08.16 ～09.10	京都市埋蔵文化財研究所 (高橋潔)	幕末～明治初頭の整地層、近代の本館基礎・整地層。	幕末～明治の初頭の土師器・陶磁器・染付・棧瓦など。	高橋 2010	京博 12次
16	法住寺殿・六波羅政庁・方広寺	発掘	2015.07.01 ～2016.03.29	京都市埋蔵文化財研究所 (上村和直・辻裕司・山下大輝)	本調査		本報告	京博 13次

※ 「図7 京都国立博物館構内調査区配置図」の調査番号は、備考の京博調査回数に対応。

### 3. 遺 構

#### (1) 基本層序 (図8)

調査地は、各調査区によって、堆積状況が異なる部分もあるが、遺跡理解のために15区を基本的な層序として示しておく。堆積層は、基本的にI層からIV層の4つに大別した。

**I層** 明褐色砂泥・黄褐色土などを主体とする土層で、土層中に瓦類・土器類・煉瓦・礫などを含む。厚さは各調査区によって異なる。本館の床下、周辺整備・新館造営などに伴う現代整地層である。11・12区を除く全ての調査区で確認した。

**II層** 褐色砂泥層を主体とする土層で、比較的締まっている。土層中に瓦類・土器類・礫・煉瓦・石製建築部材などを多く含む。厚さは各調査区によって異なる。明治期に造営された本館の床下・周辺整備に伴う近代整地層である。19・20区を除く全ての調査区で確認した。

**III層** 黒色土・黄色粘土ブロックを含むにぶい黄褐色砂泥層である。土層中に炭微細片を多く含むが、遺物は含んでいない。厚さは、各調査区によって異なるが、0.1～0.3m程度である。IV層上面に堆積する土壌化層で、一時期表土となっていた可能性がある。1・2・8・14区南東部・15・22区で確認した。

III層とIV層の間では、灰色粘土(厚さ0.1m程度、無遺物)が薄くレンズ状に堆積する地点を、13～16区の一部で確認した。

**IV層** 灰褐色砂泥を主体とする土層で、比較的締まる。土層中に炭細片・細砂粒を含む。層中に土師器細片が含まれるが小片のため、時期は特定できない。厚さは各調査区によって異なるが、0.1～0.4mである。検出遺構の関係から、方広寺造営以降の近世整地層と推定できる。当土層は、1・2・8～10・13区西部・14～16・22区で確認し、おおむね本館内の西側から本館外北側・西側に分布する。

IV層とV層の間では、褐色砂泥層を15区の西部(Y = -20,737ライン以西)で確認した。土層は比較的締まっており、土層中に砂粒を多く含む、遺物は含んでいない。厚さは0.1m程度である。9次調査2区で検出した礫を多く含むにぶい黄褐色砂泥(厚さ0.2～0.3m)と、土色は異なるもの

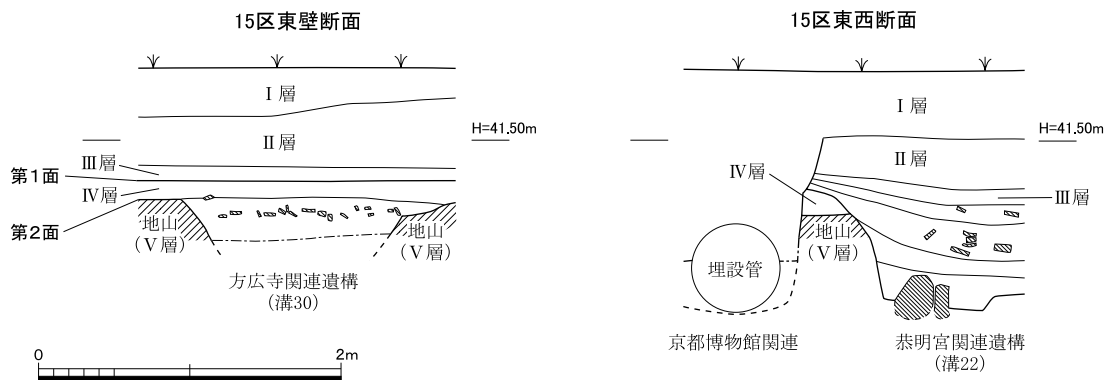


図8 基本土層模式図 (1 : 50)

の、同様の土層と認識した。9次調査の報告では、江戸時代前期の整地層と推定している〔網ほか2010〕。

**V層** 明黄褐色粘質土・褐色砂泥・黄灰色粘質土・黄灰色砂礫などの遺物を含まない地山層である。V層上面の標高は、北東地点の7区で41.51m、南西地点の2区で40.9m、最西地点の15区西端で41mである。つまり、北から南へ約0.6m、東から西へ約0.5m、緩やかに傾斜した地形である。上面の遺構面もそれと同様に傾斜する。

**遺構面** IV層上面を第1面、V層上面を第2面として、遺構調査を行った。

## (2) 遺構の概要 (表3)

今回の調査区は、本館内外に設定した。以下では、本館展示室床下調査区(1～12・21・22区)、本館中庭調査区(13・14区)、本館北側(15～20区)に分けて報告する。

調査で検出した主な遺構は、1～12・21・22区で11基、13・14区で11基、15区で19基、16～20区で3基、調査区をまたがって検出した遺構もあり総計41基である。時期別には、室町時代、安土桃山時代から江戸時代、明治時代以降に分かれ、安土桃山時代から江戸時代の遺構が大半を占め、他の時期の遺構は少ない。なお、鎌倉時代以前の遺構は全く検出していない。

以下、各調査区に分けて報告する。

なお、各遺構及び出土遺物の時期は、平安京・京都I期～XIV期編年に準拠した。〔小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1996年〕

表3 遺構概要表

時 期	遺 構			
	1～12・21・22区	13・14区	15区	16～20区
室町時代			溝31、土坑33	16区 土坑41
安土桃山時代 ～江戸時代中期	7区 溝3 8区 柱穴5・6 21・22区 溝30	13区 溝16・17 14区 土坑20・21	回廊26(柱列27・28)、 溝29・30・32、 土坑34・39・40、 柱穴35～38	16～18区 溝29
江戸時代後期 ～明治時代	8区 土坑4	13・14区 溝11・13 13区 石列12、 土坑14・15 14区 柱列18、溝19	溝22、柱穴23・24、 土坑25	17区 溝11
時期不明	2区 落込1 3区 柱穴2 9区 溝7 10区 落込8、土坑9 12区 溝10			

### (3) 本館床下調査の遺構（1～12・21・22区）

#### 1区（図9、図版9）

1区は本館床下南西部に設定した。規模は南北3m×東西2m、形状は長方形である。

Ⅲ層上面で、南側と西側に落ち込む攪乱を検出した。遺構は検出していない。地山面の標高は40.55mである。

#### 2区（図9、図版9）

2区は本館床下南西部に設定した。規模は南北1.2m×東西3m、形状は長方形である。

V層上面で、西側への落込1を検出した。深さは0.2m、埋土はにぶい黄褐色粘質土で、埋土中に土器片を含む。地山面の標高は40.8mである。

#### 3区（図9、図版9）

3区は本館床下南部に設定した。規模は南北2m×東西3m、形状は長方形である。

V層上面で、柱穴2を検出した。径0.3m、深さ0.13mである。埋土は明黄褐色砂泥で、埋土中に土器片を含む。地山面の標高は41.0mである。

#### 4区（図9、図版9）

4区は本館床下南東部に設定した。規模は南北2m×東西3m、形状は長方形である。

V層上面で、東側に落ち込む攪乱を検出した。遺構は検出していない。地山面の標高は41.4mである。

#### 5区（図10、図版9）

5区は本館床下南東部に設定した。規模は南北3m×東西2m、形状は長方形である。

遺構は検出していない。地山面の標高は41.1mである。

#### 6区（図10、図版9）

6区は本館床下北東部に設定した。規模は南北3m×東西2m、形状は長方形である。

V層上面で、東西方向の攪乱（排水管）を確認した。遺構は検出していない。地山面の標高は41.55mである。

#### 7区（図10、図版10）

7区は本館床下北東部に設定した。規模は南北2m×東西3m、形状は長方形である。

V層上面で、東西方向の溝3を検出した。東側・西側は調査区外へ延長する。断面U字形で、幅約0.75m、深さ0.3m以上である。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、土師器片・瓦片・炭を少量含む。時期は中世から近世と推定できる。地山面の標高は41.5mである。

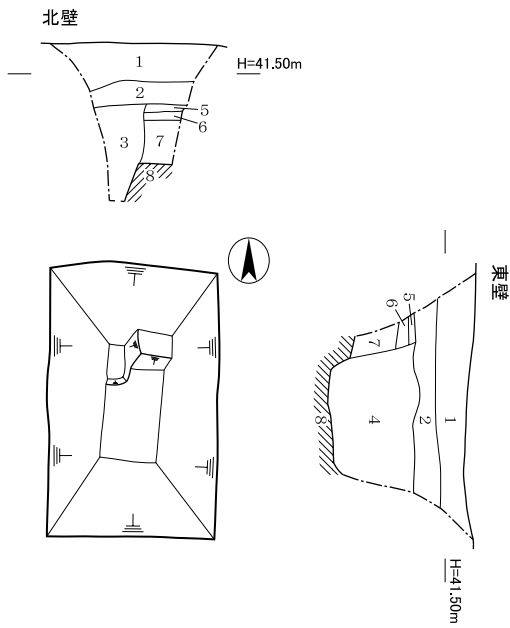
#### 8区（図10、図版10）

8区は本館床下北部に設定した。規模は南北2m×東西3m、形状は長方形である。

Ⅳ層上面で第1面、V層上面で第2面の遺構を検出した。

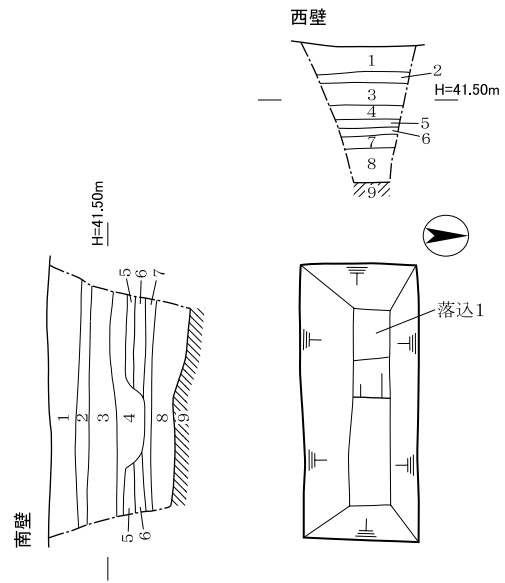
第1面で、土坑4を検出した。内面に漆喰を施した土坑で、南壁・東壁と底部の一部を検出し、北側と西側が調査区外に延長する。規模は東西2.0m以上、南北0.5m以上、深さ0.6m以上である。

1区



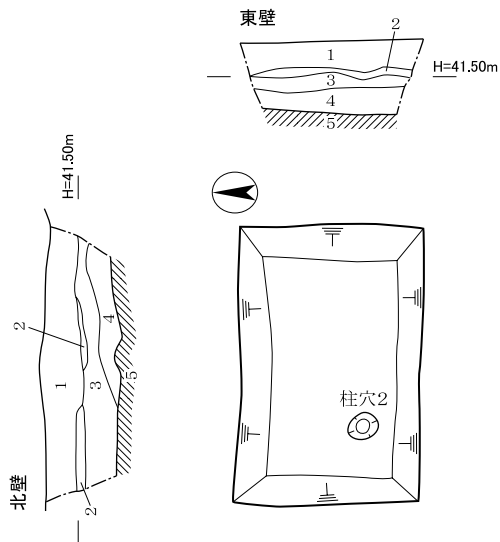
- 1 現代盛土(I層)
- 2 10YR5/6 黄褐色砂泥 粗砂混(II層)
- 3 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥
- 4 10YR6/4 にぶい黄褐色砂泥  
・10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥
- 5 10YR4/2 灰黄褐色粘土(III層)
- 6 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土 粗砂混(III層)
- 7 10YR6/3 にぶい黄褐色粘土(IV層)
- 8 10YR7/3 にぶい黄褐色粘質土(V層、地山)

2区



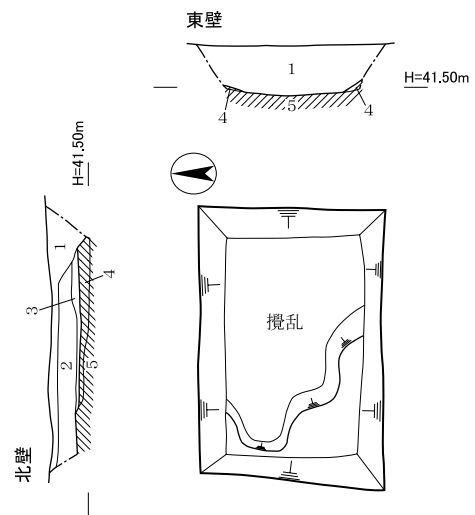
- 1 現代盛土(I層)
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥  
・10YR3/3 暗褐色砂泥
- 3 10YR6/4 にぶい黄褐色砂泥 やや粘質
- 4 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥 やや粘質
- 5 7.5YR5/6 明褐色砂泥(III層)
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥(IV層)
- 7 10YR5/6 黄褐色砂泥 やや粘質
- 8 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土
- 9 10YR7/3 にぶい黄褐色粘質土(V層、地山)

3区



- 1 現代盛土(I層)
- 2 10YR6/6 明黄褐色砂泥 やや粘質
- 3 10YR3/3 暗褐色砂泥・10YR4/4 褐色砂泥
- 4 10YR3/2 黒褐色砂泥 やや粘質
- 5 10YR5/6 黄褐色砂泥 やや粘質(V層、地山)

4区

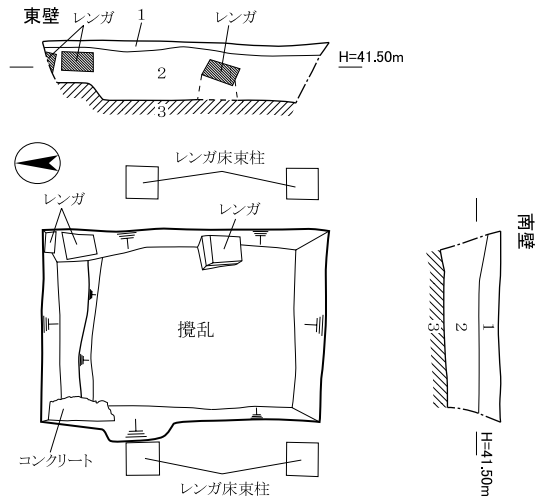


- 1 現代盛土(I層)
- 2 10YR6/6 明黄褐色粘質土・10YR5/6 黄褐色砂泥(II層)
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 4 10YR6/6 明黄褐色砂泥 粗砂混
- 5 2.5Y6/6 明黄褐色シルト



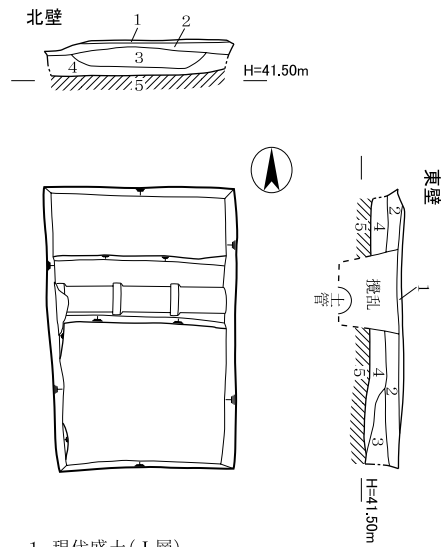
図9 1~4区実測図(1:80)

5区



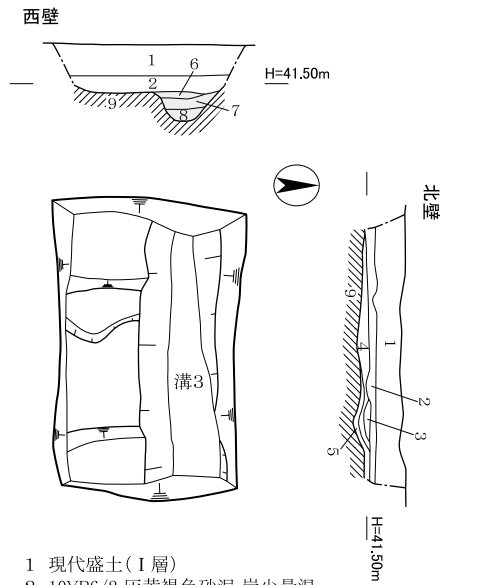
- 1 現代盛土(I層)
- 2 10YR5/6 黄褐色砂泥(II層)
- 3 7.5YR5/8 明褐色砂泥
- 2.5Y6/6 明黄褐色粘土(V層、地山)

6区



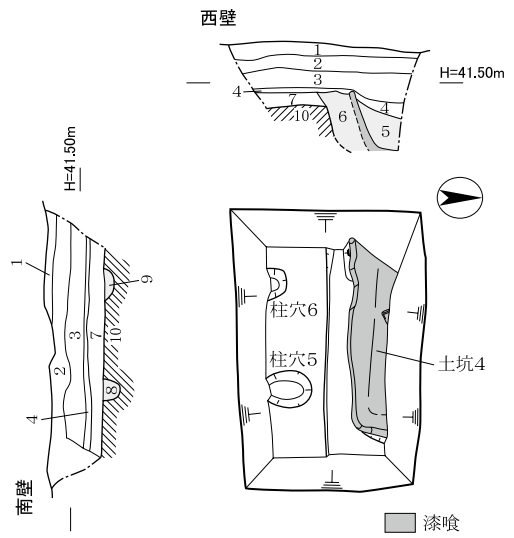
- 1 現代盛土(I層)
- 2 10YR5/6 黄褐色砂泥
- 3 10YR4/4 褐色砂泥 レンガ多量混 (II層)
- 4 10YR5/8 黄褐色砂泥
- 5 10YR6/6 明黄褐色砂泥 やや粘質(V層、地山)

7区



- 1 現代盛土(I層)
- 2 10YR6/2 灰黄褐色砂泥 炭少量混
- 3 7.5YR4/3 褐色砂泥
- 4 10YR4/4 褐色砂泥
- 5 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 やや粘質 (II層)
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 炭微量混
- 7 10YR4/4 褐色砂泥
- 8 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥 (溝3)
- 9 10YR5/6 黄褐色砂礫(V層、地山)

8区

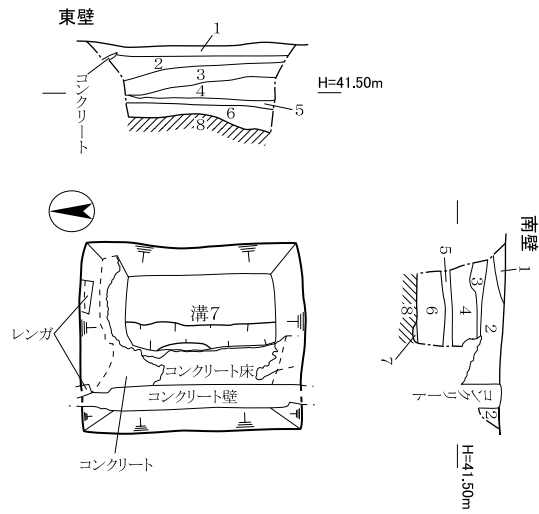


- 1 現代盛土(I層)
- 2 10YR5/6 黄褐色砂泥(II層)
- 3 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥
- 4 10YR3/1 黒褐色砂泥 (III層)
- 5 10YR4/4 褐色砂泥(土坑4)
- 6 10YR3/4 暗褐色砂泥(土坑4掘形)
- 7 10YR4/4 褐色砂泥(IV層)
- 8 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥(柱穴5)
- 9 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥(柱穴6)
- 10 7.5YR 5/6 明褐色砂泥(V層、地山)



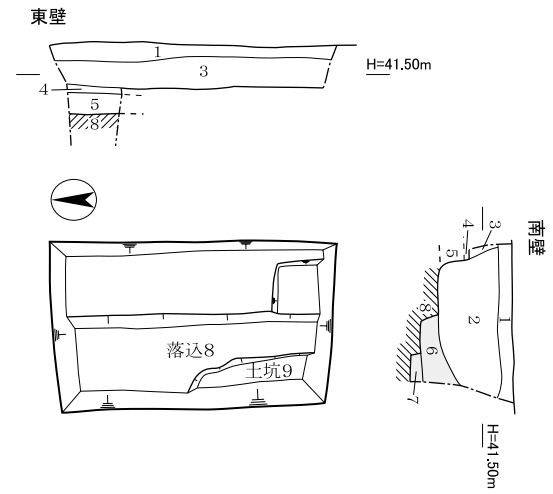
図10 5～8区実測図(1:80)

9区



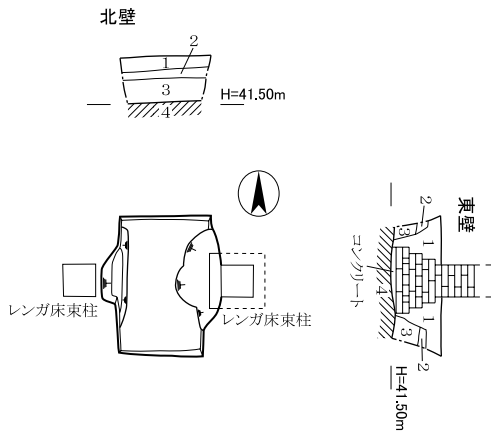
- 1 現代盛土 (I層)
- 2 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 レンガ片多量混
- 3 10YR4/4 褐色砂泥 黄色粘土ブロック混
- 4 10YR5/6 黄褐色砂泥 やや粘質
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
- 6 10YR4/4 褐色砂泥 やや粘質 (IV層)
- 7 10YR4/1 褐灰色砂泥 (溝7)
- 8 10YR5/6 黄褐色シルト 砂礫混 (V層、地山)

10区



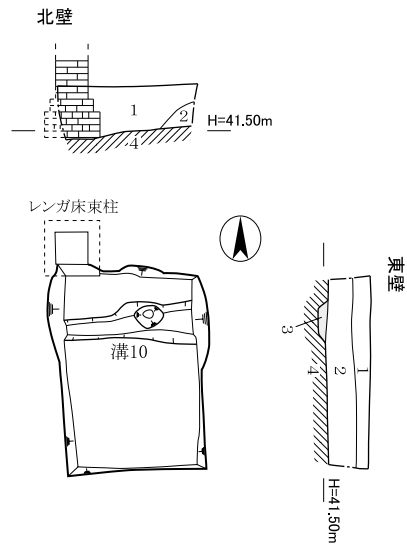
- 1 現代盛土 (I層)
- 2 10YR5/6 黄褐色砂泥 レンガ多量混
- 3 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥
- 4 10YR7/6 明黄褐色砂泥 固く締まる
- 5 10YR5/8 黄褐色砂泥 (IV層)
- 6 10YR5/8 黄褐色砂泥 (落込8)
- 7 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (土坑9)
- 8 10YR6/8 明黄褐色砂泥 粘質 (V層、地山)

11区



- 1 10YR5/6 黄褐色砂泥 レンガ
- 2 2.5Y5/4 黄褐色砂泥 やや粘質 (II層)
- 3 10YR6/6 明黄褐色砂泥
- 4 10YR7/4 にぶい黄橙色砂泥 (V層、地山)

12区



- 1 10YR5/6 黄褐色砂泥 レンガ多量混
- 2 2.5Y6/6 明黄褐色砂泥 やや粘質 (II層)
- 3 2.5Y3/2 オリーブ褐色砂泥 瓦多量混 (溝10)
- 4 10YR7/4 にぶい黄橙色砂泥
- 10YR5/8 黄褐色砂礫 (V層、地山)



図11 9～12区実測図 (1 : 80)

壁は斜めに立ち上がり、底面はやや丸みを帯びる。漆喰の厚さは0.05 mである。埋土は褐色層と黒褐色層の互層で、陶器・瓦片を含む。掘形は、幅約0.2 mである。埋土は暗褐色砂泥で、土師器片を含む。時期は近代に属する。

第2面で、柱穴5・6を検出した。径約0.35～0.5 m、深さ約0.1～0.2 mである。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、遺物は出土していない。

第1面の標高は41.4 m、地山面の標高は41.3 mである。

### 9区 (図11、図版10)

9区は本館床下北西部に設定した。規模は南北2.5 m × 東西2 m、形状は長方形である。

V層上面で、南北方向の溝7を検出し、調査区外に継続する。東西0.3 m以上、深さ0.05 mである。埋土は褐灰色砂泥で、遺物は出土していない。地山面の標高は41.3 mである。

### 10区 (図11、図版10)

10区は本館床下北西部に設定した。規模は南北3 m × 東西2 m、形状は長方形である。

V層上面で、西側への落込8を検出した。西側は調査区外へ継続する。東壁はほぼ垂直に立ち上がり、底部は平坦である。規模は東西0.8 m以上、深さ0.4 mである。埋土は黄褐色砂泥で、土師器・須恵器・陶器・瓦片を含む。落込8の底部で土坑9を検出した。規模は東西0.3 m以上、南北1.2 m以上、深さ0.15 m以上である。埋土は灰黄褐色粘質土で、遺物は出土していない。地山面の標高は41.09 mである。

### 11区 (図11、図版10)

11区は本館床下東部に設定した。規模は南北1.5 m × 東西1 m、形状は長方形である。

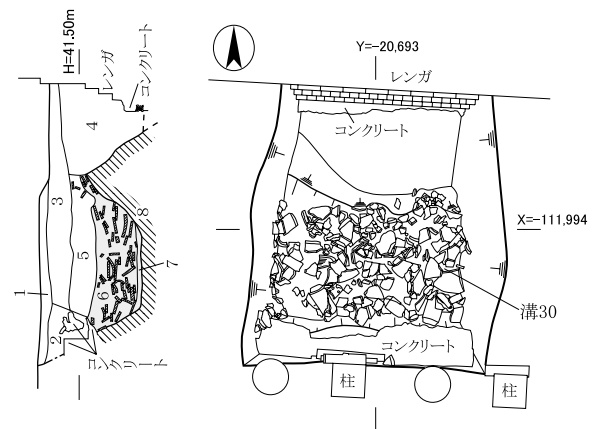
遺構は検出していない。地山面の標高は41.6 mである。

### 12区 (図11、図版10)

12区は本館床下東部に設定した。規模は南北2 m × 東西1.5 m、形状は長方形である。

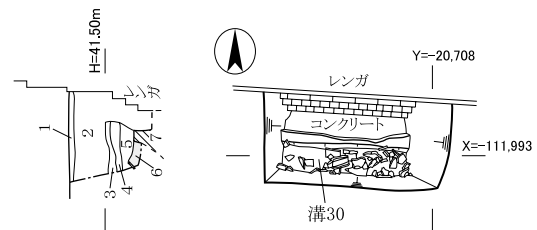
V層上面で、東西方向の溝10を検出した。東側と西側が調査区外に継続する。規模は幅0.45 m、深さ0.1 mである。溝埋土はオリーブ

21区



- 1 現代盛土(I層)
- 2 攪乱
- 3 10YR5/6 黄褐色砂泥 レンガ多量混 (II層)
- 4 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 粘質
- 5 10YR5/6 黄褐色砂泥 粘質
- 6 10YR4/2 灰黄褐色粘土 粗砂混 瓦多量混
- 7 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂 粘土混 (溝30)
- 8 10YR5/2 暗灰黄色粘土 (V層、地山)

22区



- 1 現代盛土(I層)
- 2 10YR5/6 黄褐色砂泥(II層)
- 3 10YR4/4 褐色砂泥 炭混(III層)
- 4 10YR4/6 褐色砂泥(IV層)
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 かなり粘質
- 6 10YR3/3 暗褐色粘土 粗砂混 炭・瓦混(溝30)
- 7 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥(V層、地山)



図12 21区・22区実測図 (1 : 80)



褐色砂泥で、瓦を多量に含む。地山面の標高は41.6mである。

#### 21区 (図12、図版22)

21区は本館床下北東部に設定した。規模は南北3m×東西2.5m、形状は長方形である。

V層上面で、溝30を検出した。検出面での規模は、幅1.4m、深さ0.59mである。溝底の標高は40.84mである。溝の東西は、いずれも調査区外へと延長する。溝の断面形態は逆台形状を呈する。溝の埋土は2層に分かれる。上層は灰黄褐色粘土で厚さ0.5mで、下層はにぶい黄褐色粗砂で厚さ0.05mである。遺物は上層から安土桃山時代から江戸時代後期の瓦が大量に出土した。地山面の標高は41.4mである。

#### 22区 (図12、図版22)

22区は本館床下北部に設定した。規模は南北1m×東西2m、形状は長方形である。

V層上面で、東西方向の溝30を検出した。検出面での規模は、幅0.3m以上、深さ0.08m以上である。溝の北肩のみを検出し、南肩は調査区外である。溝の埋土は暗褐色粘土で、粗砂・炭を含む。遺物は安土桃山時代から江戸時代後期の瓦が大量に出土した。地山面の標高は41.2mである。

### (4) 本館中庭調査の遺構 (13・14区)

#### 1) 13区 (図版1・2・11・12)

##### 第1面

第1面では、西部で柱穴・土坑・攪乱などを検出した。柱穴は数基検出した。円形もしくは不定形で、規模は径0.2～0.4m、深さ0.1m程度である。埋土は黄褐色砂泥を中心とし、遺物はない。配置はまとまりがなく、性格は不明である。土坑は数個検出した。土坑14・15は不定形で、規模は一辺1.5～2.5m、深さ0.2m程度である。埋土は褐灰色砂泥で、遺物は出土していない。性格は不明である。

東部では溝11・石列12・溝13を検出した。

**溝11**(図13、図版12) 東部で検出した南北方向の石組溝である。北側・南側は調査区外へ延長し、南西側は大きく攪乱される。検出面での掘形の規模は、長さ8.4m、東西2.3m、深さ0.85mで、断面逆台形で底部は平坦である。溝内の東西両側を石組みで護岸する。溝の内法は、幅0.85m、深さ約0.7mで、長さ8.2mを検出した。

西側護岸は、幅0.2～0.3m・高さ0.1～0.15m・奥行き0.15～0.3mの扁平な石を2段ほど積んで基礎とし、その上に幅0.5～0.6m・高さ0.3～0.35m・奥行き0.3～0.4mの正方形または長方形の切石を、平坦面を内側に揃え、目地を隙間なく積む。内面は約9度外傾する。溝掘形の深さからみて、本来はもう一石上に積まれていたと考えられる。段目の上面の目地を揃える。

東側護岸は、幅0.5～0.7m・高さ0.35～0.4m・奥行き0.3～0.4m程度のやや丸石を、やや平坦な面を内側にして2・3段積む。目地は隙間が多い。1段目の上面はやや揃える。内面はやや外傾する。石組は1～2段が残存する。掘形の深さや石列12のレベル高から考え、当初3段程度積まれていたと推定できる。

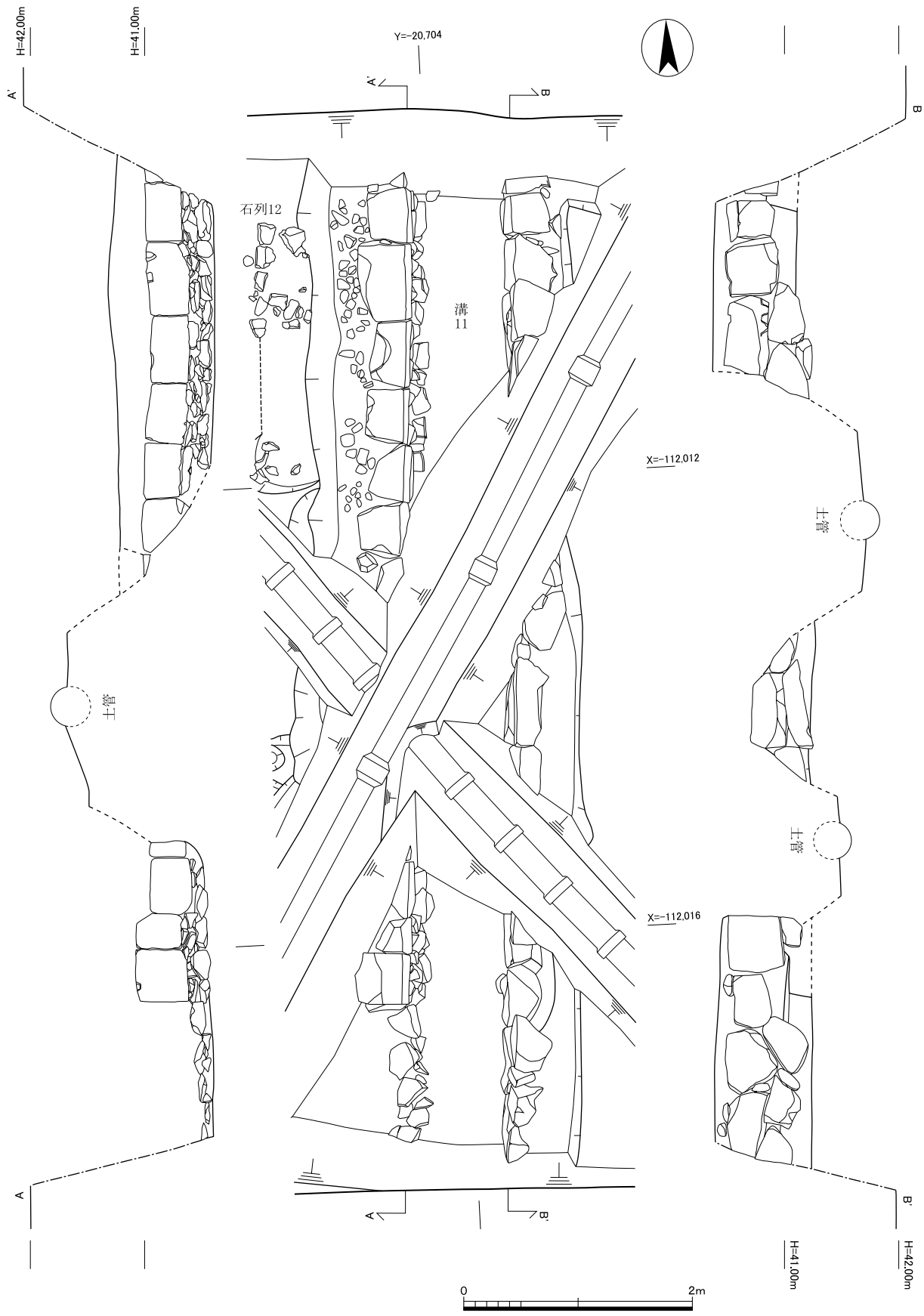


图13 13区沟11实测图 (1 : 50)

石材は、西側が花崗岩切石、東側が基本的に花崗岩自然石である。石材の中には、鼓形の刻印・切り込みが確認できた(図25-63)。また、石材には火を受けた状態のものが多数見られ、転用材であることが窺える。

掘形内は、底部から厚さ0.1m程度明黄褐色粘土を積み、最下段石材を据える。石組掘形埋土は、にぶい黄褐色粘土で、西側は拳大の石を多量に入れるが、東側は狭く裏込めは少ない。石組溝内は、厚さ0.2m程度、褐色粘土・灰黄褐色粘土が石垣最下段辺りまで堆積する。その上は、明黄褐色砂泥・褐色砂泥である。明黄褐色砂泥は、瓦を多量に含み、西側から投棄した状況が認められる。遺物の時期は近代に属する。

底面の標高は北端40.6m、南端40.5mで、北から南へ若干傾斜する。溝の方位は、北で東へ約2度傾く。

**石列12** 溝11の約1.6m西側で検出した石列である。一辺0.1～0.15m程度の扁平な石を1段据える。北と西に面を揃える。南・東側は削平を受け、本来の形状は不明である。掘形はない。12の南側3mの地点では、石の抜き取り痕跡を検出したため、本来南方向に延長したと推定できる。

**溝13** 石列12の西側で検出した南北方向の素掘り溝である。北側・南側は調査区外へ延長する。検出面での規模は、幅0.35m、深さ0.15mである。断面U字形で、底部は平坦である。埋土は灰褐色土で、埋土中に瓦を少量含む。溝11との心々距離は2.6mである。溝の方位は、北で東へ傾き、溝11とほぼ合う。

## 第2面

第2面では、西部で柱穴・溝などを検出した。

柱穴は円形のものが多く、規模は径0.2～0.3m、深さ0.05～0.3m程度である。埋土は褐灰色砂泥で、埋土中に土師器片含まれる。配置はまとまりがなく、性格は不明である。

溝16・17は、幅約0.3m、深さ約0.1mである。埋土は褐灰色砂泥で、遺物はない。

## 2) 14区(図版3・4・12・13)

### 第1面

第1面では、西部で柱穴などを数基検出した。円形もしくは不定形で、規模は径0.2～0.35m、深さ0.1m程度である。埋土は黄褐色砂泥で、遺物は出土していない。配置にはまとまりがなく、性格は不明である。

北部で溝19を検出した。埋土は褐灰色砂泥で、遺物はない。

東部では溝11・溝13・柱列18などを検出した。

**溝11**(図14、図版13) 東部で検出した南北方向の溝で、13区で検出した溝11の南延長部である。規模・構造はほぼ一致する。

掘形内は、底部に厚さ0.1m程度のにぶい黄橙色粘土を積み、護岸の最下段石材を据える。溝内は、厚さ0.15～0.2m程度のにぶい黄色砂泥が堆積する。その上は、にぶい黄褐色粘土・にぶい黄褐色砂泥である。にぶい黄褐色粘土は、瓦を多量に含む。底面の標高は北端40.6m、南端40.6mで、

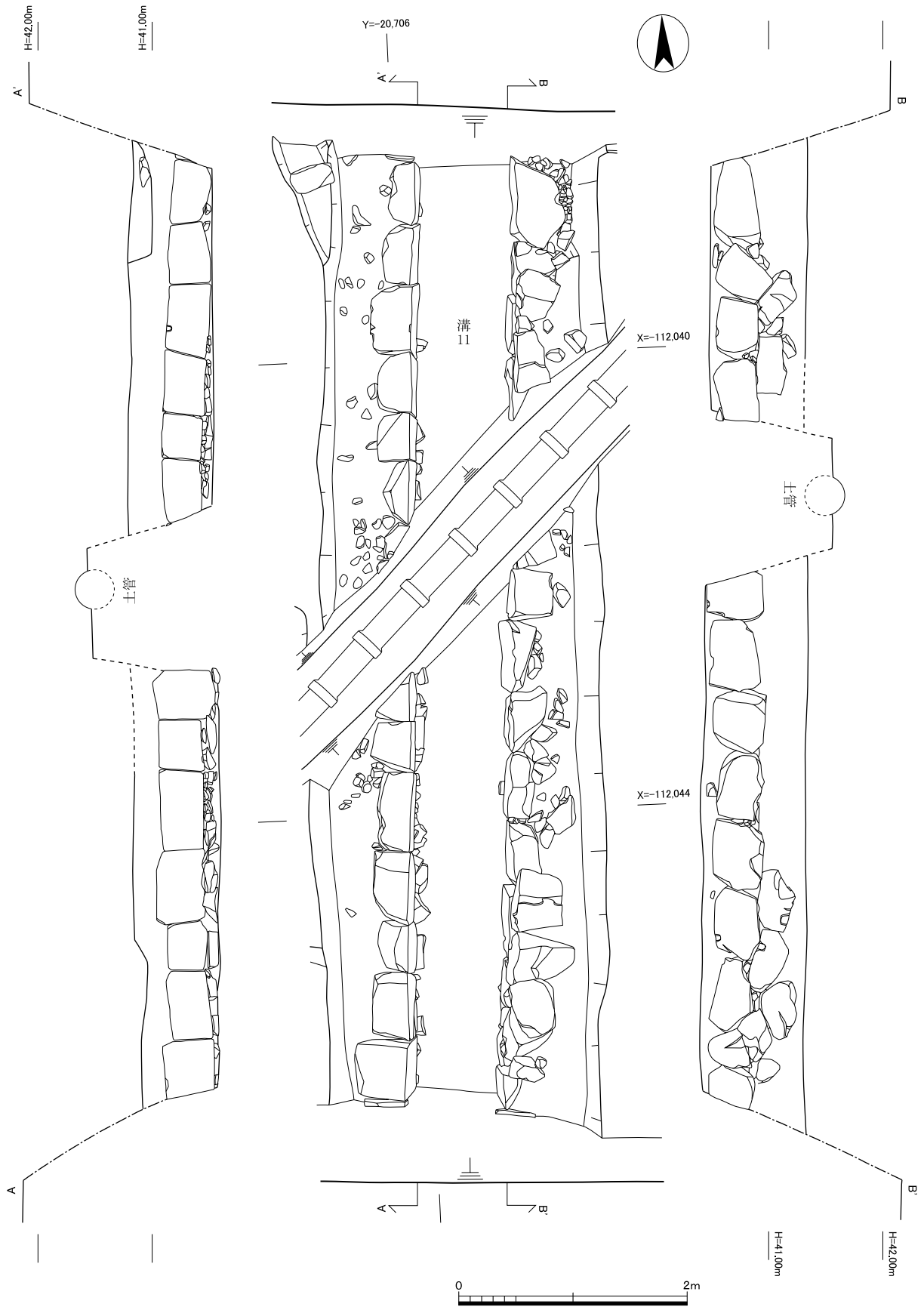


图14 14区沟11实测图 (1 : 50)

ほぼ同じである。溝の方位は、北で東へ約3度傾く。

**溝13** 東部で検出した南北方向の溝で、13区で検出した溝13の南延長部で、規模・構造はほぼ一致する。溝11との心々距離は2.7mである。

**柱列18** 溝11の東側2.4mで検出した南北方向の柱列である。検出全長は4.7mで、南北に延長すると推定できる。柱穴の間隔は2.2m間隔である。掘形は円形で、規模は径約0.35m、深さ約0.2mである。埋土は黄褐色砂泥で、遺物は出土していない。柱列の方位は、北で東にやや傾く。

## 第2面

第2面では、西部で柱穴・土坑などを検出した。

柱穴は円形で、規模は径0.3m、深さ0.1mである。埋土は灰褐色砂泥である。配置にはまとまりがなく、性格は不明である。

土坑20・21は不定形で、深さ0.25mである。埋土は灰褐色砂泥で、遺物は出土していない。

## (5) 本館北側調査の遺構 (15～20区)

### 1) 15区 (巻頭図版1、図版5～8・14～19)

#### 第1面 (図版5)

**溝22** (図版14) 15区中央部で検出した南北溝である。10次調査の溝63の南側にあたり、南側は調査区外へ延長する。検出面での規模は、幅2.0m、深さ0.5mである。断面形態は、逆台形状を呈する。溝底の東側が凹む。溝の北側で、東肩下部に石が張り付いた状態で検出し、石組があった可能性がある。また、 $X = -111,983$ 、 $Y = -20,735$ 付近の溝底東際からは南北長0.2m、東西幅0.1mの木片を検出した。この木片は、溝を石組で護岸していた場合に、石組の根石下に置かれた胴木である可能性がある。

溝埋土は、4層に分かれる。1層は炭混じりの黄褐色砂泥で、厚さ0.1mである。2層は炭混じりの黒褐色砂泥で、厚さは0.2mである。3層は炭混じりの灰黄褐色砂泥で、厚さは0.1mである。4層は褐灰色粘土で、厚さ0.2mである。1・2層から多量の瓦・陶磁器・焼締陶器・煉瓦などが出土し、3・4層からは少量の土器が出土した。遺物の時期は近代に属する。

底面の標高は北端40.45m、南端40.44mで、ほぼ平坦である。溝の方位は、北で東へ約3度傾く。

**柱穴23** (図17・18、図版15) 15区南西部で検出した柱穴である。検出面での規模は、径0.6m、深さ0.35mである。掘形は円形を呈する。埋土は褐色砂泥で、0.1～0.15mの礫を密に含む。遺物は出土していない。また、柱穴23の南西0.3mの位置に、一辺0.55mの石を検出し、この石の破片が柱穴23最上部で出土したことから、礎石据付穴と考えられる。9次調査で柱穴12としたもの。

**柱穴24** (図17・18、図版15) 15区南西部で検出した柱穴である。検出面での規模は、径0.5m、深さ0.38mである。掘形は円形を呈する。最上部で一辺0.35mの礎石を検出した。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、0.05～0.15mの礫を密に含む。遺物は出土していない。9次調査で柱穴13としたもの。

**土坑25** 15区東部で検出した土坑である。検出面での規模は、東西2.7m以上、南北1.9m、深

さ1.74mである。掘形は長方形を呈する。埋土は3層に分かれる。最下層から瓦が出土した。遺物の時期は近代に属する。

## 第2面（図版6）

回廊26（図15・16、図版17・18） 15区中央部で検出した建物である。東西方向の柱列27（柱穴27-1～4）、及び柱列28（柱穴28-1～5）で構成される。今回検出した柱穴は、全て攪乱や後世の造成によって削られ、礎石据付穴の底部、またそれに近い部分を検出したのみで、礎石は全て残存していない。柱穴間の心々距離は、柱列27が西から順に、7.5m、3.5m、4.0mである。柱列28が西から順に、3.8m、4.0m、3.7m、3.5mである。次に柱列27と柱列28の心々距離は、西から順に3.6m、3.7m、3.7m、3.7mである。

今回検出した柱列27は、すでに9・10次調査で検出済みで、対応関係は以下のとおりである。柱穴27-1は9次調査の柱穴8及び10次調査の柱穴60、柱穴27-2は10次調査の柱穴56、柱穴27-3は10次調査の柱穴55、柱穴27-4は10次調査の柱穴70である。

柱列28の柱穴28-1の検出面での規模は、径0.7m、深さ0.2mである。掘形は円形を呈する。

柱穴28-2の検出面での規模は、径0.7m、深さ0.04mである。掘形は円形を呈する。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、小礫を多量に含む。埋土から瓦片が少量出土した。

柱穴28-3の検出面での規模は、径0.7m、深さ0.1mである。掘形は円形を呈する。埋土は粗砂混じりの褐色砂泥で、小礫を少量含む。遺物は出土していない。

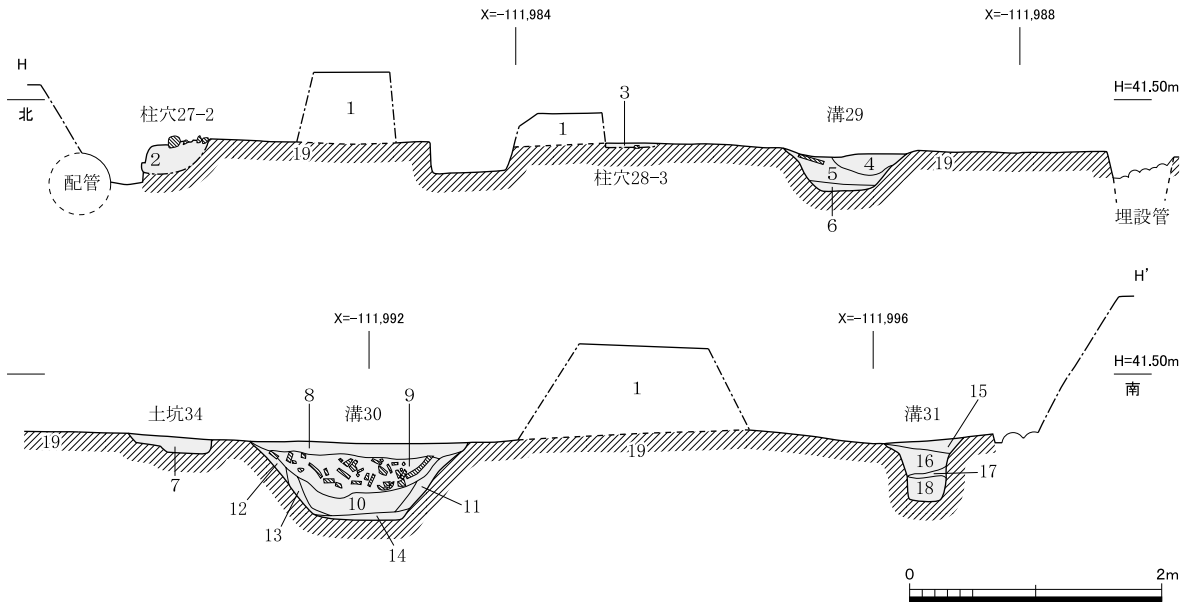
柱穴28-4の検出面での規模は、径0.7m、深さ0.1mである。掘形は円形を呈する。埋土は褐色砂泥で、小礫を多量に含む。埋土から瓦片が少量出土した。柱穴28-5の検出面での規模は、径0.74m、深さ0.05mである。掘形は円形を呈する。埋土は黄褐色砂泥で、小礫を少量含む。埋土から瓦片が出土した。

溝30（図15・17、図版16） 15区南東部で検出した東西溝である。9次調査の溝3の東側にあたり、東側は調査区外へ延長する。検出面での規模は、幅1.7～1.95m、深さ0.6mである。溝30は遺構保存のため、完掘せず3箇所を断割調査を行った。溝底の標高はY=-20,731.8地点で40.35m、Y=-20,743付近で40.32m、Y=-20,742付近で40.59mであり、西から東へと低くなる。溝の断面形態は逆台形状を呈する。溝の方位は北で東へ約3度振れる。

溝埋土は6層に分かれる。1層は炭混じりのにぶい黄褐色砂泥で厚さ0.08mである。2層は炭混じりの褐色粘土で厚さ0.35mである。3層は炭混じりの褐色粘土である。4層は灰黄褐色粘土で厚さ0.15mである。5層はにぶい黄褐色粘土である。6層は褐色砂泥で厚さ0.05mである。遺物は1・2層から安土桃山時代から江戸時代後期の瓦が大量に出土した。3～6層からは遺物はほとんど出土していない。

溝29（図15、図版15） 15区中央部で検出した東西溝である。方広寺南面南回廊雨落溝とされた9次調査の溝2東側にあたり、東側は調査区外へ延長する。検出面での規模は、幅0.7m～1.0m、深さ0.4mである。溝底の標高は東端で40.78mである。溝の断面形態はゆるやかなU字状を呈する。溝の方位は北で東へ約3度振れる。

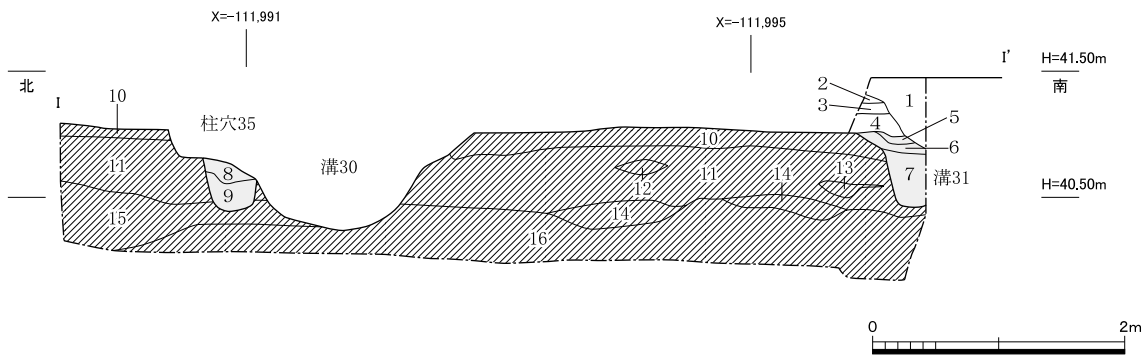
15区第2面 南北断面



- |                                  |                                       |
|----------------------------------|---------------------------------------|
| 1 電気ケーブル保全畦                      | 8 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 炭混                 |
| 2 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂 (柱穴27-2)      | 9 10YR4/4 褐色粘土 瓦・炭多量混                 |
| 3 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 やや粘質 (柱穴28-3) | 10 10YR4/2 灰黄褐色粘土                     |
| 4 10YR4/6 褐色砂泥                   | 11 10YR5/4 にぶい黄褐色・10YR5/6 黄褐色粘土 (溝30) |
| 5 10YR2/3 黒褐色粘土 瓦・炭・土器混 (溝29)    | 12 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト                  |
| 6 10YR3/3 暗褐色粘土                  | 13 10YR4/4 褐色砂泥 粗砂混                   |
| 7 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 粗砂混 (土坑34)    | 14 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土                   |
|                                  | 15 10YR4/4 褐色砂泥                       |
|                                  | 16 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 細砂混 (溝31)        |
|                                  | 17 10YR3/3 暗褐色粘土 細砂混                  |
|                                  | 18 10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂                   |
|                                  | 19 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 (V層、地山)           |

※ H-H'の位置は図版5参照

15区第2面 南北断面



- |                                  |                              |
|----------------------------------|------------------------------|
| 1 攪乱                             | 10 10YR4/6 褐色砂泥              |
| 2 10YR4/6 褐色砂泥 (II層)             | 11 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥          |
| 3 10YR4/4 褐色砂泥 (III層)            | 12 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 φ2~5cm礫混 |
| 4 10YR4/4 褐色砂泥 φ2~3cm礫混 炭混 (IV層) | 13 10YR5/6 黄褐色砂泥 粗砂混         |
| 5 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 細砂混          | 14 10YR6/4 にぶい黄褐色砂泥 φ5cm礫混   |
| 6 10YR3/3 暗褐色粘土 細砂混              | 15 10YR6/4 にぶい黄褐色砂泥          |
| 7 10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂 強い粘質 (溝31)    | 7.5YR5/6 明褐色シルト φ3~5cm礫多量混   |
| 8 10YR4/4 褐色砂泥                   | 16 2.5Y5/3 黄褐色               |
| 9 10YR5/6 黄褐色砂泥 (柱穴35)           |                              |

※ I-I'の位置は図版5参照

図15 15区南北断面図 (1:60)

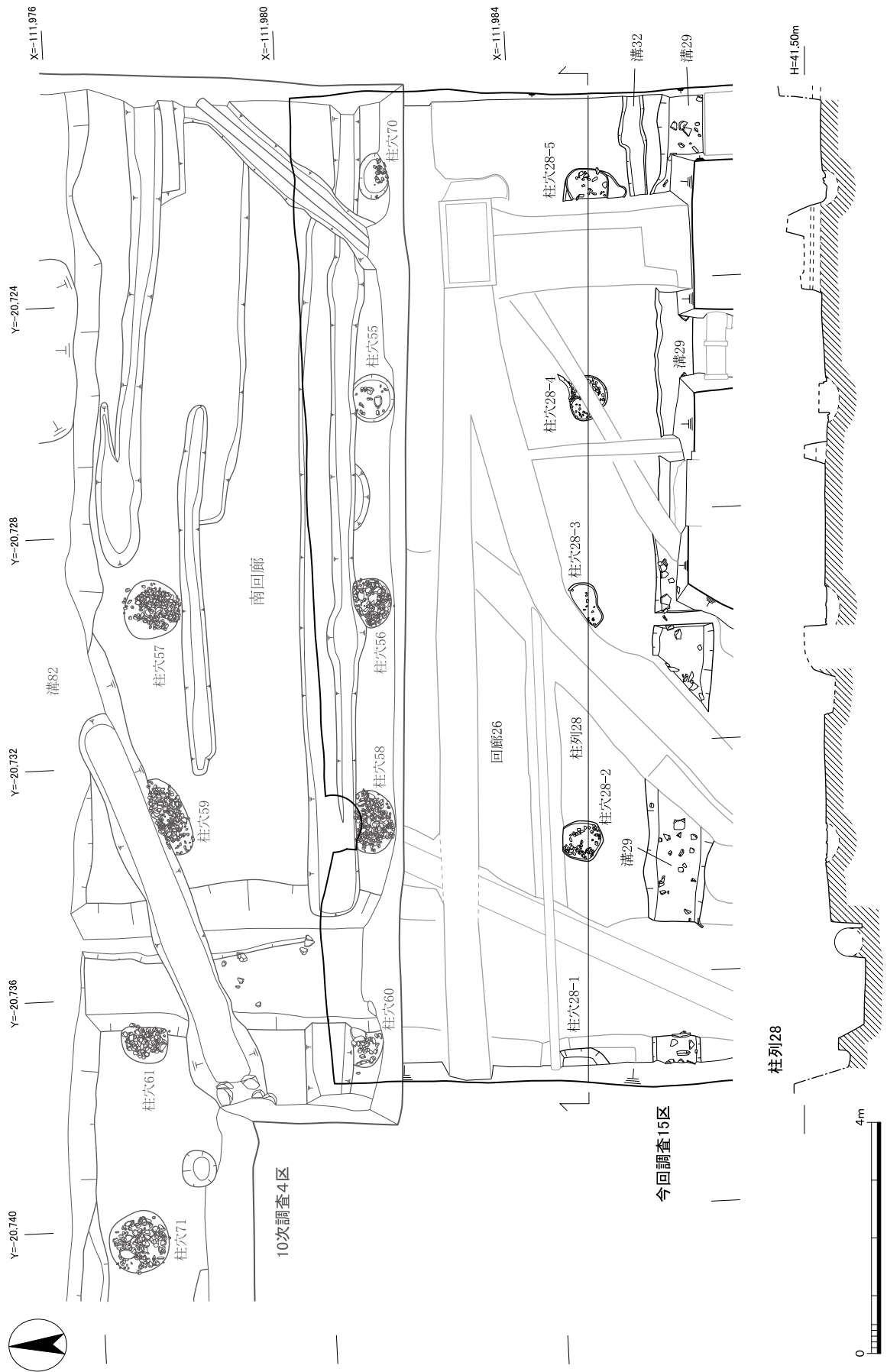


図16 15区回廊26及び10次調査区南回廊実測図 (1 : 100)



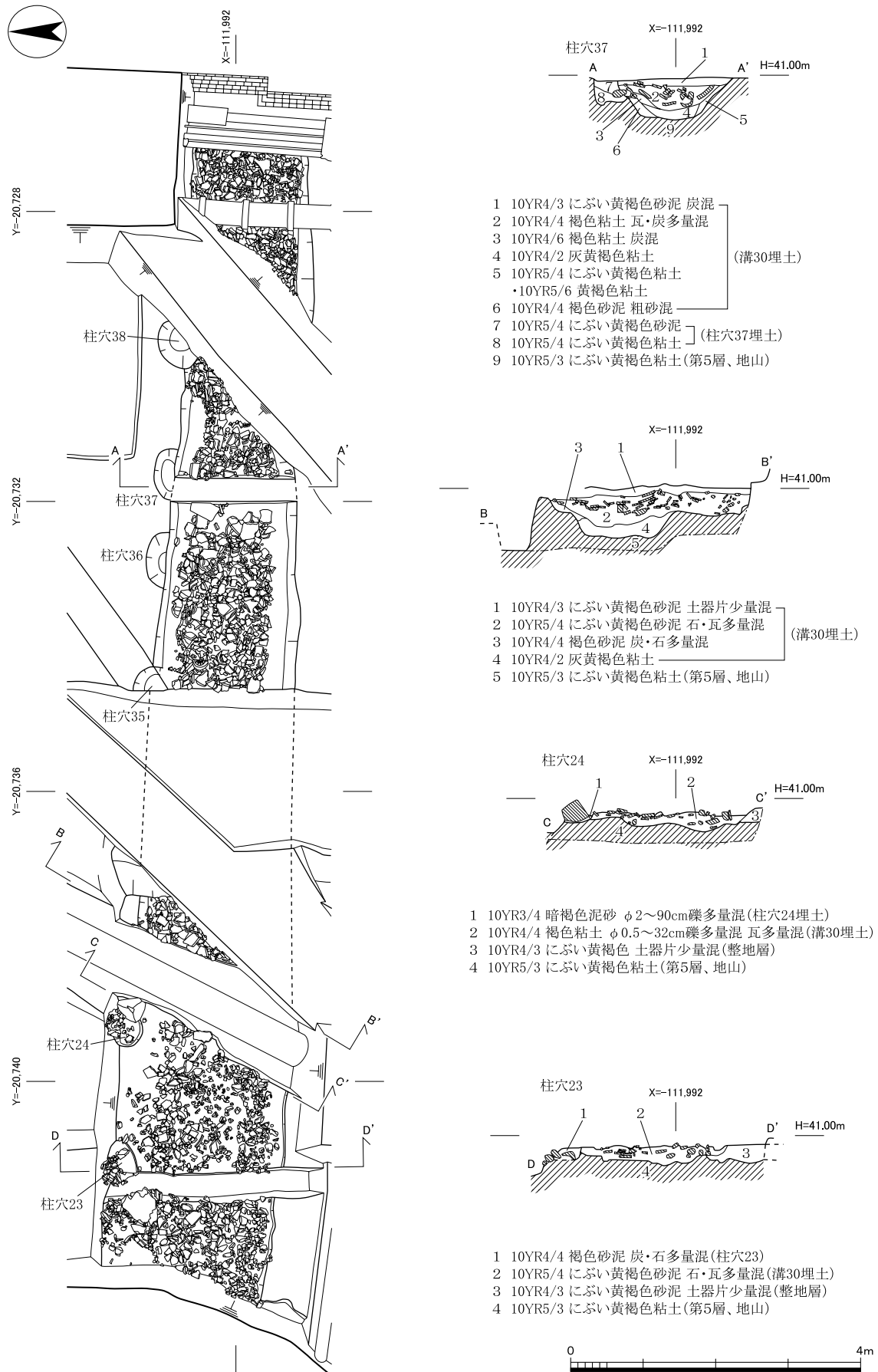


図17 15区溝30実測図 (1 : 80)

15区柱穴23・24



15区柱穴35～38

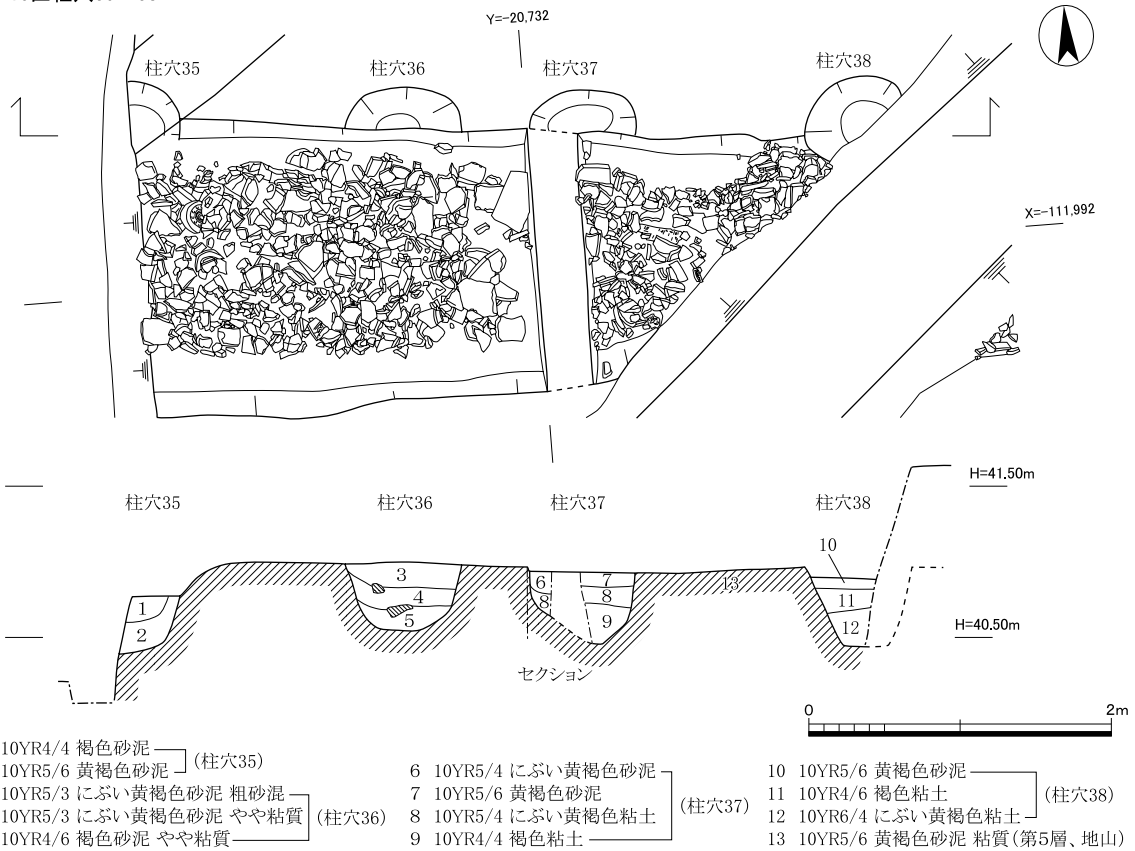


図18 15区柱穴23・24・35～38実測図 (1:50)

溝埋土は3層に分かれる。1層は褐色砂泥で、厚さ0.16mである。2層は黒褐色粘土で、厚さ0.08～0.14mである。3層は暗褐色粘土で、厚さ0.06mである。溝の埋土から瓦が一定量出土した。

**溝31**(図15) 15区南部で検出した東西溝である。溝の西側は攪乱されていたが、西・東側は調査区外へ延長する。検出面での規模は、幅0.5～0.7m、深さ0.5mである。溝底の標高は40.5mである。溝の断面形態はU字状を呈する。溝の方位は北で東へ約3度振れる。

溝埋土は3層に分かれる。1層は黄褐色砂泥で、厚さ0.1mである。2層は細砂混じりのにぶい黄褐色砂泥に暗褐色砂泥混じりで、厚さ0.22mである。3層は細砂混じりの暗褐色泥土で、0.04～0.09mの礫を含む。厚さ0.08mである。埋土から少量の瓦と土師器が出土した。時期は、出土瓦は鎌倉時代に属するが、土師器は小片であるため不明である。

**溝32** 15区北東部の溝29の北側で検出した東西溝である。検出面での規模は、幅0.3～0.4m、深さ0.1mである。埋土は褐色砂泥である。遺物は出土していない。

**土坑33**(図19) 15区東中央部で検出した土坑である。検出面での規模は、東西1.3m以上、南北1.3mである。深さは2.2mまで確認し、以下は未確認である。掘形は方形を呈する。壁面が直立

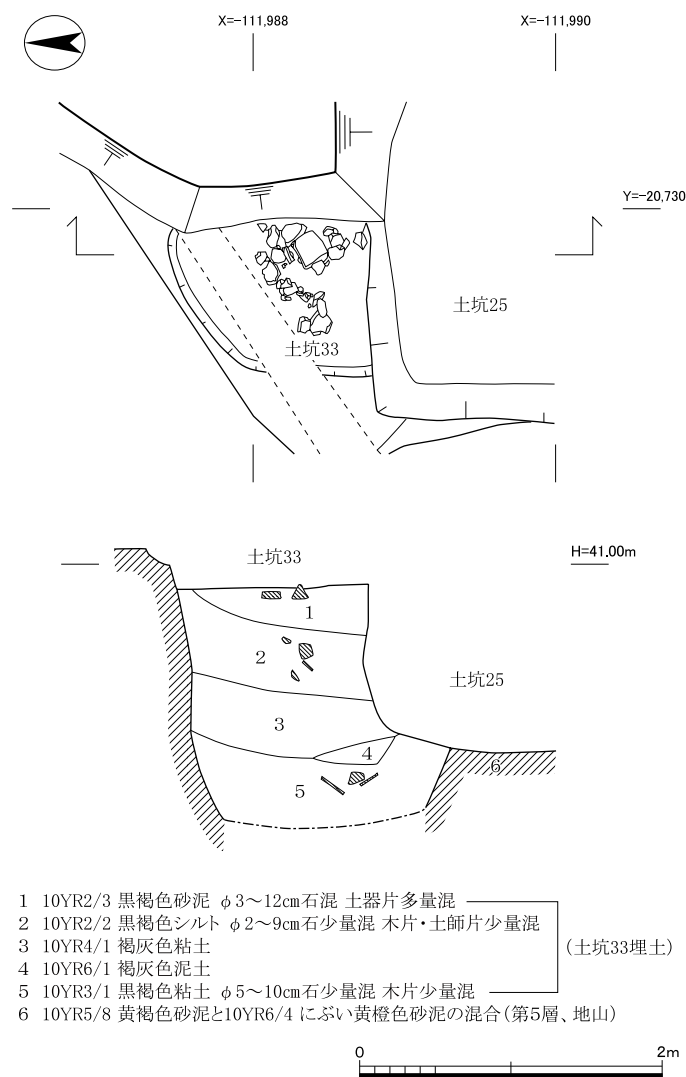


図19 15区土坑33実測図(1:50)

することから井戸の可能性はある。

埋土は5層に分かれる。1層は黒褐色砂泥で、0.03～0.12mの礫を含む。厚さは0.15mである。2層は黒褐色シルトで、0.02～0.09mの礫を含む。厚さは0.2mである。3層は褐灰色粘土で、厚さは0.3mである。4層は褐灰色泥土である。5層は黒褐色粘土で0.05～0.1mの礫を含む。厚さは0.25m以上である。埋土から土師器・瓦や木片が出土した。京都Ⅸ期に属する。

**土坑34**(図15) 15区中央部で検出した土坑である。検出面での規模は、径0.6m、深さ0.05mである。掘形は円形を呈する。埋土は粗砂混じりのにぶい黄褐色砂泥で、0.05～0.18mの礫を多量に含む。埋土から瓦が少量出土した。

**柱穴35**(図15・17・18) 15区中央部で検出した柱穴である。検出面での規模は、東西0.22m、深さ0.38

mである。遺構の西半は攪乱され、南半は溝30に切られる。掘形は円形を呈すると推定できる。埋土は2層に分かれる。1層は褐色砂泥で、厚さ0.16mである。2層は黄褐色砂泥で、厚さ0.2mである。1層が柱抜き取り痕跡にあたるかは不明である。遺物は出土していない。

**柱穴36** (図17・18) 15区中央部で検出した柱穴である。検出面での規模は、径0.87m、深さ0.45mである。南半は溝30に切られる。掘形は円形を呈すると考えられる。埋土は3層に分かれる。1層は粗砂混じりのにぶい黄褐色砂泥で、厚さ0.15mである。2層はやや粘質なにぶい黄褐色砂泥で、厚さ0.1～0.12mである。3層はやや粘質な褐色砂泥で、厚さ0.13～0.15mである。2層と3層の間で、幅0.15mの礫の平坦面を上面向けた状態で据える。遺物は出土していない。埋土の堆積から柱当りが見られないため、柱穴であるかは不明である。

**柱穴37** (図17・18) 15区中央部で検出した柱穴である。検出面での規模は、径0.72m、深さ0.47mである。南半は溝30に切られる。掘形は円形を呈すると考えられる。埋土は上下3層に分かれる。1層はにぶい黄褐色砂泥で、厚さ0.12mである。2層はにぶい黄褐色粘土で、厚さ0.12mである。3層は褐色粘土で、厚さ0.2～0.24mである。遺物は出土していない。

**柱穴38** (図17・18) 15区東部で検出した柱穴である。検出面での規模は、東西0.37m、南北0.5m、深さ0.44mである。溝30が埋没した後に成立する。掘形は円形を呈する。埋土は上下3層に分かれる。1層は黄褐色砂泥で、厚さ0.08mである。2層は褐色砂泥で、厚さ0.16mである。3層はにぶい黄褐色粘土で、厚さ0.24mである。遺物は出土していない。

**土坑39** 15区南西部で検出した土坑である。検出面での規模は、径0.35m、深さ0.34mである。掘形は円形を呈する。埋土は暗褐色砂泥である。埋土から土師器片がわずかに出土した。

**土坑40** 15区南東部で検出した土坑である。検出面での規模は、東西0.53m、南北0.23m、深さ0.2mで、円形状を呈する。埋土は褐色砂泥である。遺物は出土していない。

## 2) 16区 (図20、図版19)

V層上面で2時期の遺構を検出した。

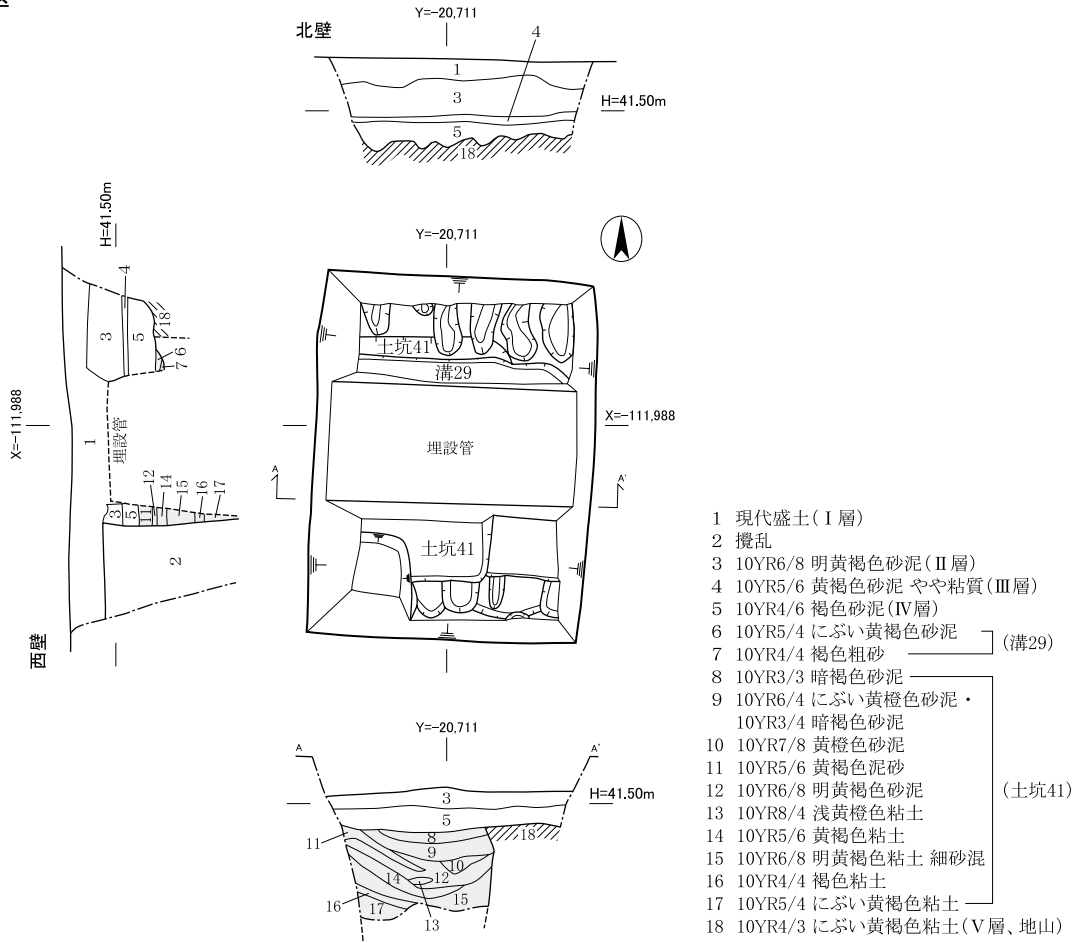
**溝29** 東西溝である。15区で検出した溝29の東延長上にあたる。検出面での規模は、幅0.22～0.25m、深さ0.1mである。溝底の標高は41.0mである。溝の断面形状は浅いU字状を呈する。堆積状況は2層に分かれる。1層はにぶい黄褐色砂泥である。2層は褐色粗砂である。遺物は瓦が少量出土した。

**土坑41** 検出面での規模は、東西1.75m、南北2.5m、深さ1.0m以上である。掘形は方形を呈すると推定できる。壁面が直立することから井戸の可能性がある。埋土は10層程度に分かれ、黄褐色砂泥と黄褐色粘土の互層である。埋土から土師器片が少量出土したが、小片のため時期は不明である。

## 3) 17区 (図20、図版20)

Ⅲ層上面で第1面、V層上面で第2面の遺構を検出した。

16区



17区

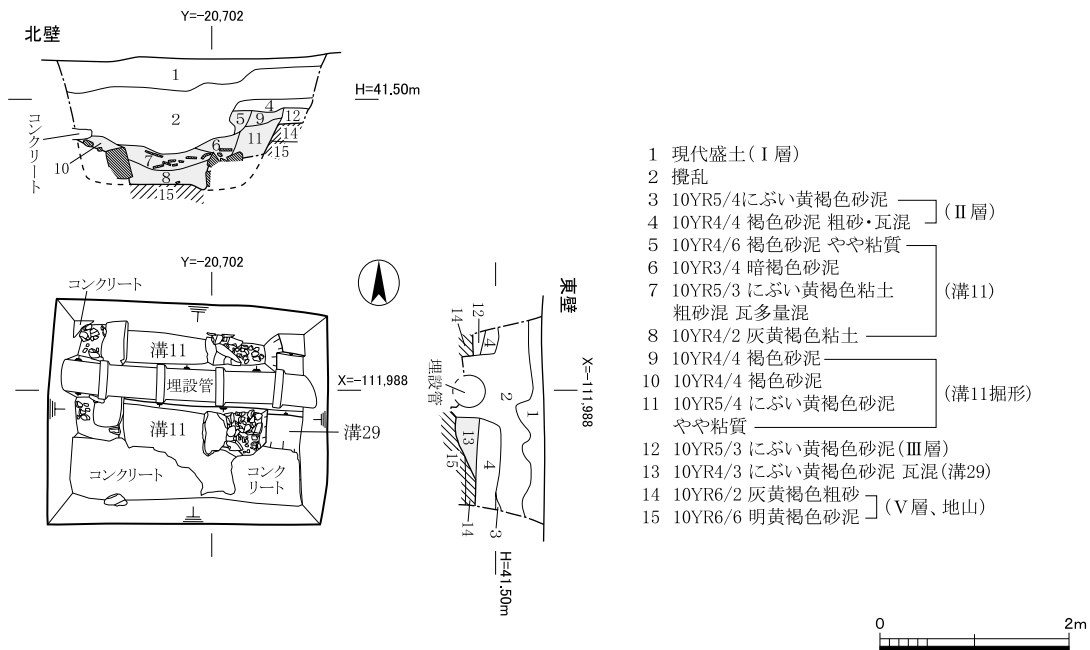


図20 16・17区実測図 (1 : 80)

溝11 第1面で検出した南北溝である。13・14区で検出した溝11の北延長上にあたる。溝の北側は調査区外へ延長する。溝の南側及び上部は攪乱される。検出面での掘形の規模は、幅2.2m、深さ0.8mである。溝底の標高は40.6mである。溝の両側を石垣で護岸する。溝の断面形状は逆コの字状を呈する。掘形埋土は、褐色砂泥・にぶい黄褐色砂泥である。溝内埋土は4層に分かれる。1層はやや粘質の黄褐色砂泥で、厚さ0.4mである。2層は暗褐色砂泥で、厚さ0.12mである。3層は粗砂混じりのにぶい黄褐色粘土で、厚さ0.16mである。4層は灰黄褐色砂泥で、厚さ0.14mである。3層から瓦が大量に出土した。

溝29 第2面で検出した東西溝である。溝の西側は溝11によって消滅する。15区検出の溝29の東延長上にあたる。検出面での規模は、幅0.57m、深さ0.25mである。溝底の標高は41.1mである。溝の断面形状は浅いU字状を呈する。溝埋土はにぶい黄褐色砂泥で、厚さ0.25mである。遺物は瓦が少量出土した。

#### 4) 18区 (図21、図版20)

溝29 V層上面で検出した東西溝である。15区で検出した溝29の東延長上にあたる。検出面での規模は、幅1.1m、深さ0.3mである。溝底の標高は41.2mである。溝の南半は攪乱される。溝の断面形状はU字状を呈する。遺物は瓦が一定量出土した。

#### 5) 19区 (図21、図版21)

19区は本館北東部に設定した。規模は南北3m×東西2mである。

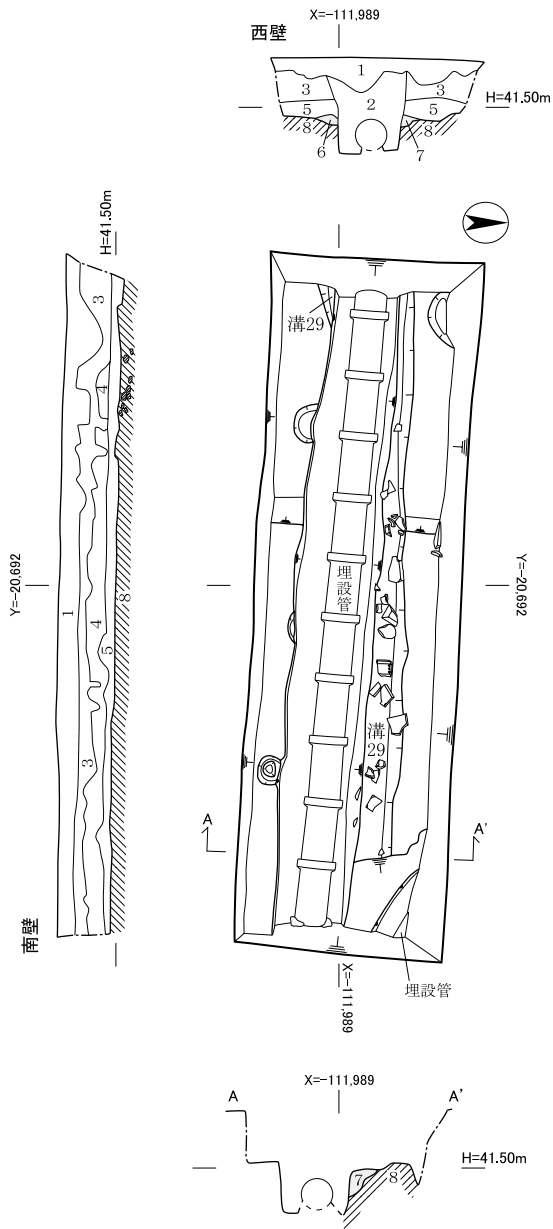
V層上面で、南北側と東側に落ち込む攪乱を検出した。遺構は検出していない。地山面の標高は41.7mである。

#### 6) 20区 (図21、図版21)

20区は本館東部に設定した。規模は南北3.5m×東西1.6m、形状は長方形である。

全面で攪乱を検出した。遺構は検出していない。

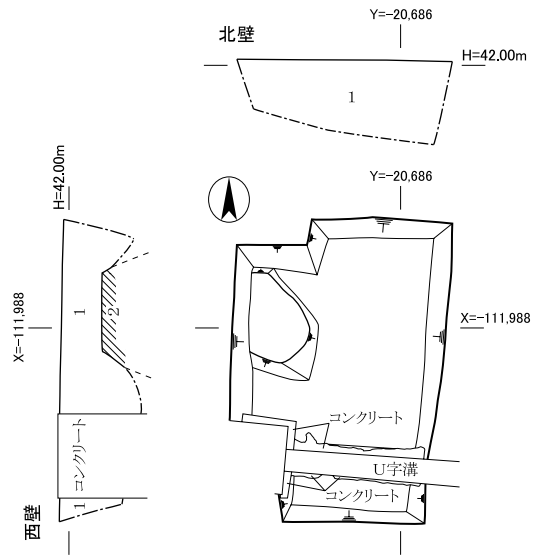
18区



- 1 現代盛土(I層)
- 2 攪乱
- 3 10YR6/8 明黄褐色砂泥 2.5Y7/4 浅黄色シルトブロック少量混
- 4 2.5Y7/2 灰黄色粘土・10YR6/6 明黄褐色粘土 (II層)
- 5 10YR3/3 暗褐色砂泥・10YR5/6 黄褐色砂泥瓦少量・炭多量混
- 6 10YR7/8 黄橙色細砂と10YR5/8 黄褐色
- 7 10YR4/2 灰黄褐色泥砂 細砂混 (溝29)
- 8 10YR5/8 黄褐色粘土 φ2~10cm石混(V層、地山)



19区



- 1 現代盛土(I層)
- 2 10YR6/6 明黄褐色粘土 粗砂混(V層、地山)

20区

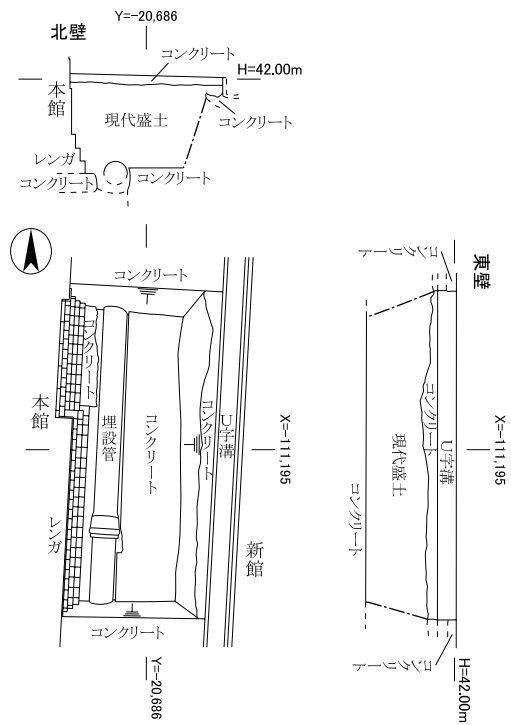


図21 18~20区実測図 (1:80)

## 4. 遺 物

### (1) 遺物の概要

今回の調査で出土した遺物は、整理用コンテナに135箱である。出土遺物には土器類・ガラス製品・瓦類・土製品・石製品・金属製品・木製品などの種類がある。そのうち瓦類が大半を占め、次いで陶磁器類、他の遺物は少ない。

鎌倉時代の遺物は、溝31から出土した軒丸瓦がある。法住寺殿に関連する遺物であるが、新しい時代の遺構から出土した。

室町時代の遺物は、土坑33から出土した土器類・瓦類・木片などがある。

安土桃山時代から江戸時代中期の遺物は、溝30からまとめて出土した。土器類には土師器・瓦器・施釉陶器・国産陶磁器、瓦類には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦などがある。

江戸時代後期から明治時代の遺物は、溝11・溝22などから出土した。土器類には土師器・国産陶磁器、瓦類には軒丸瓦・軒平瓦・菊丸瓦・丸瓦・平瓦、土製品には伏見人形・煉瓦などがある。またガラス製品も出土した。

### (2) 土器類・ガラス製品 (図22、図版23)

#### 1) 室町時代

**15区土坑33出土土器類 (1～7)** 1～4は、赤色系土師器皿である。口径が6.9～7.0cm、器高が1.2～1.7cmの小皿で、5・6は、口径が14.6～16.0cm、器高が2.7～3.0cmの大皿である。1～3は底部中央をおしあげ、体部はやや外反し、口縁端は若干立ち上がる。口縁部にヨコナデを施す。4は、底部が平坦で、器壁は口縁部付近で若干厚くなる。底部外面はオサエ、口縁部内外面に

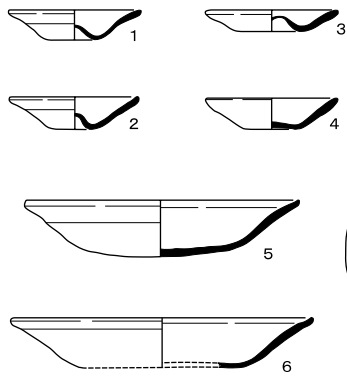
表4 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ 箱数	Aランク点数	Bランク 箱数	Cランク 箱数
鎌倉時代	軒丸瓦		軒丸瓦 1点		
室町時代	土師器、瓦器		土師器 6点、瓦器 1点		
安土桃山時代 ～江戸時代中期	土師器、瓦器、焼締陶器、 施釉陶器、磁器、瓦類		施釉陶器 1点、磁器 1点、瓦類 7点		
江戸時代後期 ～明治時代	土師器、陶器、磁器、ガラ ス製品、瓦類、土製品、石 製品、金属製品、木製品		土師器 1点、陶器 6点、磁器 12 点、ガラス製品 2点、瓦類 18点、 煉瓦 10点、石製品 1点		
合 計		158箱	67点 (11箱)	11箱	136箱

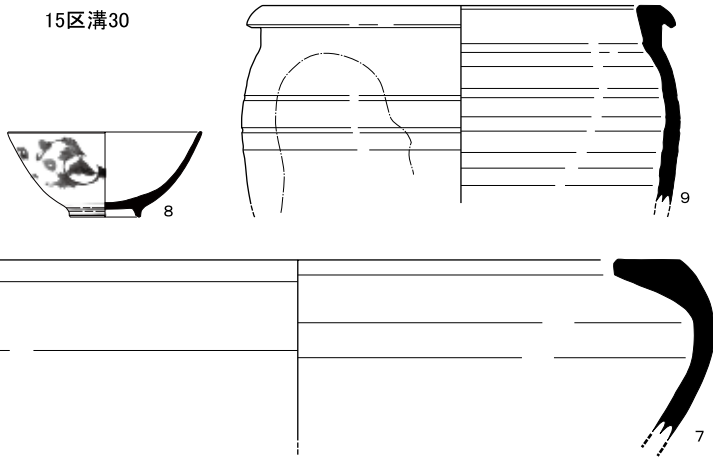
※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より23箱多くなっている。



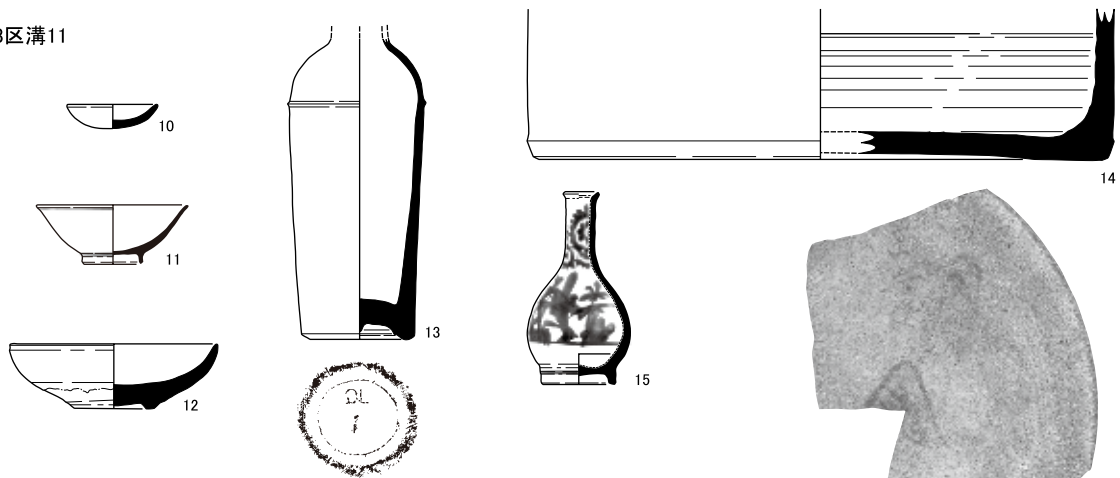
15区土坑33



15区溝30



13区溝11



15区溝22

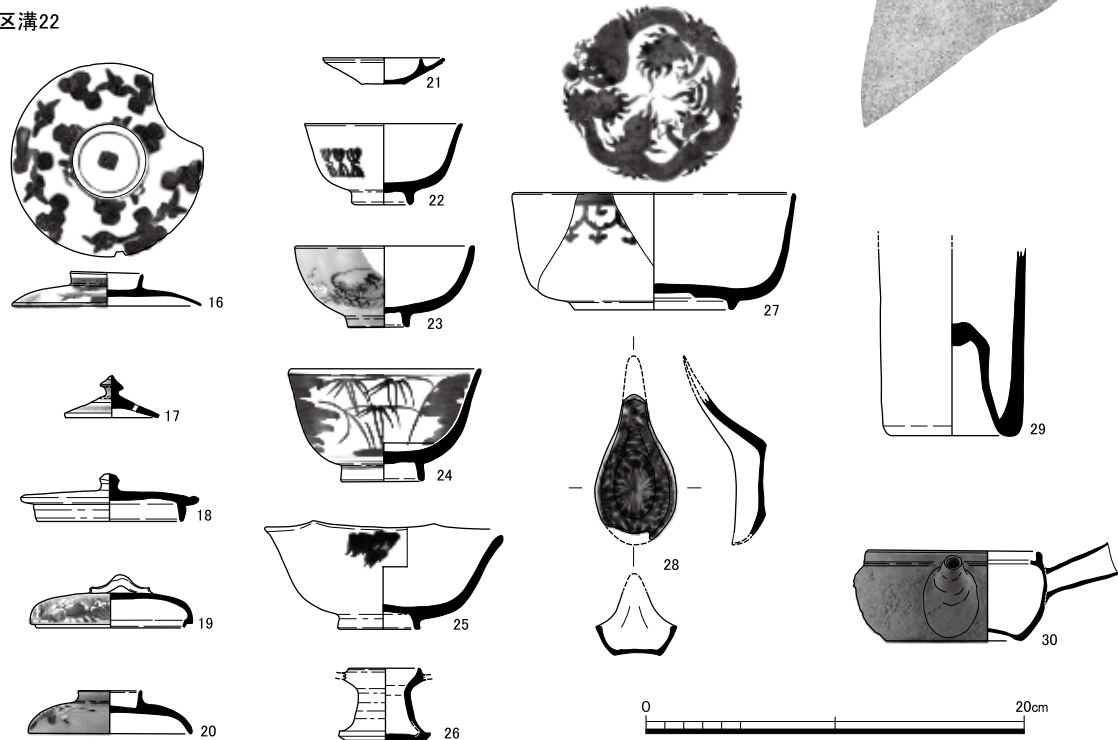


図22 土器類・ガラス製品実測図（1：4）

ヨコナデを施す。5・6は底部がやや平坦で、体部がゆるやかに外反する。口縁部はヨコナデを施す。7は瓦質土器火鉢である。調整は内外面ともに表面の摩耗劣化が著しく不明である。

これらの土器は、京都Ⅷ期に属する。

## 2) 安土桃山時代から江戸時代中期

15区溝30出土土器類(8・9) 8は肥前系染付の椀である。口径は10.2cm、器高は5.5cm、高台の高さは0.4cmである。器壁が薄い。9は焼締陶器甕である。口径は約21.0cm、器高は10.5cm以上である。頸部から体部に鉄釉を施す。産地は信楽と考えられる。

時期は18世紀後半と考えられる。

## 3) 江戸時代後期から明治時代

13区溝11出土土器類・ガラス製品(10～15) 10は土師器の小型皿である。口径は4.8cm、器高は1.3cmである。外面はオサエ、内面はナデである。内面全体に雲母片が多量に付着し、型成形である。11は肥前系染付の小杯である。口径は8.1cm、器高は3.1cm。12は唐津焼の丸皿である。口縁部が緩やかに内湾する。高台部にトチン痕跡あり。混入したと考えられる。13はガラス製瓶である。高さ16.0cm以上、最大径7.3cmである。体部は肩部までやや開きながら立ち上がり、肩部との境界線に凸線が巡る。肩部はドーム状を呈する。底部外面はゆるやかに窪む。底部外面に「73」とみられる印字がみられる。暗緑色を呈する。類例からビール瓶である可能性が高い。14は焼締陶器鉢である。底部径は29.8cm、器高は8.3cm以上である。底部外面に「西□□」と墨書がある。京・信楽系と考えられる。15は肥前系染付の小型壺である。口径は2.0cm、器高は10.2cm、高台の高さは0.5cmである。

これらの遺物は、京都ⅩⅣ期に属する。

15区溝22出土土器類・ガラス製品(16～30) 16は染付の蓋である。口径は10.1cm、器高は1.9cm、つまみの高さは0.8cmである。亀甲と折鶴文様を型刷りで施す。産地は不明である。17は肥前系染付の急須蓋である。口径は5.0cm、器高は2.2cmである。天井部には径0.3cmの穿孔を施す。18は焼締陶器の蓋である。口径は7.7cm、器高は2.5cm、つまみの高さは0.8cmである。調整は外面にケズリを施す。天井部には径0.3cmの穿孔を施す。蓋部内面に「×」字の墨書がある。京焼である。19は肥前系染付の蓋である。口径は8.6cm、器高は2.8cm、つまみの高さは0.9cmである。紐は熨斗形を貼り付ける。20は青磁蓋である。口径は8.7cm、器高は2.3cm、つまみの高さは1.2cmである。薄緑色を呈した青磁に上絵付を施す。体部に「一枚□」と文字が書かれる。産地は不明である。21は陶器の灯明皿である。内面全体に施釉する。口径は6.4cm、器高は1.4cmである。口縁部が若干立ち上がる。外面にケズリを施す。京・信楽系と考えられる。22は染付椀である。口径は10.2cm、器高は5.9cm、高台の高さは1.0cmである。産地は瀬戸産と考えられる。23は青磁椀である。体部に青磁の上から上絵付を施す。20の蓋とセットになる。24は肥前系染付の小型椀である。口径は8.4cm、器高は5.3cm、高台の高さは0.8cmである。体部には4ヶ所に施文する。25は肥前系染付の椀であ

る。口径は12.6cm、器高は6.7cm、高台の高さは0.9cmである。口縁部は輪花につくり、やや外反する。瀬戸産と考えられる。26は焼締陶器の灯火具である。口径は3.9cm以上、器高は3.8cm以上である。京・信楽系と考えられる。27は肥前系染付の深皿である。口径は15.0cm、器高は6.2cm、高台の高さは0.5cmである。底部内面に龍文様を施す。28は染付の散蓮華である。最大長7.8cm、最大幅4.3cmである。29はガラス製瓶である。高さ11.0cm以上、最大径8.0cm以上である。底部外面から体部は垂直にのびる。底部は中央に押し上げられる。暗緑色を呈する。類例からワイン瓶と考えられ、ボルドー型である。30は焼締陶器の急須である。口径は9.4cm、器高は4.8cmである。底部外面に布目痕が残り、型作りである。注口と把手部分は別粘土を貼り付けて成形する。体部に梅花と鶯文様を施す。口縁部にヨコナデを施す。京焼である。

時期は19世紀中期頃と考えられる。

### (3) 瓦 類 (図23～25、図版24)

#### 1) 鎌倉時代

**軒丸瓦 (31)** 31は複弁蓮華文軒丸瓦である。凸型中房で、類例には中房に文字を配するものがあるが、欠けているため不明である。外区に珠文と圏線が巡る。間弁は長く珠文に接するものもある。胎土は全体的に粗く、長石を多量に含む。溝29から出土した。常盤仲ノ町遺跡出土軒丸瓦と同文である〔鈴木1978〕。時期は鎌倉時代前期である。

#### 2) 安土桃山時代から江戸時代中期

安土桃山時代から江戸時代の瓦類の大半は、溝29・溝30から出土した。出土した軒瓦や丸瓦・平瓦には、一般的な瓦の規格のものと、大型の瓦がある。大型の瓦は、これまで大仏殿周辺しか出土していないことから、方広寺大仏殿所用瓦である〔南2014・山崎2008〕。一般規格の瓦は、瓦当文様から安土桃山時代と江戸時代中期のものに分かれる。

**軒丸瓦 (32～34)** 32は右巻き三巴文軒丸瓦である。巴の尾が互いに接する。外区は珠文が巡る。調整は、外区外縁及び内縁に面取りを施す。瓦当側面はヨコナデ、瓦当裏面下端に円周状ナデを施す。焼成は焼き締まる。時期は安土桃山時代である。33は大型右巻き三巴文軒丸瓦である。巴の尾が互いに接する。調整は、外区外縁及び内縁に面取り、外区及び丸瓦凸面部は丁寧なミガキを施す。また丸瓦との接合部にあたる瓦当裏面上部には、縦横方向のカキメを施す。焼成は焼き締まるが二次的な被熱を受け、全体的ににぶい黄橙色を呈する。時期は安土桃山時代である。34は右巻き3巴文軒丸瓦である。外区には大きな珠文が密に巡る。調整は、外区外縁及び内縁に面取り、瓦当側面にはヨコナデ、瓦当裏面下端には円周状にナデを施す。丸瓦との接合部には縦方向のカキメを施す。瓦当面に雲母(キラコ)が多量に付着する。焼成は焼き締まり、灰色を呈するが、二次的被熱を受け若干黄色がかかる灰白色を呈する。時期は江戸時代である。32～34はいずれも溝30から出土した。

**軒平瓦 (36～39)** 36・37は大型外行唐草文軒平瓦である。唐草の巻きは強い。周縁幅が広い。

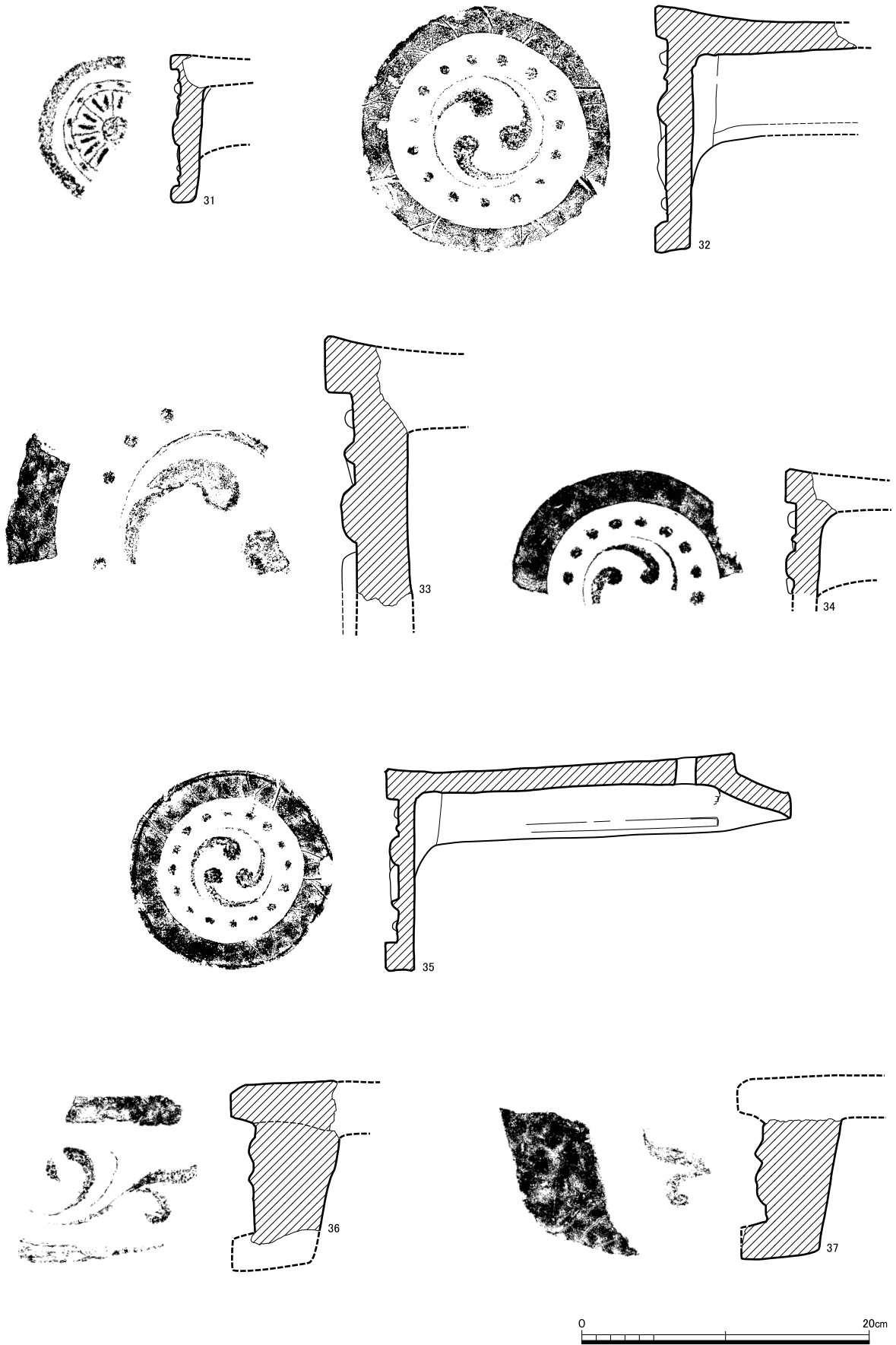


図23 軒瓦拓影及び実測図（1：4）

調整は上外区外縁に面取りを施し、顎裏面はヨコナデを施す。瓦当成形は、顎接合部にヨコ方向カキメを施し、顎貼り付けである。焼成は焼き締まるが、二次的被熱を受け、全体的ににぶい黄橙色を呈する。時期は安土桃山時代である。38は外行唐草文軒平瓦である。中心飾りは四葉花文である。唐草の巻きは強い。調整は、顎端面・顎裏面にヨコナデを施す。瓦当成形は、顎接合部に横方向カキメを施し、顎貼り付け技法である。焼成は焼き締まり、灰色を呈する。瓦当面に全体的に雲母が付着する。同文の軒平瓦が知恩院集会堂から出土した〔山崎2008〕。江戸時代中期である。39は外行2転唐草文軒平瓦である。中心飾りは花文で、第1唐草は複線である。調整は上外区外縁及び内縁、下外区外縁及び内縁、脇区外縁及び内縁、顎端面後縁に面取りを施す。顎端面・顎裏面はヨコナデを施す。瓦当成形は顎貼り付けである。焼成は焼き締まるが、二次的被熱を受け変色する。瓦当面及び平瓦凹面部に雲母が付着する。同文の軒平瓦が方広寺大仏殿基壇東側から出土している〔南2014〕。時期は江戸時代である。36～39はいずれも溝30から出土した。

### 3) 江戸時代から明治時代

江戸時代から明治時代の瓦類の大半は、溝11・溝22から出土した。時期は、瓦当文様・成形技法から江戸時代から明治時代と考えられ、恭明宮所用瓦と考えられる。

**軒丸瓦 (35)** 35は右巻き3巴文軒丸瓦である。巴の尾は短い。外区は珠文が巡る。調整は外区外縁に面取り、瓦当裏面は不定方向ナデ、下端は円周状にナデ。瓦当側面はナデを施す。焼成は焼き締まり、表面は灰色を呈する。溝11から出土した。

**軒平瓦 (40・41)** 40は外行2転唐草文軒平瓦である。中心飾りは中房表現がある三葉文である。唐草は離れ、巻きが強い。両端周縁が広い。調整は、上外区外縁と顎端面後縁に面取り、顎端面と顎裏面にヨコナデを施す。焼成は焼き締まり、灰色を呈する。瓦当面には雲母が多量に付着する。溝11から出土した。41は外行2転唐草文軒平瓦である。中心飾りは橘文である。唐草は離れ、巻きが強い。両端周縁が広い。調整は上外区外縁に面取りを施し、顎端面、顎裏面にヨコナデを施す。瓦当成形は顎貼り付けである。焼成は、焼き締まり燻され、灰色を呈する。溝22から出土した。

**菊丸瓦 (42)** 42は菊丸瓦である。内区は16弁菊文である。調整は、外区外縁に面取り、瓦当側面ヨコナデ、瓦当裏面下端は円周状にナデを施す。焼成は良好で焼き締まり、暗灰色を呈する。瓦当面には雲母が多量に付着する。溝11から出土した。

**刻印瓦 (49～62)** 江戸時代から明治時代の軒瓦・丸瓦・平瓦には、刻印を押捺したものがある。49～51は丸囲いに一の字文である。52は梅鉢文である。53は井桁文である。54は勾玉文である。55は蛇の目文である。56は文字のようにみえるが不明である。57は二重木瓜文である。58は文様不明である。59は「山城国大佛瓦師／五左衛門作」である。60は「吉春藤□門」である。既往の発掘調査で同一の刻印が出土した〔南2014〕。61は刻印全体の上3分の1に「□州」、下3分の2に「□□□□／垣内平兵衛」である。62は刻印全体の上3分の1に、「山に上」を中心に「江州」、下3分の2に「八幡□／御瓦所／瓦屋徳三郎」と、平瓦側面に「瓦徳」である。

49・50・52～59は溝30、51・60は溝22、61・62は溝11から出土した。

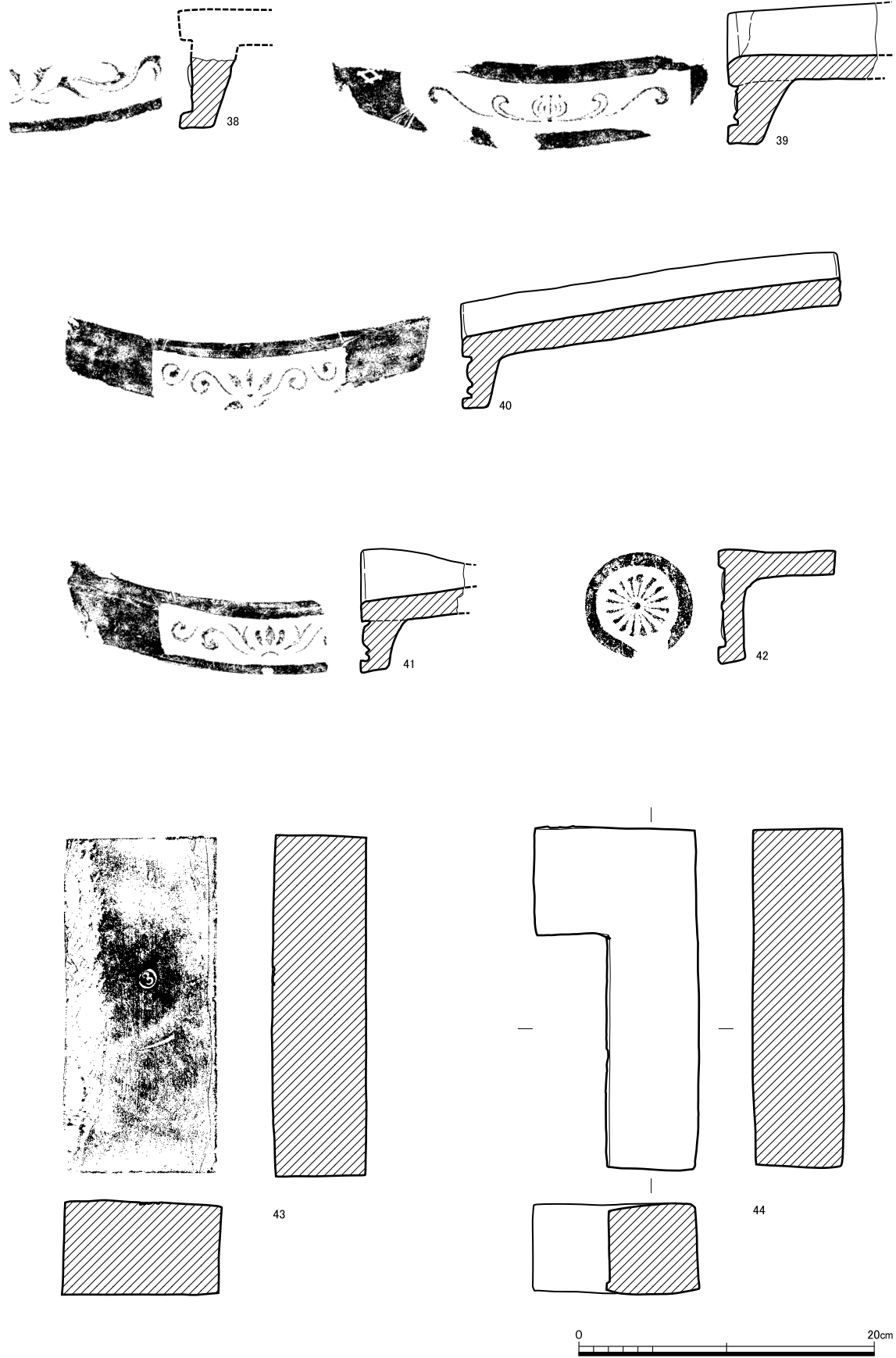


图24 軒瓦・煉瓦拓影及び実測図（1：4）

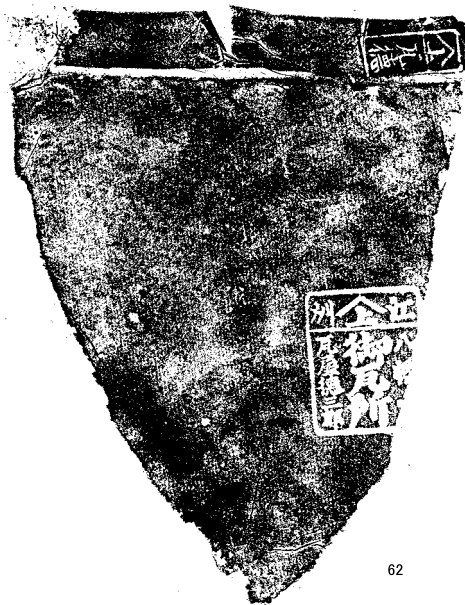
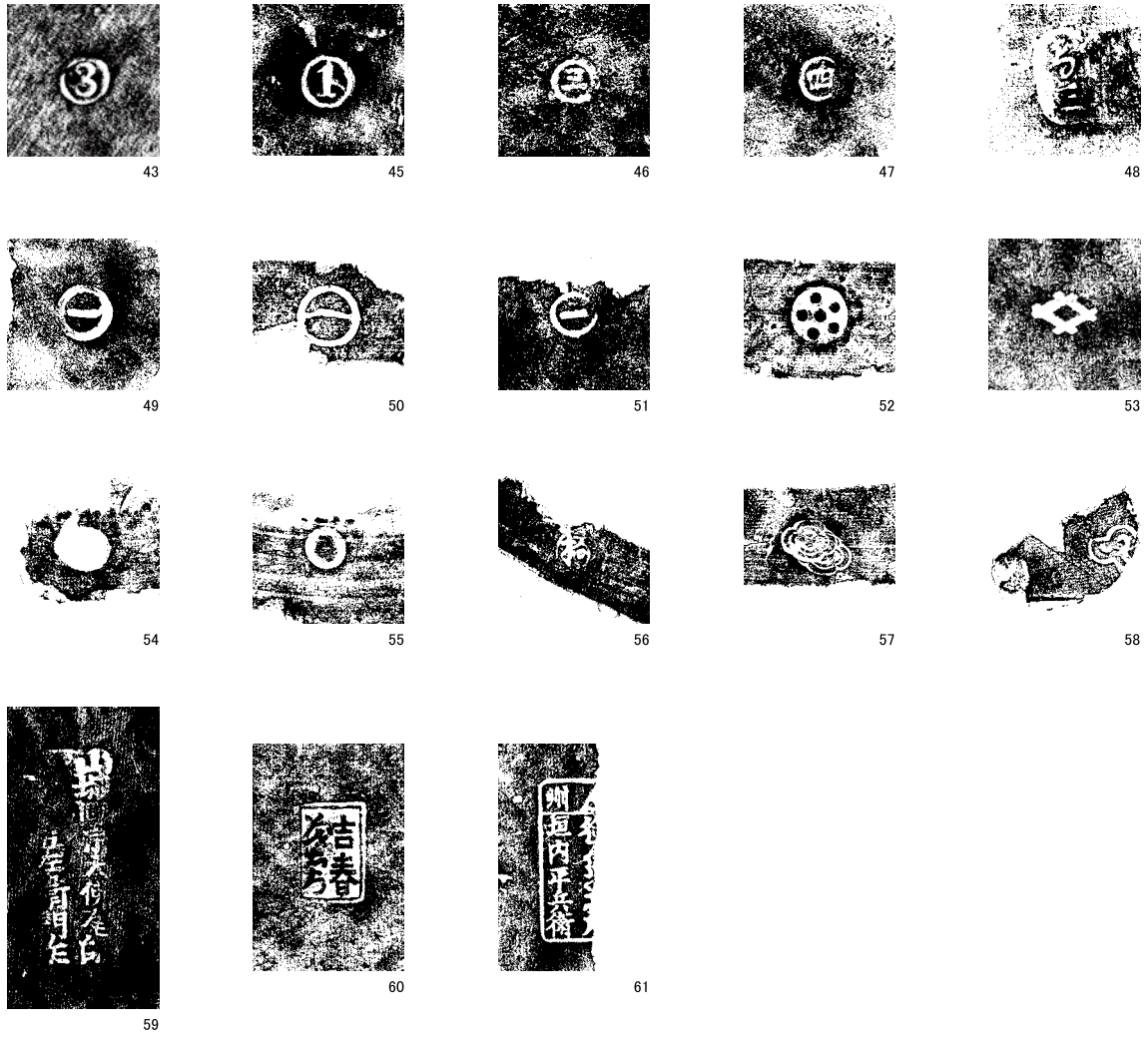


図25 瓦・煉瓦・石製品の刻印拓影 (1:2、63のみ1:4)

#### (4) 煉瓦 (図24・25、図版24)

煉瓦 (43・44・64～67) 43は長方形で、長さ22.2cm、幅10.9cm、厚さ6.4cmである。表面には刻印が捺される。箱形の型で成形し、表面はナデを施す。44は長方形のものをヘラで切り取りL字状に成形する。長さ23.0cm、幅11.2cm、厚さ6.2cmである。煉瓦の大きさは博物館本館に使用された煉瓦と同規格であり、大正14年の規格統一前の大きさである〔水野1988〕。

43・44・64～67は、いずれも1～14区の攪乱から出土した。

刻印煉瓦 (43・45～48) 煉瓦で、刻印を押捺したものを集成した。

43は「丸囲い」に「3」である。45は「丸囲い」に「1」である。46は「丸囲い」に「三」である。47は「丸囲い」に「四」である。48は「□三」である。いずれも、13・14区の攪乱から出土した。

#### (5) 石製品 (図25)

石材 (63) 63は溝11の東側石組みに使用されていた石材である。大きさは一辺約40cmの角材で、一辺に溝を加工する。表面に「立鼓」形の刻印が刻まれる。花崗岩である。大仏殿周辺で確認された石材に同文様の刻印が認められる〔南2014〕。



## 5. ま と め

今回の調査では、室町時代、安土桃山時代から江戸時代、明治時代以降の遺構を検出した。調査で検出した最も古い遺構は、室町時代のものである。それより以前の遺物は出土しているものの、遺構は検出していない。ここでは、周辺の調査成果も含め、遺構の変遷を時期別にまとめておく。

### (1) 中世以前

平安時代の遺構（図26） 博物館構内における既往の調査で、平安時代と推定される主な遺構には以下のものがある。

平安時代前期の遺構は、3次調査8区の3-土坑61、3-埋納遺構1、4次調査10区の4-南北溝325、4-土坑326などがあるが、ごくわずかである。

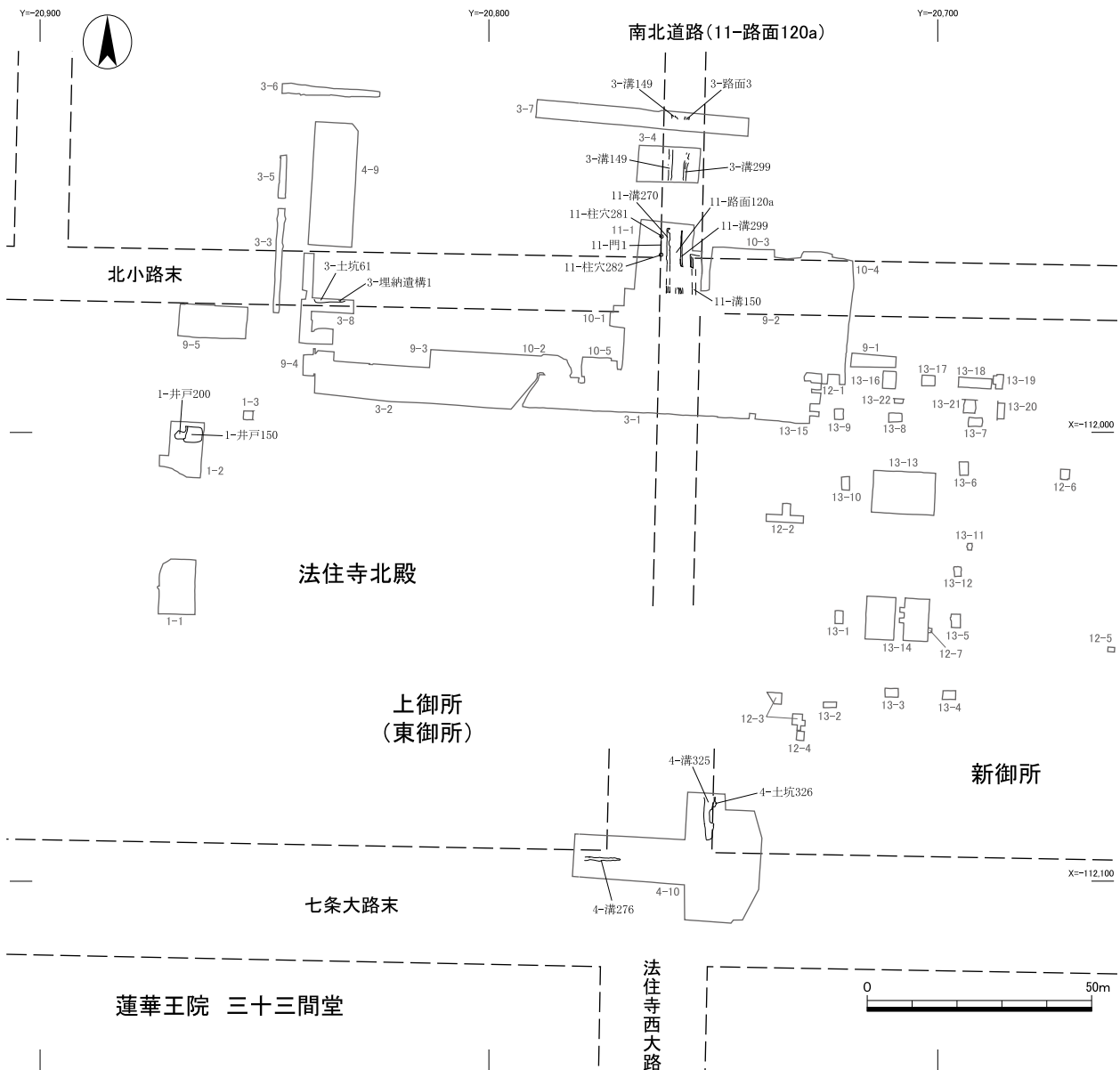


図26 平安時代の遺構概要図（1：1,500）

平安時代後期の遺構は、3次調査4・7区、4次調査10区、10次調査1区、11次調査1区で、南北道路(11-路面120a、幅4.5~4.8m)及び両側溝を検出した。道路の方位は、北で東に約2度振れる。南北道路西側では、11次調査1区で道路に面した11-門1を検出した。構内南側の4次調査10区では、4-東西溝276を検出した。構内西側の1次調査2区では、1-井戸150・200や柱穴群を検出した。

当該期の遺構は、法住寺北殿に関連した遺構と考えられる。南北道路(11-路面120a)は、法住寺殿域の南北幹線道路である「法住寺西大路」の北側にあたる。4-東西溝276は、平安京七条大路を東に延長した北側にはほぼあたることから、法住寺殿域の東西幹線道路である七条大路末の北側溝の可能性が高い〔上村2004〕。北側の門や西側の井戸などの遺構が存在することから、北殿周辺が居住地域となっていた状況が窺える。

鎌倉時代から室町時代の遺構(図27) 今回の調査では、15区南部で東西方向の13-溝31を検

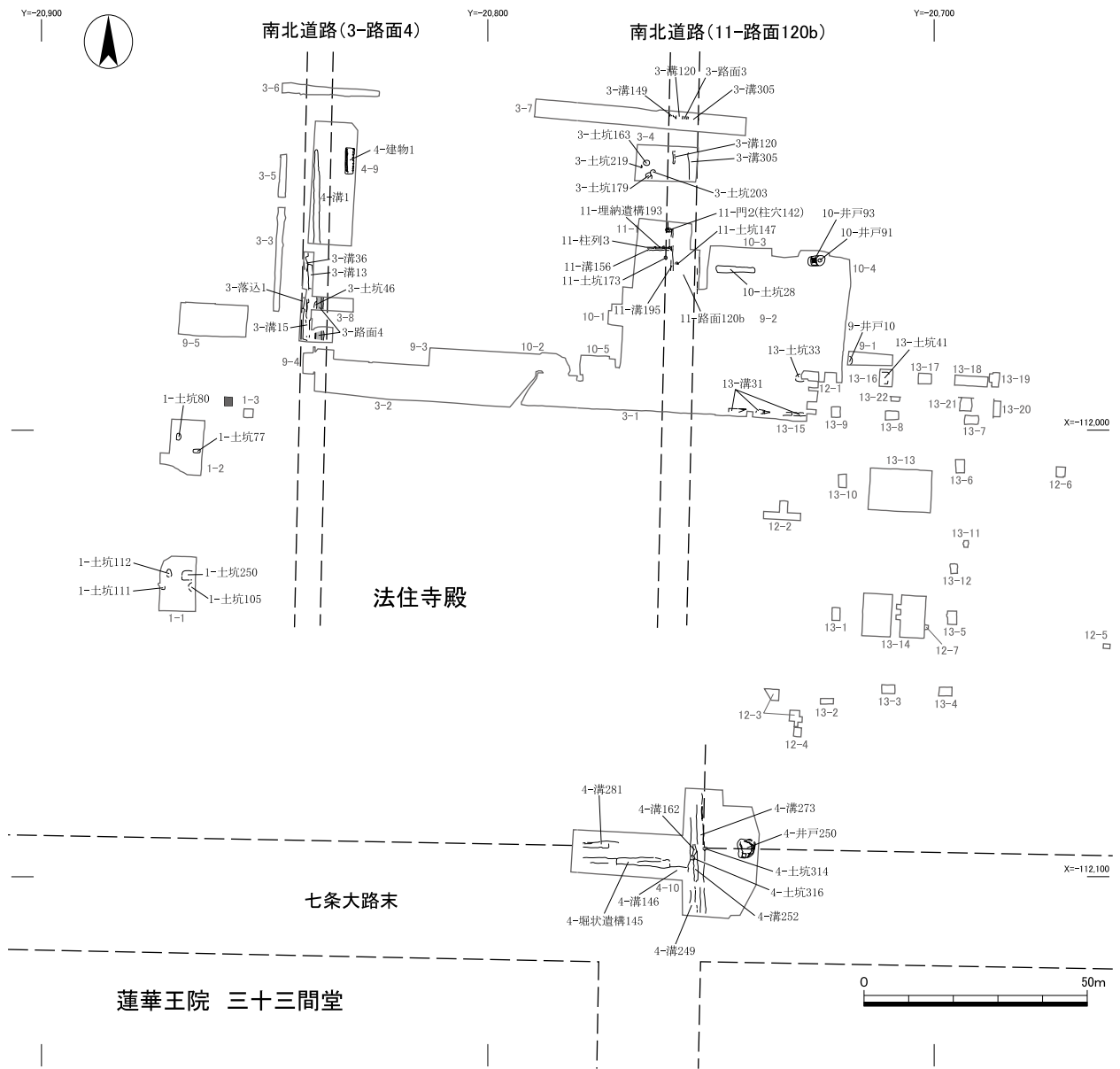


図27 鎌倉時代から室町時代の遺構概要図(1:1,500)

出した。15区東部では13-土坑33、16区では13-土坑41を検出した。両土坑共に壁面がほぼ垂直であることや、平面が隅丸方形と推定できることから井戸の可能性が高い。これらの遺構の時期は、室町時代後半（京都IX期）である。

博物館構内における既往の調査で、鎌倉時代から室町時代と推定される主な遺構には以下のものがある。

3次調査4・7区、11次調査1区では、平安時代後期から継続する南北道路（11-路面120b、幅4.5～4.8m）及び両側溝を検出した。この道路は、平安時代後期の南北道路（11-路面120a）よりやや東に移る。道路の方位は、前時代と同様に北で東に約2度振れる。道路の西側では、11次調査1区で道路に面した11-門2と11-直交溝156、11-柱列3を検出した。道路の東側では、10次調査3区で10-井戸91・93、10-土坑28、9次調査1区で9-井戸10、4次調査10区で4-井戸250を検出した。今回調査で検出した13-溝31、13-土坑33・41もこのエリアに含まれる。南北道路（11-路面120b）の西側約80mでは、4次調査9区、3次調査8区で南北道路（3-路面4、約3.5m）、4-建物1や3-土坑46などを検出した。

博物館構内以外では、西側の1990年調査では、鎌倉時代の南北方向の堀・門、鎌倉時代から室町時代の溝・井戸・土坑・柱穴などを検出した〔上村ほか1994〕。南北方向の堀の位置は南北道路（3-路面4）の約100m西である。また、東側の2012～2013年調査では、鎌倉時代から室町時代の井戸・土坑・柱穴などを検出した。〔上村2013〕

以上のことから、当該期には平安時代法住寺殿の道路を踏襲して南北道路（11-路面120b）があり、その西側に南北道路（3-路面4）、さらに西側に南北堀などの区画が見られる。道路に面して門を構えていることや、区画内に井戸・土坑・柱穴などが見られることから、広範囲に街区が形成された様子が見て取れる。鎌倉時代の遺構は、源頼朝によって再建された法住寺殿とその周辺の街区に関連する可能性が高い。

法住寺殿域では平安時代から中世の遺構が良好に残存しており、近世・近代の造成工事はそれほど規模が小さくないと考えざるを得ない。平安時代後期から中世の段階で、本館東側の段差や東大路東側の段差などが造成され、平坦な敷地が確保された可能性が高い。〔上村2004〕

## （2）安土桃山時代から江戸時代前期（図28）

今回の調査では、15～18・21・22区で、安土桃山時代から江戸時代の方広寺に関連する遺構を検出した。

**回廊について** これまでの調査成果と合わせて、13-回廊26は方広寺大仏殿南回廊、13-柱列27は回廊棟柱筋、13-柱列28は回廊南側柱筋にあたる。

廻廊柱穴の距離は、上面が削平されているため、数値に若干のばらつきが生じた。このため柱穴距離数値から、平均値の算出を試みた。この結果、3.72mという結果となった。この結果は、これまでの調査成果や、それらを元に作成された復元案で示されている桁行・梁間ともに3.75m（12.5尺）等間という見解におよそ合致する〔長宗2010〕。

回廊整地について 15区西部では、地山直上で細砂を含む褐色砂泥が約0.18m堆積する。この土層は、9次調査で検出した回廊基壇に伴う整地土層と同様である〔網ほか2010〕。

ただ、今回の調査では、回廊部分のみでなく、南側の13-溝29、13-溝30付近まで整地層を確認したことから、回廊基壇に伴う整地であると断定することは難しい。また、この整地層はY=-20,737以東では検出していない。このことから、現時点ではY=-20,737より西側に広がる方広寺大仏殿域の整地層と評価できよう。

回廊南雨落溝について 15~18区では、東西方向の13-溝29を検出した。方位は北で東へ約3度傾く。9次調査で検出した9-溝2の東延長部にあたり、一連の溝と考えられる。溝は東西約61m検出した。溝底の標高は15区で40.8m、16区で41.0m、17区で41.1m、18区で41.2mとなり、東から西へとゆるやかに傾斜する。溝と回廊南側柱との心々距離は約1.1mである。溝の埋没時期は、埋土中の遺物から、江戸時代である。埋土中から大型の大仏殿所用瓦が一定量出土し、18区で

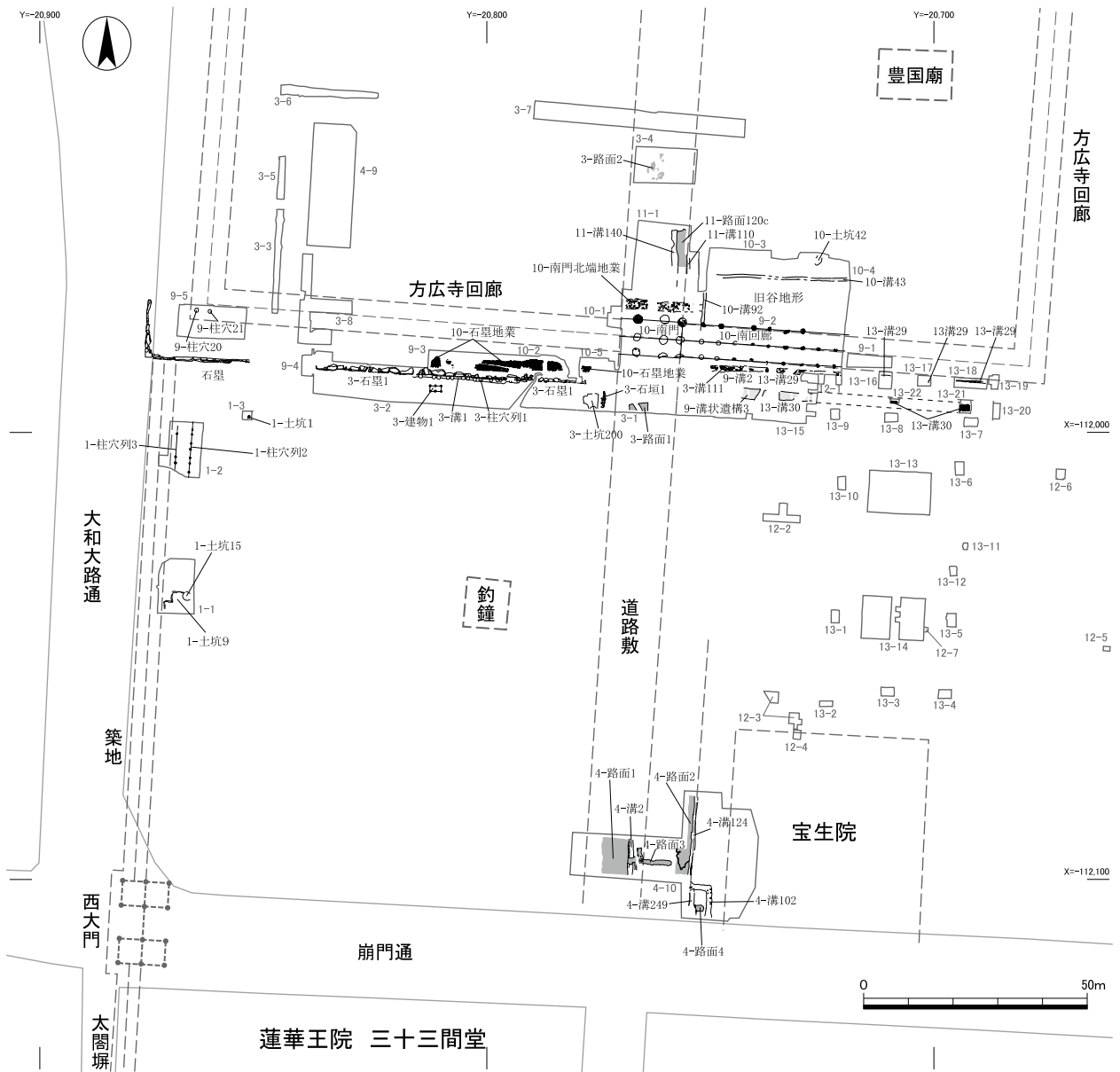


図28 安土桃山時代から江戸時代の遺構概要図 (1 : 1,500)

は、溝底から北肩にかけて瓦が集中した。13-溝29は、これまでの調査で指摘されていたように、回廊に伴う南側雨落溝と考えられる。

回廊南側溝について 15・21・22区では、東西方向の13-溝30を検出した。方位は北で東へ約3度傾く。9次調査で検出した9-溝状遺構3の東延長部にあたり、一連の溝と考えられる。溝は東西約50m分を検出した。溝底の標高は、15区では $Y = -20,741.2$ 付近で40.58m、 $Y = -20,739.4$ 付近で40.54m、 $Y = -20,738$ 付近で40.32m、 $Y = -20,731.8$ 地点で40.35m、21区では40.86mである。このことから、 $Y = -20,738$ 付近から $Y = -20,731.8$ 地点が凹む。溝と回廊南側柱との間隔は約6m南で、3次調査で検出した南面石塁の東延長線よりも南側に位置する。

溝の埋没時期は、出土した信楽焼や軒瓦から、18世紀中頃である。埋土中から大仏殿所用瓦が多量に出土し、大半がオレンジ色を呈し、火災二次的の被熱を受けたと考えられる。これらの瓦は、寛政10年（1798）7月1日の焼亡記事と重ね合わせて考えることが可能である。

13-東西溝30は、大仏殿南回廊・南雨落溝と方位が同一で、南回廊に沿って南側に位置すること、また、出土遺物の年代などから、方広寺回廊に関連する南溝と理解できる。溝内埋土から被熱を受けた瓦が多量に出土したことから、寛政10年（1798）7月1日時点まで溝は開いており、その後の整理で溝が埋められた可能性が高い。

今回の調査における方広寺に関する遺構は、これまでの調査成果を裏付けた。しかし、これまで本館付近から東側には遺構は残存していないと考えられていたが、大仏殿回廊雨落溝や南溝などの遺構を検出したことは大きな成果といえる。

### （3）明治時代以降（図29）

今回の調査では、13・14・17区で南北方向の13-溝11を検出した。溝の西側では、13-石列12と13-南北溝13を検出した。方位は、北で東へ約3度傾く。時期は、出土した遺物から近代と推定できる。方向などが揃うことから、13-石列12は築地関連施設、13-溝13は西側雨落溝と推定した。

15区では、南北方向の13-溝22を検出し、10次調査4区で検出した10-溝63（幅約2.5m、深さ約0.6m）と同一である。時期は、出土した遺物から近代と推定できる。13-溝22（10-溝63）と13-溝11は、方位がほぼ揃い時期も同一である。13-溝22と13-溝11の間隔は、溝心々で34mである。

博物館構内における既往の調査で、明治期と推定される主な遺構は以下のものがある。

本館北側の立会調査（00BBRT391）で西面する石垣（検出長4m）と約1m西側で南北方向の丸太〔菅田ほか2002〕、本館8室床下の立会調査（07BBRT214）で西面する石垣を検出した〔吉本2008〕。これらの遺構は、今回検出した13-溝11の延長上に位置し、規模・形態が類似することから、一連の遺構と捉えられる。

10次調査4区では、10-南北溝64（幅1.5m、深さ0.6m）を検出した。10-溝64と13-溝22の間隔は、溝心々で約18m。13-溝11と10-溝64は約52mである。

その他、11次調査では1区で11-溝103(幅0.5~1m、深さ0.1m)、11-溝103と平行した11-柵7、11-井戸104(円形で径約2m、漆喰井戸枠径1m)、10次調査では10-柵4~6などを検出した。

以上の検出した南北溝などは、時期・方位が同様なことから、一連の遺構と推定できる。また、井戸などの遺構も同時期と推定できる。当該期の遺構は、明治時代に造営された恭明宮に関連した遺構と推定できる。

当該期の遺構、及び現博物館敷地境界線などを基にして、巻頭図版3「恭明宮造営出来形絵図」『中御門家文書恭明宮関係書類』〔早稲田大学図書館蔵〕と現地図を合わせると、巻頭図版2のようになる。この図から、13-溝11は恭明宮敷地東限の溝、13-溝22(10-溝63)は敷地東部の南北区画溝、10-溝64は女官住居棟群の裏側の南北溝に相当する。また、11-井戸104は東第三局(梅園)の住居内部の井戸にあたる可能性が高い。

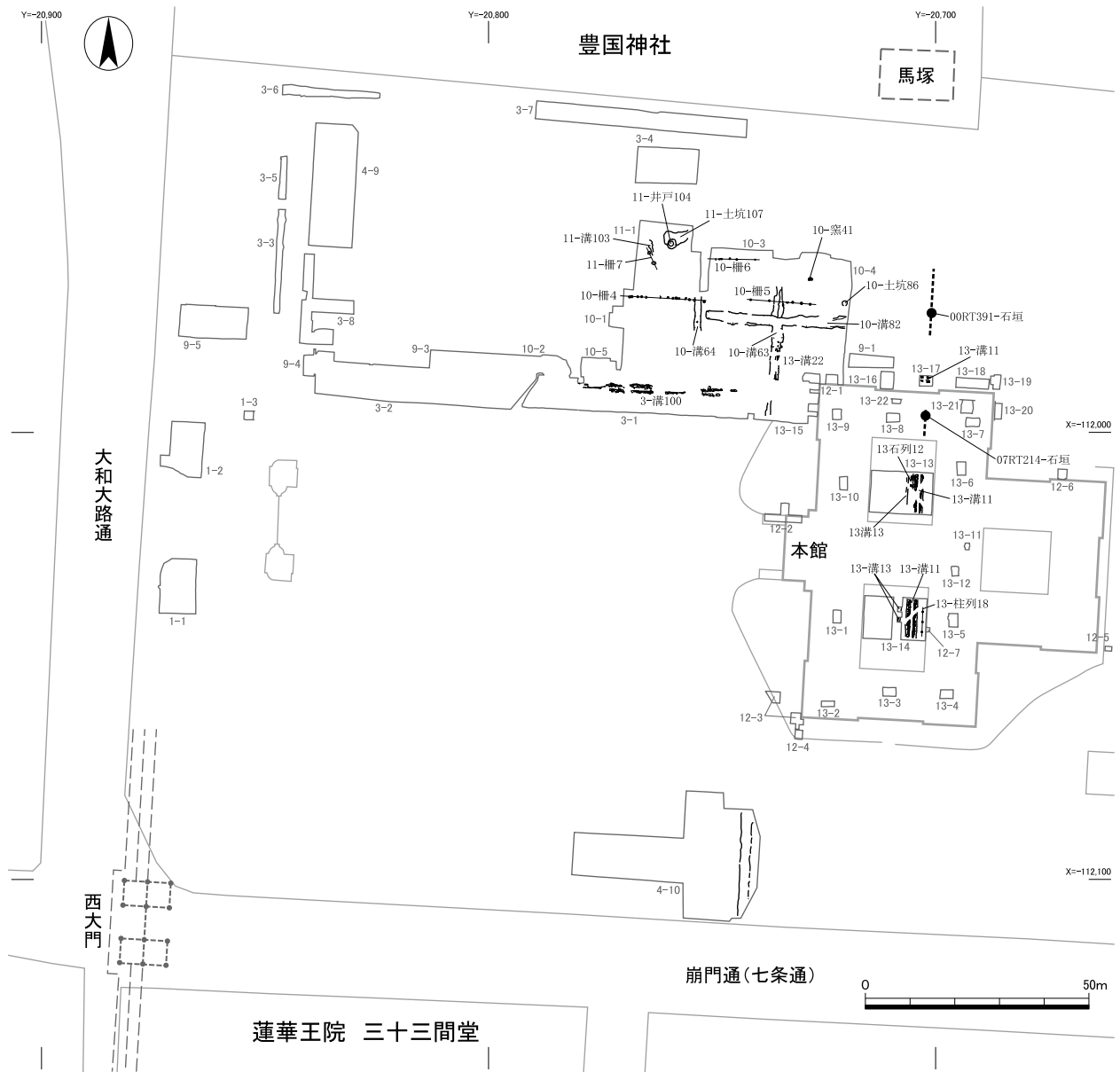


図29 江戸時代から明治時代の遺構概要図(1:1,500)

また、宮内庁書陵部蔵『恭明宮御造営掛 明治三年 同四年 工事録 内匠寮』には恭明宮の規模が記してあり、東西は二拾七間+五間壱分五里+四拾二間三分五里、南北は九拾二間三分+拾壱間半+拾三間二分とある。これを1間(6尺5寸)=1.97mとして計算すると、恭明宮敷地の東西幅は148.7m、南北幅は230.49mとなる。これを現地形と合わせると、南辺は現七条通北辺、西辺は博物館正門南北塀、北辺は豊国神社境内、東辺は博物館本館付近に相当する。

今回の調査では、これまで不明な点が多かった恭明宮に関連する遺構を具体的に認識することができ、恭明宮の位置や構造などを明らかにすることができ、成果の一つとなった。

#### 謝辞

調査にあたり、網 伸也氏(近畿大学)のご教示を得た。また、調査及び報告書作成にあたり、恭明宮について木下知威氏(日本社会事業大学)のご協力を得た。記して感謝いたします。

「恭明宮造営出来形絵図」(巻頭図版3)は、早稲田大学図書館の使用許可をいただいた。〔許可番号16-77号〕記して感謝いたします。

#### 引用・参考文献

##### あ

青山1925:青山重鑿『豊國神社誌』豊國神社、1925年

網ほか2009:網 伸也・山本雅和・田中利津子『京都国立博物館構内発掘調査報告書-法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡-』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第23冊、同研究所、2009年

網ほか2010:網 伸也・加納敬二・田中利津子・長宗繁一『法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-8、同研究所、2010年

上村ほか1994:上村和直・西大條 哲「六波羅政庁跡」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1994年

上村2004:上村和直「法住寺殿の成立と展開」『研究紀要』第9号、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2004年

##### か

河内2008:河内将芳『秀吉の大仏造立』宝蔵館、2008年

川本1988:川本重雄「法住寺殿の研究」『建築史論叢』稲垣栄三先生還暦記念論集、中央公論美術出版、1988年

上村2013:上村憲章『妙法院境内・法住寺殿跡』古代文化調査会、2013年

木下2011:木下知威『恭明宮に関する研究-建築計画および建築史、神仏分離の視点から-』2010(平成22)年度 歴史学建築助成、福武学術文化振興財団、2011年

木村1997:木村展子「豊臣秀頼の寺社造営について」『日本建築学会計画系論文集』499号、日本建築学会、1997年

京都国立博物館編1987:京都国立博物館編『史跡方広寺石畳修復工事報告』同博物館、1987年

京都国立博物館編1997:京都国立博物館編『京都国立博物館百年史』同博物館、1997年

京都市編1987:京都市編『史料京都の歴史10 東山区』平凡社、1987年

郷土趣味社編:郷土趣味社編「恭明宮と大佛の鐘」『われらの京都 第二輯』郷土趣味社、発行年月日不明、(京都府総合資料館蔵)

- 京都府立盲学校資料室『旧恭明宮瓦・恭明宮一件』（同学校資料室蔵）
- 宮内庁書陵部『恭明宮御造営掛 明治三年 同四年 工事録 内匠寮』（宮内庁蔵）
- 黒田2015：黒田日出男『洛中洛外図・舟木本を読む』角川学芸出版、2015年
- 古代學協會編1984：古代學協會編『法住寺殿跡』平安京跡研究調査報告第13輯、同協會、1984年
- 古代學協會編1994：古代學協會編『平安時代史事典』同協會、1994年
- 小檜山ほか2013：小檜山一良・津々池惣一・上村和直『法住寺殿跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告  
2012-10、同研究所、2013年
- 小森1998：小森俊寛「六波羅政庁跡」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財  
研究所、1998年
- さ
- 杉山1956 a：杉山信三「法住寺殿の御堂と蓮華王院－法住寺殿の御所に関する研究1－」『日本建築学会研究  
報告』第36号、日本建築学会、1956年
- 杉山1956 b：杉山信三「法住寺殿の規模と位置について」『建築史研究』23号、建築史研究会、1956年
- 杉山1962：杉山信三『院御所とその御堂－院家建築の研究－』奈良国立文化財研究所学報第11冊、同研究所  
1962年〔『院家建築の研究』吉川弘文館、1981年に再録〕
- 杉山1968：杉山信三「法住寺殿とその御堂」『藤原氏の氏寺とその院家－院家建築の研究－』奈良国立文化財  
研究所学報第19冊、同研究所、1968年〔『院家建築の研究』吉川弘文館、1981年に再録〕
- 菅田ほか2002：菅田 薫・吉本健吾「法住寺殿・六波羅政庁跡（00RT391）」『京都市内遺跡立会調査概報  
平成13年度』京都市文化市民局、2002年
- 鈴木ほか1978：鈴木廣司・伊藤 潔・平尾政幸『常盤仲ノ町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所  
調査報告－Ⅲ、同研究所、1978年
- 鈴木ほか1996：鈴木廣司・山本雅和「六波羅政庁跡」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京  
都市埋蔵文化財研究所、1996年
- た
- 高橋2010：高橋 潔『法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-  
10、同研究所、2010年
- 高橋1991：高橋慎一郎「武家地六波羅の成立」『日本史研究』352号、日本史研究会、1991年
- 田中ほか2000：田中利津子・近藤知子・大立目 一「六波羅政庁跡」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概  
要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2000年
- 田中ほか2002：田中利津子・近藤知子・大立目 一「六波羅政庁跡」『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概  
要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2002年
- 田中2003：田中利津子「六波羅政庁跡」『平成12年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化  
財研究所、2003年
- 田中2004：田中利津子「六波羅政庁跡」『平成13年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化  
財研究所、2004年
- 田中ほか2005 a：田中利津子・西村洋子「六波羅政庁跡1」『平成15年度 財団法人京都市埋蔵文化財研究  
所年報』同研究所、2005年
- 田中ほか2005 b：田中利津子・西村洋子・清藤玲子「六波羅政庁跡2」『平成15年度 財団法人京都市埋蔵  
文化財研究所年報』同研究所、2005年
- 張1998：張 洋一「東京国立博物館保管「京都大仏雛形」について－寛文期方広寺大仏の再興に関連して－」



『MUSEUM』554号、東京国立博物館、1998年

辻1926：辻 善之助「神仏分離の外観」『明治維新神仏分離資料』第一巻、1926年〔1970年復刻〕

辻1952：辻 善之助「大仏殿造営」『日本佛教史 第7巻 近世編之一』岩波書店、1952年

東寺宝物館編1995：東寺宝物館編『東寺の建築物－古建築からのメッセージ』同宝物館、1995年

な

内藤ほか1982：内藤 昌・中村利則「ミヤコの変貌－聚楽第と大仏殿－」『近世風俗図譜第9巻 祭礼（二）』  
小学館、1982年

長宗2010：長宗繁一「方広寺大仏殿の復元試案」『法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡』京都市埋蔵文化財  
研究所発掘調査報告2009－8、同研究所、2010年

は

平岡1986：平岡定海「方廣寺の成立とその性格」『大手前女子大学論集』第二十号、大手前女子大学、1986年  
ま

三鬼1986：三鬼清一郎「方広寺大仏殿の造営に関する一考察」『中世・近世の国家と社会』東京大学出版会、  
1986年

水野1988：水野信太郎「れんがの形状と寸法」『れんがと建物』株式会社INAX、1988年

南2014：南 孝雄「方広寺跡・六波羅政庁跡・法住寺殿跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成25年度』京都  
市文化市民局、2014年

や

山崎2008：山崎信二『近世瓦の研究』同成社、2008年

吉本2008：吉本健吾「法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡（07RT214）」『京都市内遺跡立会調査報告 平  
成19年度』京都市文化市民局、2008年

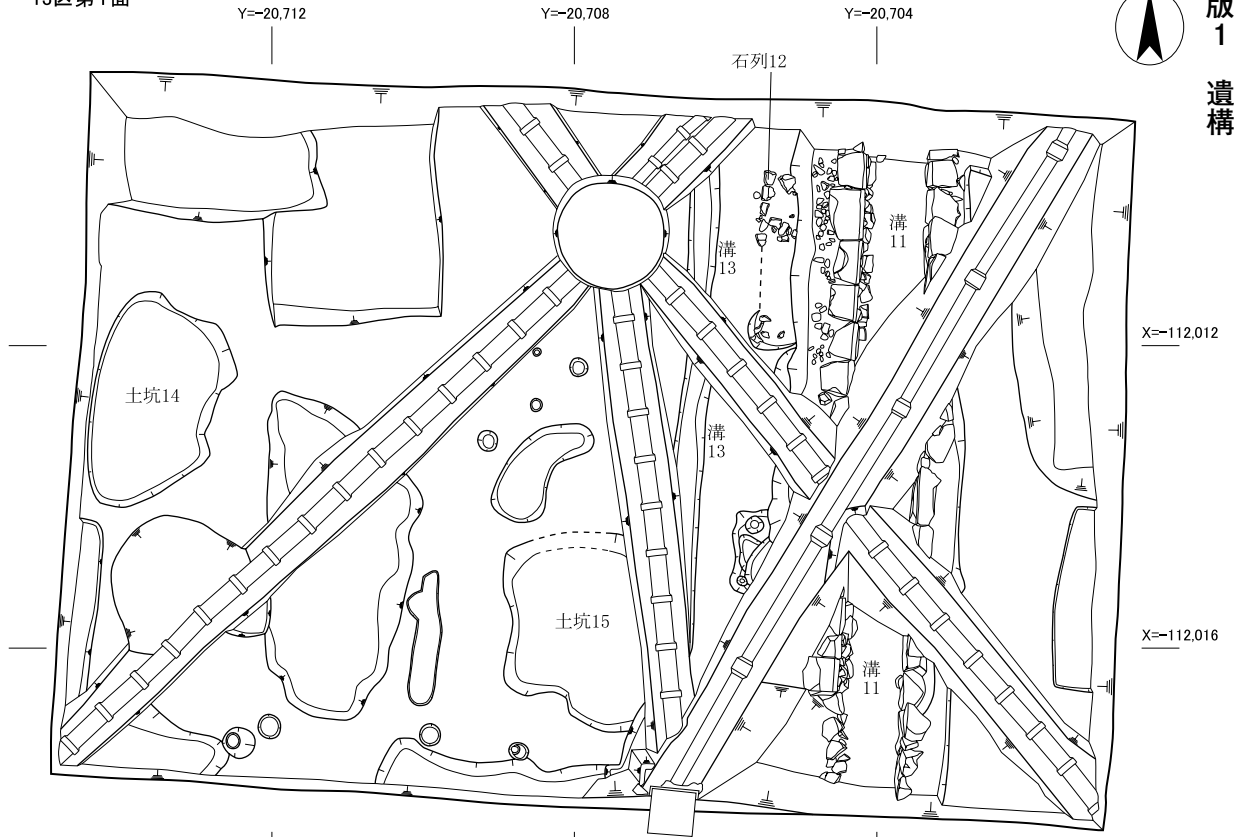
わ

早稲田大学図書館「恭明宮造営出来形絵図」『中御門家文書恭明宮関係書類、古典籍総合データベース』（同大  
学図書館蔵）

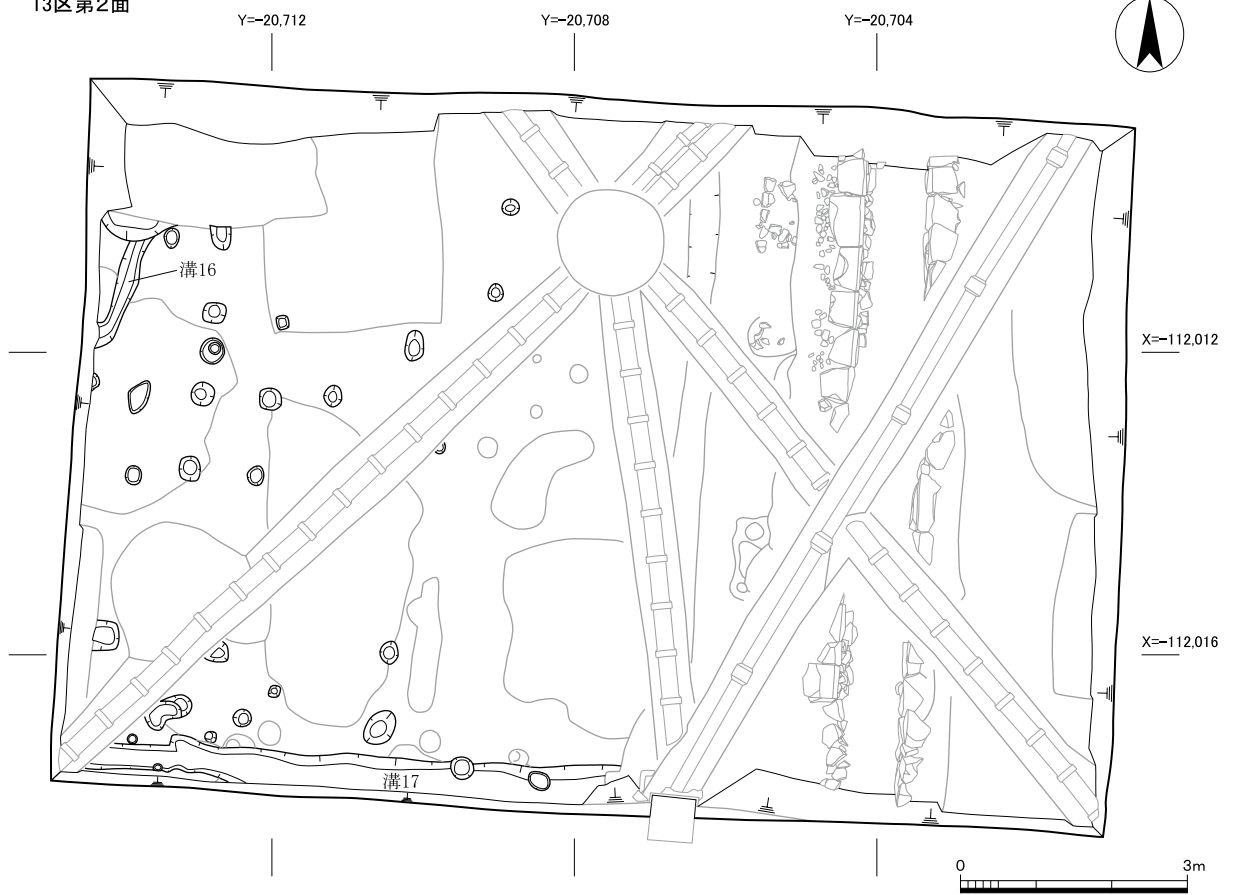
# 圖 版



13区第1面



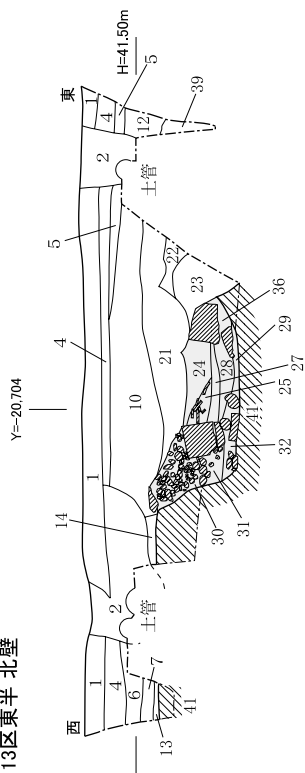
13区第2面



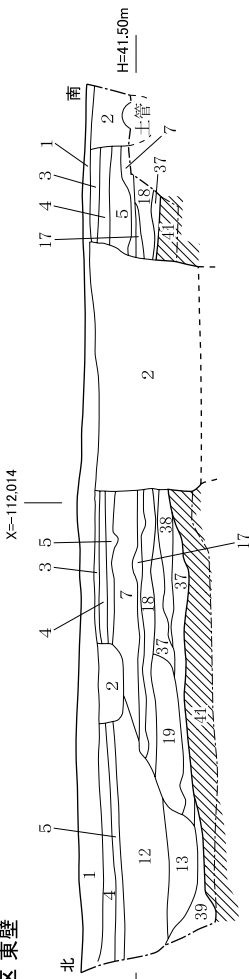
13区平面图 (1 : 100)



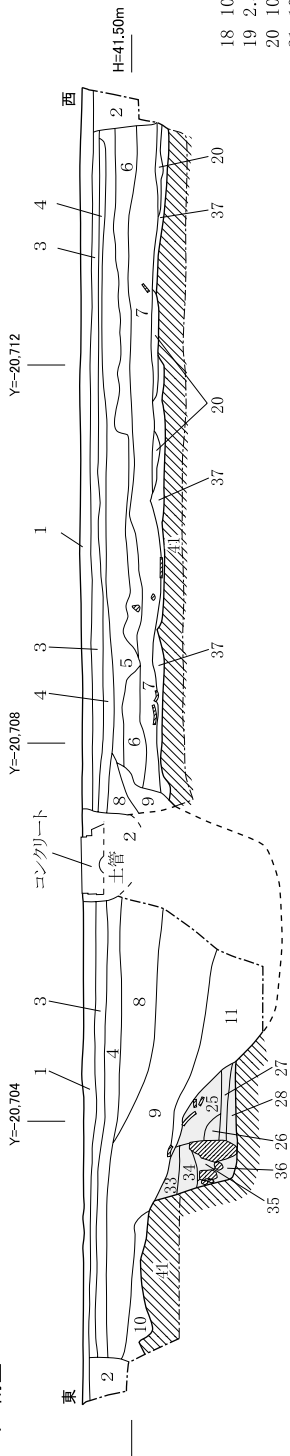
13区東半北壁



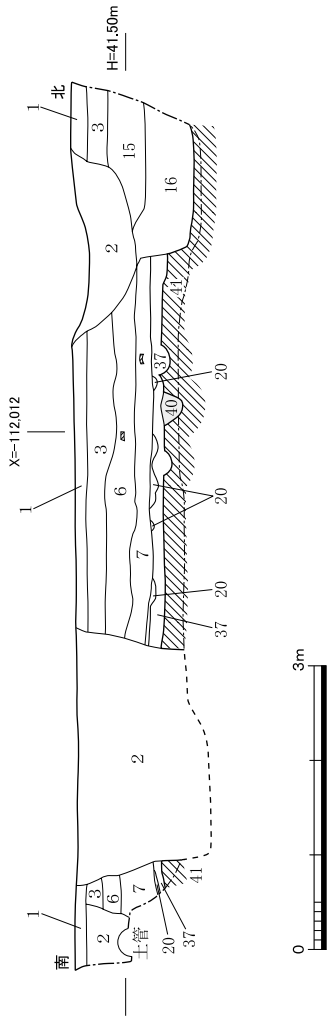
13区東壁



13区南壁



13区西壁



1 現代盛土(I層)

- 2 礫乱
- 3 10YR4/6 褐色砂泥
- 4 10YR6/6 明黄褐色砂泥
- 5 10YR5/8 黄褐色砂泥
- 6 10YR5/6 黄褐色砂泥
- 7 10YR4/3 にぶい黄褐色黄色粘土ブロック混
- 8 10YR5/8 黄褐色粗砂 φ5cm以下礫・瓦混
- 9 10YR5/6 黄褐色粗砂 黄色粘土混
- 10 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト φ6cm以下礫・瓦片混
- 11 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂
- 12 10YR5/6 黄褐色砂泥
- 13 10YR4/6 褐色砂泥
- 14 10YR3/3 暗黄褐色砂泥
- 15 10YR5/6 黄褐色砂泥
- 16 2.5Y5/4 黄褐色粘質土
- 17 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥

(II層)

- 18 10YR3/4 暗褐色砂泥 黄色粘土ブロック混
- 19 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 瓦多量混
- 20 10YR5/2 灰黄褐色粘土
- 21 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂
- 22 10YR5/6 黄褐色粗砂
- 23 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 粗砂混
- 24 10YR4/4 褐色砂泥
- 25 2.5Y6/6 明黄褐色砂泥 瓦多量混
- 26 10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂
- 27 10YR5/2 灰黄褐色粘土 (灰色粘土)
- 28 10YR4/6 褐色粘土
- 29 10YR6/6 明黄褐色砂泥 やや粘質
- 30 10YR5/6 黄褐色粗砂 石多量混
- 31 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 石多量混
- 32 10YR6/6 明黄褐色粘土 石混
- 33 10YR5/6 黄褐色粘土
- 34 10YR6/6 明黄褐色粘土
- 35 2.5Y4/6 オリーブ褐色粘土
- 36 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥
- 37 10YR4/6 褐色砂泥 やや粘質
- 38 10YR6/6 明黄褐色シルト
- 39 10YR4/2 灰黄褐色粘土
- 40 10YR5/8 黄褐色粗砂 (溝16)
- 41 10YR6/8 明黄褐色砂泥シルト (V層、地山)

(溝11)

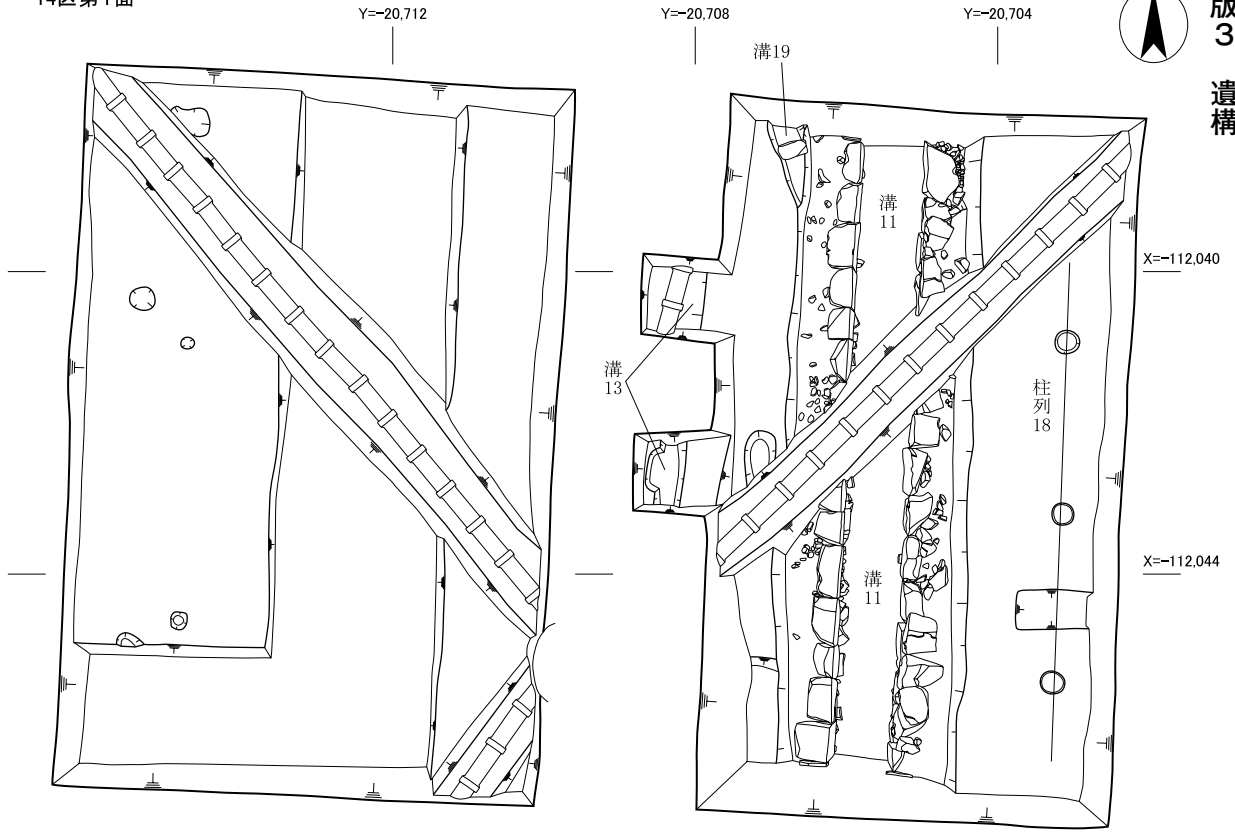
- 37 10YR4/6 褐色砂泥 やや粘質
- 38 10YR6/6 明黄褐色シルト
- 39 10YR4/2 灰黄褐色粘土
- 40 10YR5/8 黄褐色粗砂 (溝16)
- 41 10YR6/8 明黄褐色砂泥シルト (V層、地山)

(溝11掘形)

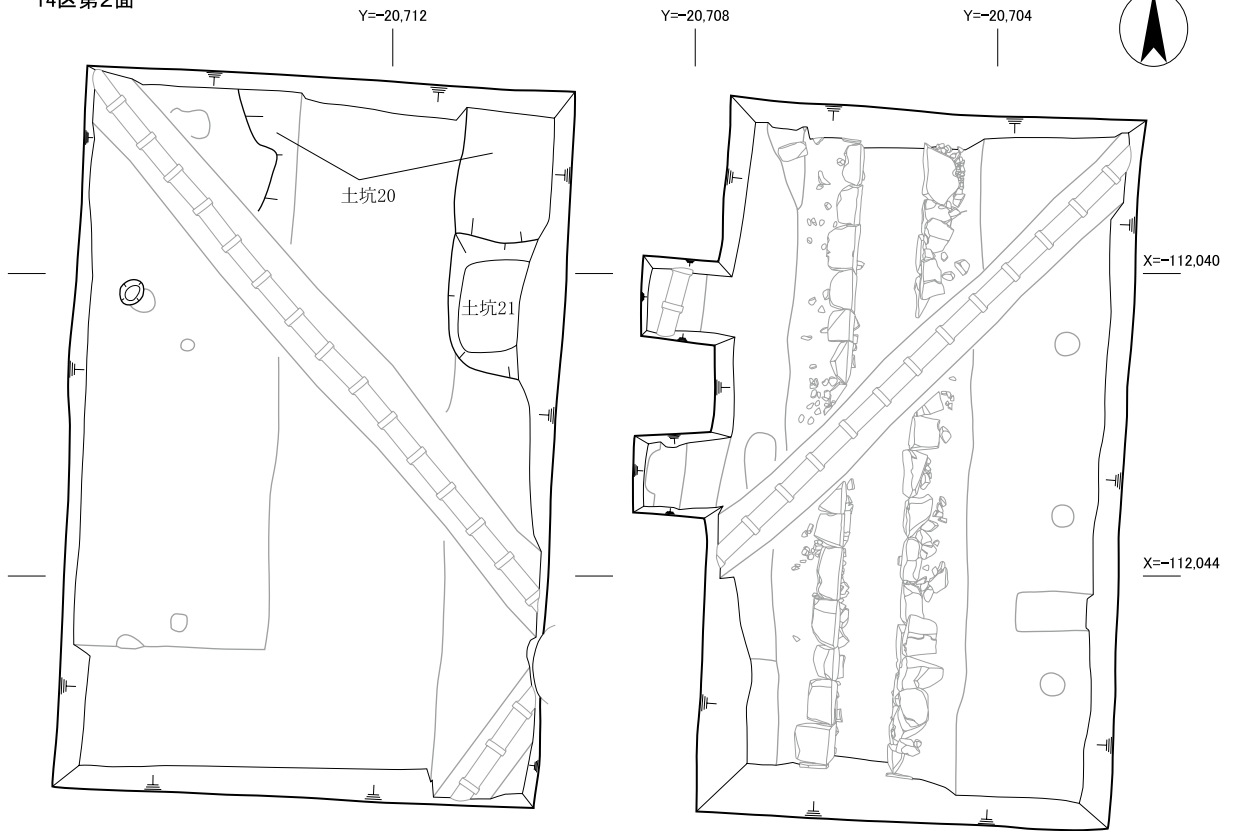
- 37 10YR4/6 褐色砂泥 やや粘質
- 38 10YR6/6 明黄褐色シルト
- 39 10YR4/2 灰黄褐色粘土
- 40 10YR5/8 黄褐色粗砂 (溝16)
- 41 10YR6/8 明黄褐色砂泥シルト (V層、地山)

13区断面図 (1 : 80)

14区第1面

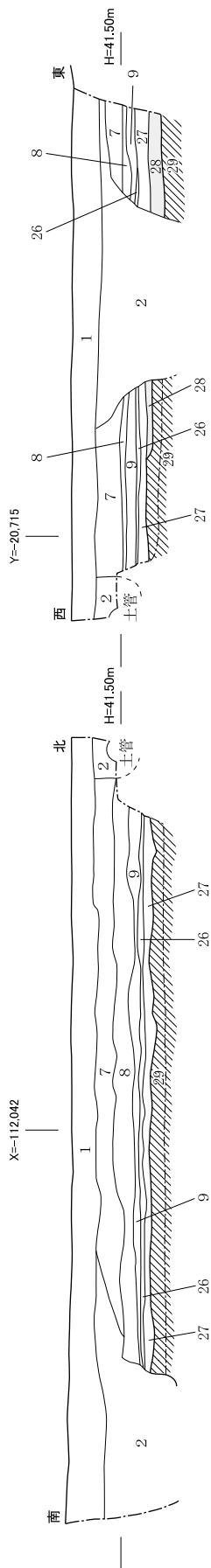


14区第2面

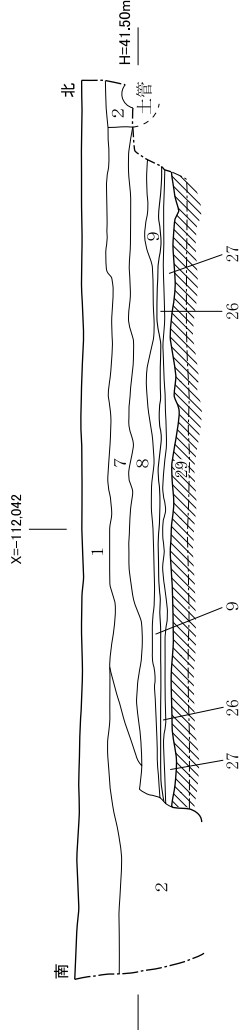


14区平面图 (1 : 100)

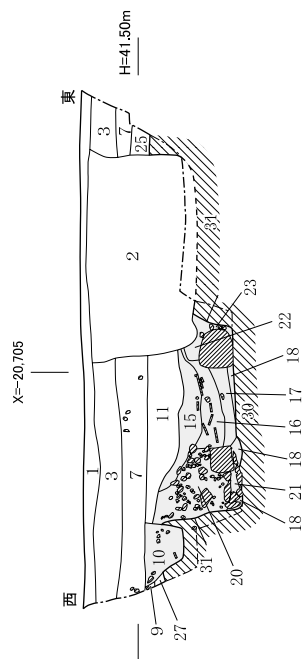
14区西半 西壁



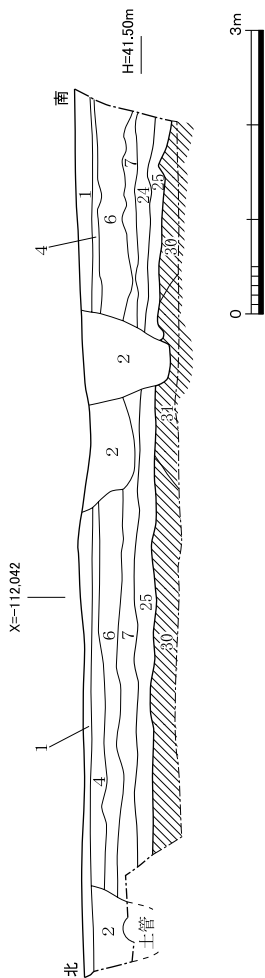
14区西半 北壁



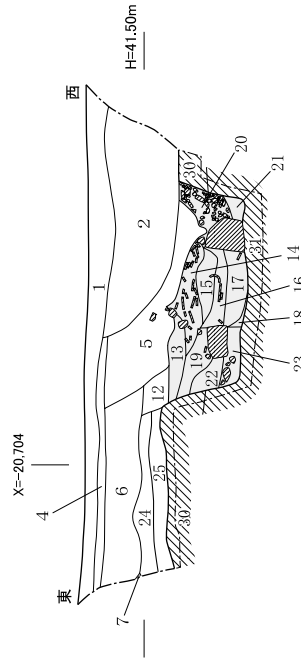
14区東半 北壁



14区東半 東壁



14区東半 南壁



1 現代盛土 (I 層)

- 2 攪乱
- 3 10YR5/6 黄褐色砂泥
- 4 10YR6/6 明黄褐色砂泥
- 5 10YR6/6 明黄褐色シルト
- 6 2.5Y5/6 黄褐色砂泥 粗砂混
- 7 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 やや粘質
- 8 2.5Y5/6 黄褐色粗砂
- 9 10YR5/6 黄褐色砂泥 やや粘質
- 10 10YR4/4 褐色砂泥 石・瓦混 (溝19)
- 11 10YR4/4 褐色砂泥・10YR5/6 黄褐色砂泥
- 12 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥
- 13 2.5Y6/4 にぶい黄シルト
- 14 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 瓦多量混
- 15 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 やや粘質 瓦混
- 16 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土 粗砂混 瓦多量混 (灰色粘土)
- 17 2.5Y6/4 にぶい黄褐色砂

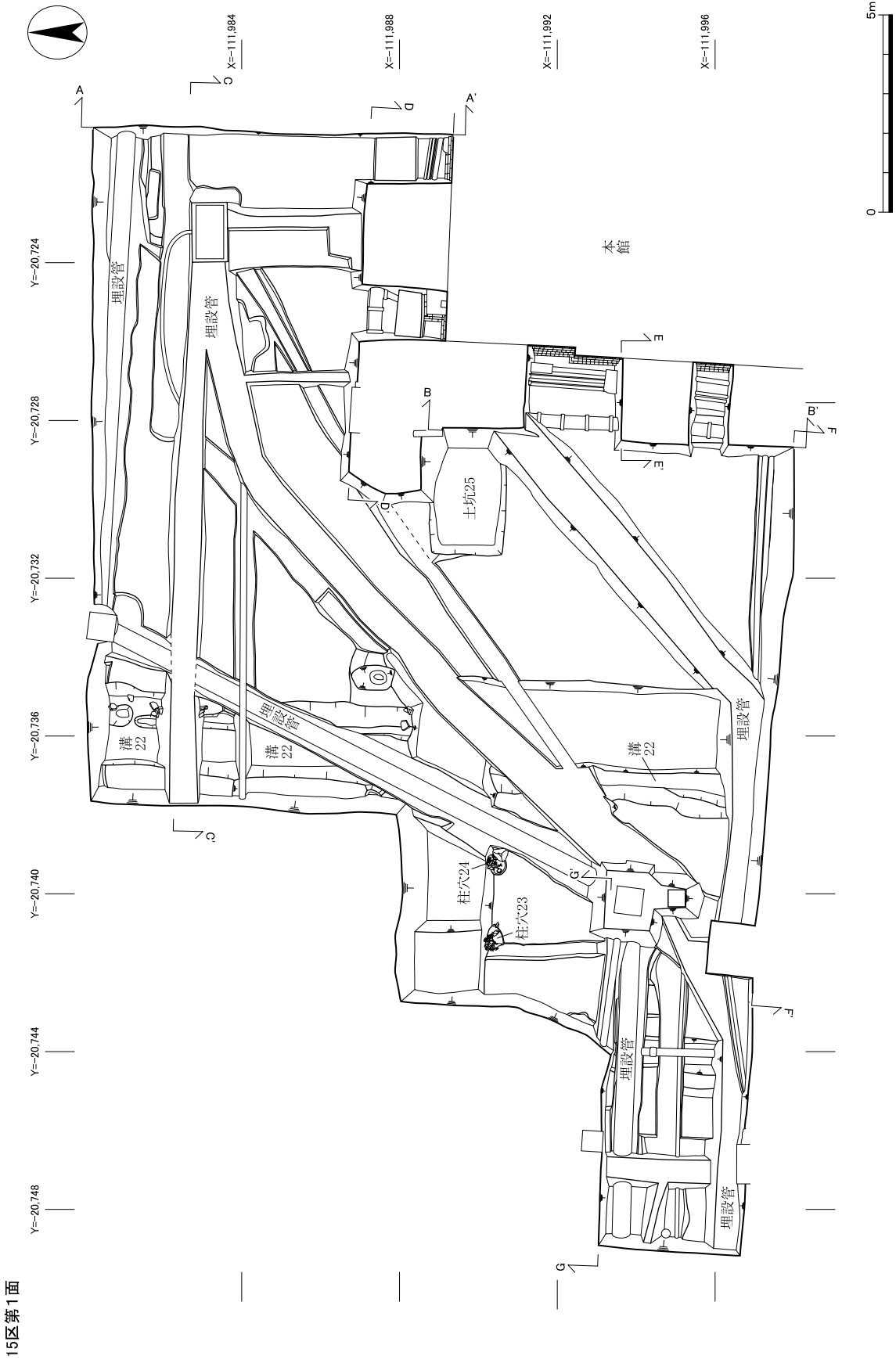
(II 層)

- 18 10YR6/4 にぶい黄褐色粘土 粗砂混
- 19 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
- 20 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 石多量混 (溝11掘形)
- 21 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土
- 22 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土
- 23 10YR4/4 褐色粘土
- 24 10YR3/4 暗褐色砂泥 (III層)
- 25 10YR5/6 黄褐色砂泥 上部に灰色粘土層混
- 26 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土
- 27 10YR4/6 褐色砂泥
- 28 10YR4/4 褐色砂泥 やや粘質 (土坑20)
- 29 2.5Y6/4 にぶい黄褐色粘土
- 30 2.5Y5/6 黄褐色シルト
- 31 2.5Y6/6 明黄褐色砂泥 赤色酸化砂混

(溝11)

- 28 10YR4/4 褐色砂泥 やや粘質 (土坑20)
- 29 2.5Y6/4 にぶい黄褐色粘土
- 30 2.5Y5/6 黄褐色シルト
- 31 2.5Y6/6 明黄褐色砂泥 赤色酸化砂混





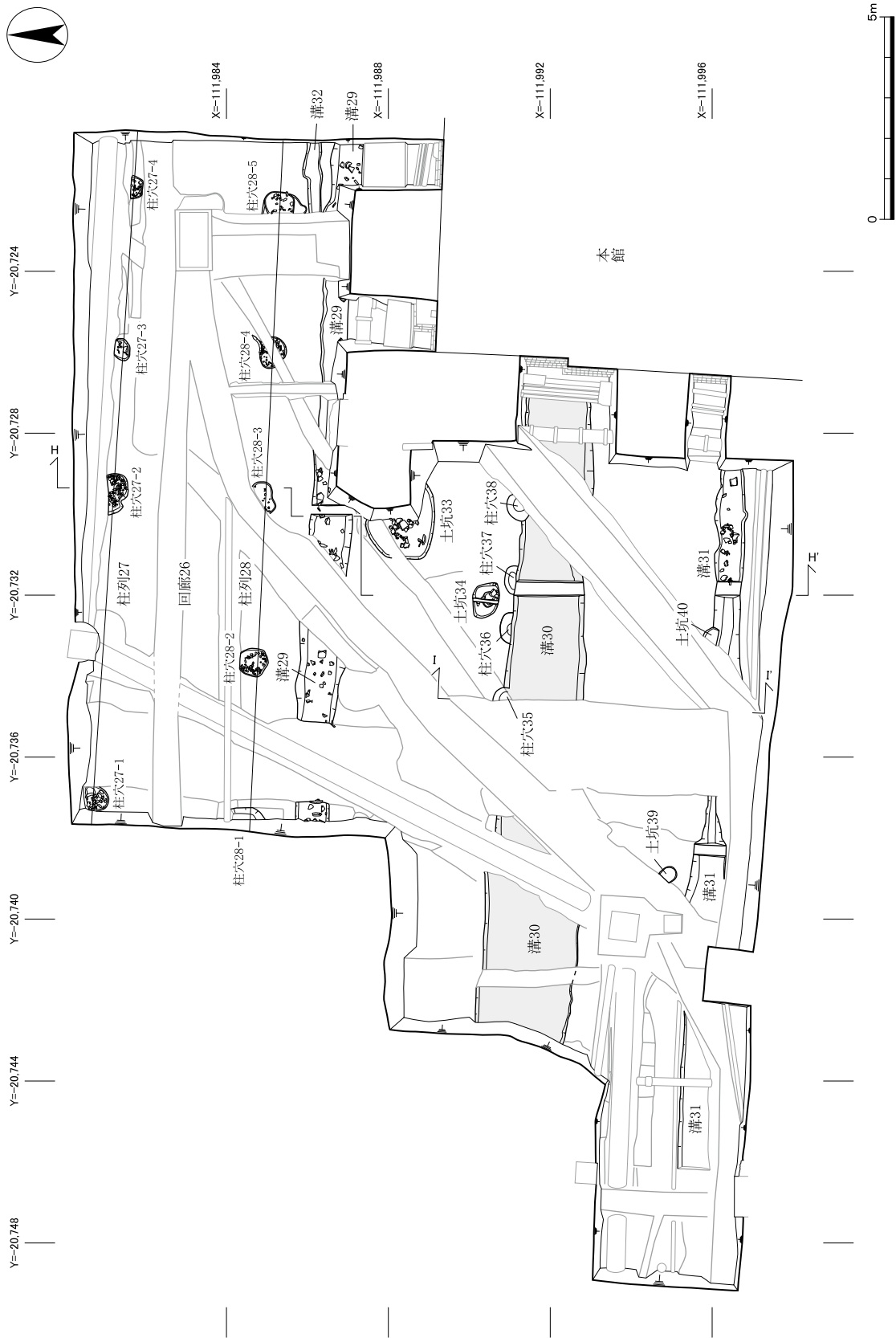
15区第1面

15区第1面平面図 (1 : 150)

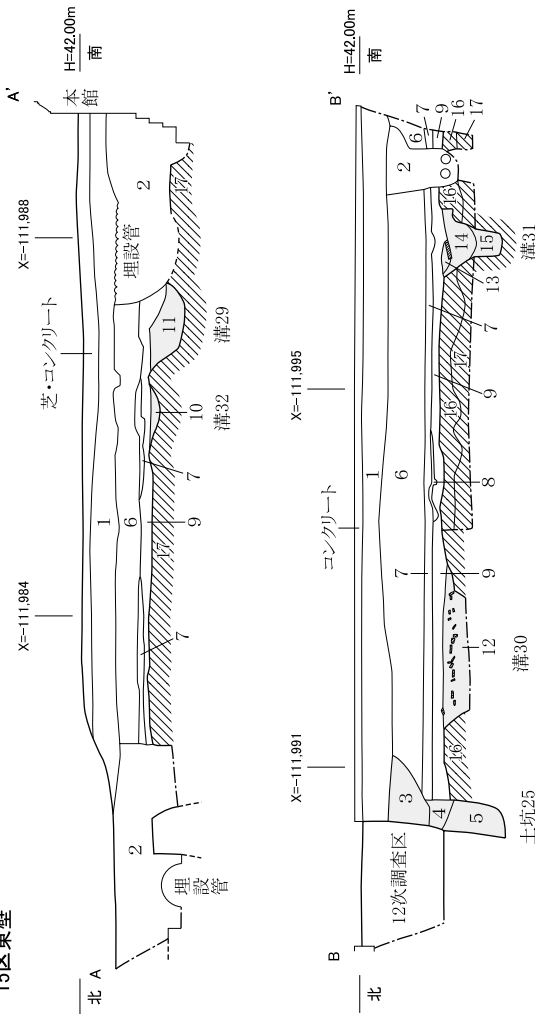


15区第2面

15区第2面平面図 (1 : 150)



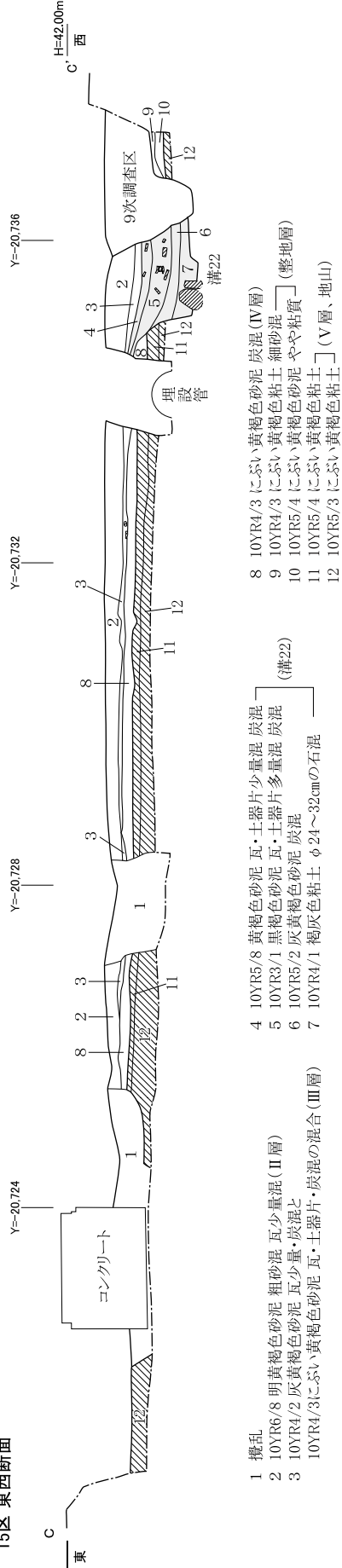
15区東壁



- 1 現代盛土 (I層)
- 2 攪乱
- 3 10YR5/6 黄褐色粘土と10YR5/8 黄褐色泥土の混合 (土坑25)
- 4 10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂
- 5 10YR4/4 褐色粘土 瓦混
- 6 10YR4/6 褐色砂泥 (II層)
- 7 10YR4/4 褐色砂泥 10YR3/3 暗褐色泥砂ブロック混 10YR6/6 明黄褐色泥砂 (III層)
- 8 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥 10YR6/6 明黄褐色泥砂ブロック混
- 9 10YR4/4 褐色砂泥 φ2~5cm 礫少量混 炭混 (IV層)
- 10 10YR4/6 褐色砂泥 (溝32)
- 11 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土 瓦少量混 (溝29)
- 12 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土 瓦多量混 (溝30)
- 13 10YR5/6 黄褐色砂泥 瓦混
- 14 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥と10YR3/4 暗褐色砂泥の混合 (溝31)
- 15 10YR3/3 暗褐色砂泥 φ4~9cm 石混
- 16 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥と10YR5/6 黄褐色砂泥の混合 (V層、地山)
- 17 10YR3/4 暗褐色泥砂ブロック混
- 18 10YR5/8 黄褐色砂泥と10YR6/4 にぶい黄褐色砂泥の混合

※ A-A'、B-B' の位置は図版5参照

15区東西断面

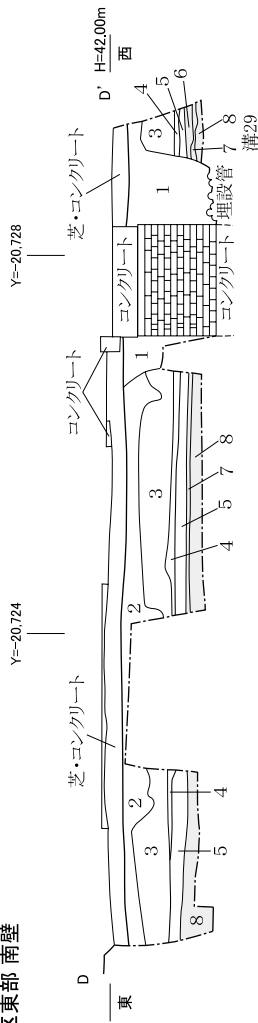


- 1 攪乱
- 2 10YR6/8 明黄褐色砂泥 粗砂混 瓦少量混 (II層)
- 3 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 瓦少量・炭混と 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 瓦・土器片・炭混の混合 (III層)
- 4 10YR5/8 黄褐色砂泥 瓦・土器片少量混 炭混
- 5 10YR3/1 黒褐色砂泥 瓦・土器片多量混 炭混
- 6 10YR5/2 灰黄褐色砂泥 炭混
- 7 10YR4/1 褐色粘土 φ24~32cmの石混 (溝22)
- 8 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 炭混 (IV層)
- 9 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土 細砂混 (整地層)
- 10 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 やや粘質
- 11 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土
- 12 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土 (V層、地山)

※ C-C' の位置は図版5参照



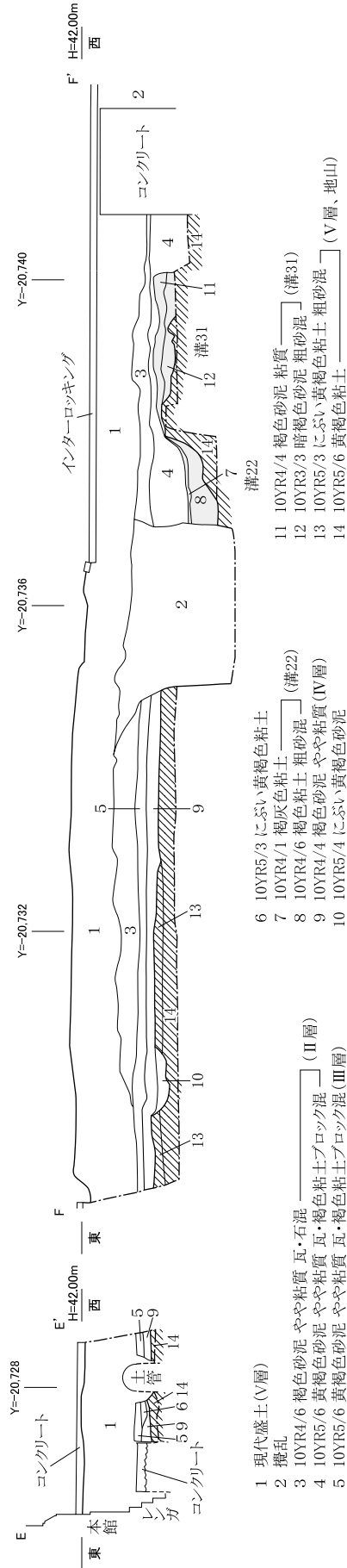
15区東部 南壁



- 1 攪乱
- 2 現代埋土(Ⅰ層)
- 3 10YR4/6 褐色砂泥(Ⅱ層)
- 4 10YR4/4 褐色砂泥(Ⅲ層)
- 5 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 粗砂混(Ⅳ層)
- 6 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 粗砂混(Ⅳ層)
- 7 10YR5/6 黄褐色粘土 瓦少量混
- 8 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土 瓦少量混

※D-D'の位置は図版5参照

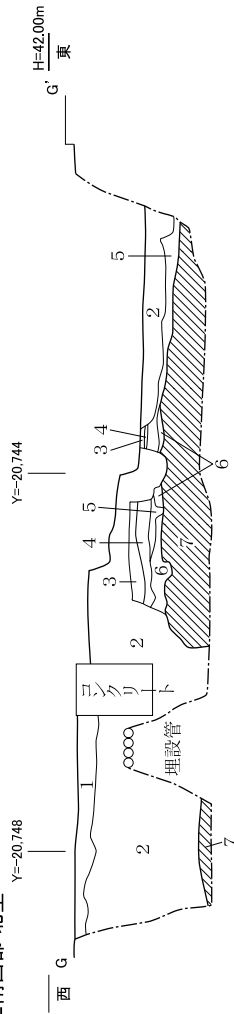
15区西部 南壁



- 1 現代盛土(V層)
- 2 攪乱
- 3 10YR4/6 褐色砂泥 やや粘質 瓦・石混
- 4 10YR5/6 黄褐色砂泥 やや粘質 瓦・褐色粘土ブロック混(Ⅲ層)
- 5 10YR5/6 黄褐色砂泥 やや粘質 瓦・褐色粘土ブロック混(Ⅲ層)
- 6 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土
- 7 10YR4/1 褐灰色粘土
- 8 10YR4/6 褐色粘土 粗砂混
- 9 10YR4/4 褐色砂泥 やや粘質(Ⅳ層)
- 10 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥
- 11 10YR4/4 褐色砂泥 粘質
- 12 10YR3/3 暗褐色砂泥 粗砂混
- 13 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土 粗砂混
- 14 10YR5/6 黄褐色粘土

※E-E', F-F'の位置は図版5参照

15区南西部 北壁



- 1 現代盛土(Ⅰ層)
- 2 攪乱
- 3 10YR5/6 黄褐色砂泥 やや粘質 瓦・褐色粘土ブロック混(Ⅲ層)
- 4 10YR4/4 褐色砂泥 やや粘質(Ⅳ層)
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 砂混
- 6 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥
- 7 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土 粗砂混(Ⅴ層、地山)

※G-G'の位置は図版5参照



15区断面図2 (1:80)



1 1区全景（東から）



2 2区全景（東から）



3 3区全景（東から）



4 4区全景（西から）



5 5区全景（南から）



6 6区全景（北から）



1 7区全景（東から）



2 8区全景（東から）



3 9区全景（東から）



4 10区全景（北から）



5 11区全景（南から）



6 12区全景（南から）



1 13区西半全景（北から）



2 13区東半全景（北から）



1 13区東半北壁 溝11断面 (南から)



2 14区西半全景 (南から)



1 14区東半全景（南から）



2 14区東半南壁 溝11断面（北から）





1 15区第1面全景（北東から）



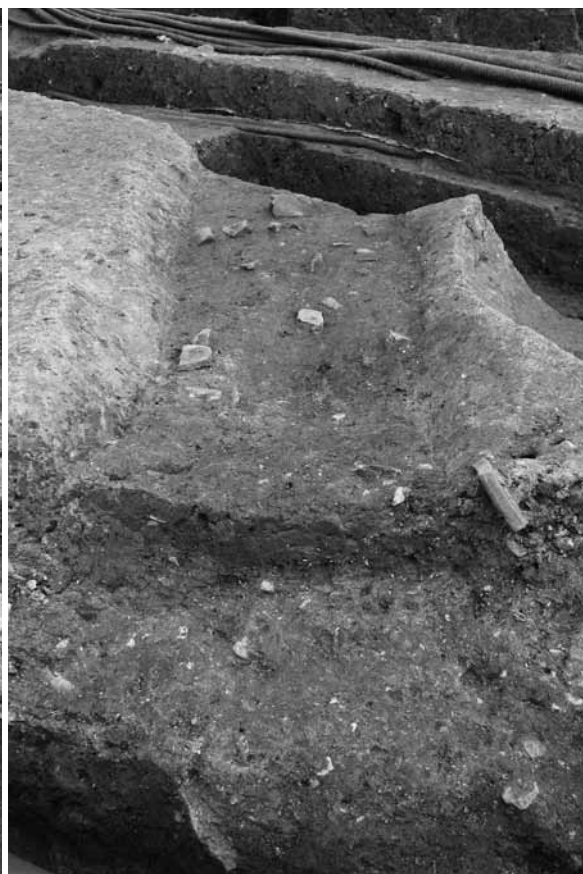
2 15区溝22（北から）



1 15区第2面全景（北東から）



2 15区柱穴23・24（北西から）



3 15区溝29（西から）



1 15区溝30 (西から)



2 15区溝30断面 (西から)



1 15区柱穴27-1 (北東から)



2 15区柱穴27-2 (東から)



3 15区柱穴27-3 (東から)



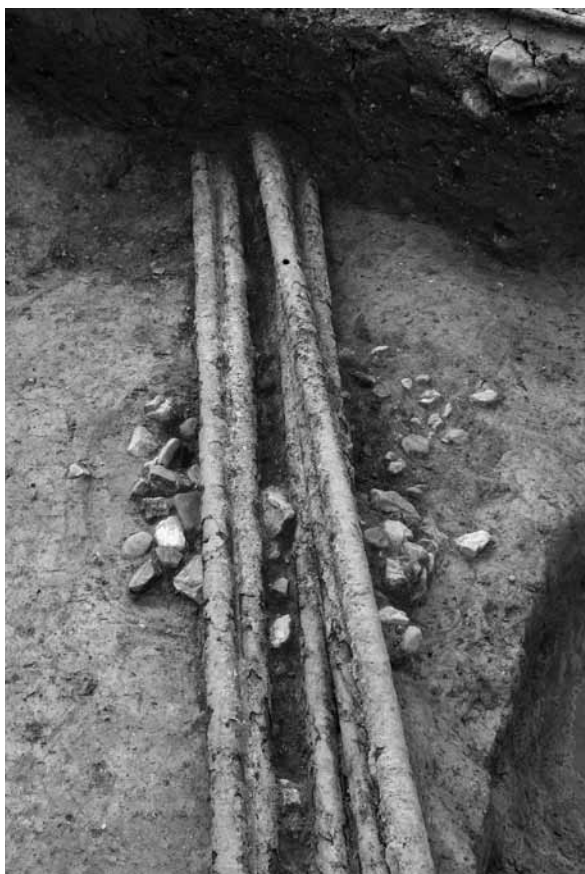
4 15区柱穴27-4 (東から)



1 15区柱穴28-2 (東から)



2 15区柱穴28-3 (南東から)



3 15区柱穴28-4 (東から)



4 15区柱穴28-5 (北東から)



1 15区北西部東西断面（北西から）



2 16区全景（北西から）



1 17区全景（北西から）



2 18区全景（東から）



1 19区全景（南東から）



2 20区全景（北東から）





1 21区全景（東から）



2 22区全景（東から）



土器類・ガラス製品



瓦類・煉瓦

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ほうじゅうじどのあと・ろくはらせいちょうあと・ほうこうじあと							
書名	法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2015-14							
編著者名	上村和直・山下大輝							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2016年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほうじゅうじどのあと 法住寺殿跡	きょうとしひがしやまく 京都市東山区	26100	546	34度	135度	2015年7月 13日～2016 年3月29日	643㎡	建物免震 改修工事
ろくはらせいちょうあと 六波羅政庁跡	ちややちよう 茶屋町527番地		540	59分	46分			
ほうこうじあと 方広寺跡			541	24秒	23秒			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
法住寺殿跡	寺院跡 離宮跡	鎌倉時代 ～室町時代	土坑、溝	瓦類、土器類		区画溝・土坑を検出した。		
六波羅政庁跡	都城跡 邸宅跡							
方広寺跡	寺院跡	安土桃山時代 ～江戸時代中期	回廊、溝、土坑、 柱穴	土師器、瓦器、陶器、 磁器、瓦類、石製品		方広寺南回廊・南 雨落溝及び南側施 設が明らかとなっ た。		
		江戸時代後期 ～明治時代	溝、築地、柱列	土師器、陶器、磁器、 瓦類、ガラス製品、石 製品、建築部材		恭明宮に関する 溝・築地・柱列な どが明らかとなっ た。		

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015-14

法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡

発行日 2016年3月31日

編集行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地  
〒604-0093 TEL 075-256-0961